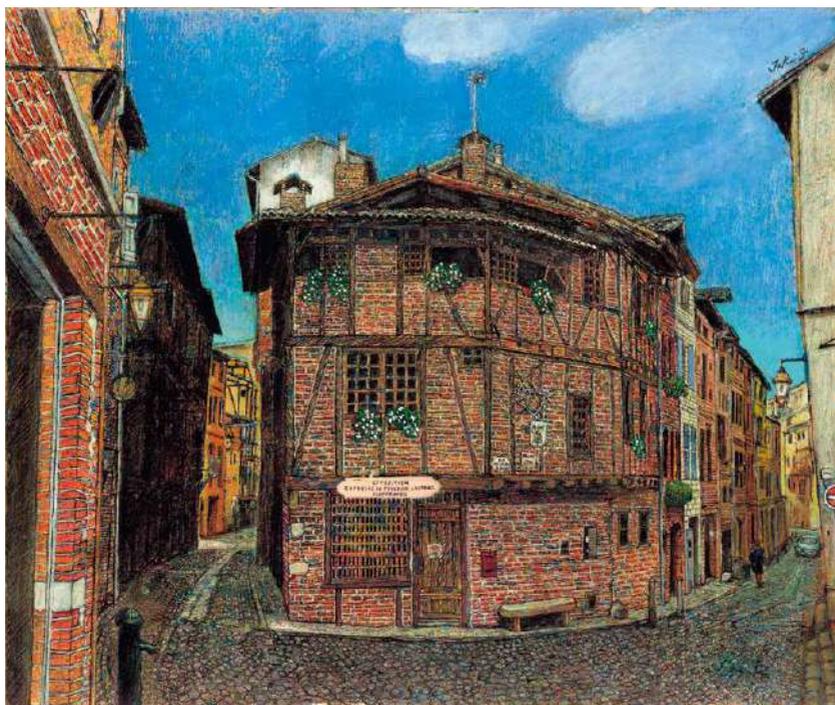


悠遊

創刊三十周年記念号



企業OBペンクラブ

四十雀

散りし桜に
何思う

下山 健夫



ネモフィラを
見られぬ乙女
恋破れ

清水 勝

悠遊

創刊三十周年記念号

企業OBペンクラブ

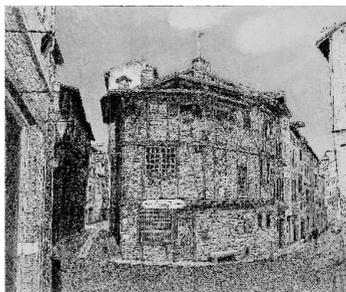
表紙の絵「ロートレックの故郷アルビの街角」

(ペン画・色鉛筆・アクリル絵具着色)

福本 多佳子

2012年4月、熟女4人が早春のトゥールーズ空港に降り立った。2週間を超えるドライブ旅行の始まりだ。

アルビ旧市街は大聖堂と周囲に残る赤煉瓦と木枠の家並みで有名。画像で何度も目にした大きな家の前で足が止まった。これが今回の絵のモデル。油絵からペン画への移行でやっと長年のモチーフと向かい合った。



目 次

| | | |
|---------------------------------|-------|-------|
| ▽巻頭言…………… | 塚田 | 實 4 |
| Ⅱ 特集Ⅱ『悠遊』誕生から三十年 | | |
| ▽『悠遊』創刊三十周年によせて…………… | 西川 | 知世 10 |
| ▽『悠遊』編集記 ～第十四号から第二十号まで～…………… | 大平 | 忠 12 |
| Ⅱ 特定テーマⅡ 私の一番、古い記憶 | | |
| ▽八幡神社の迷子…………… | 安藤 | 晃二 20 |
| ▽ピカドン…………… | 池田 | 隆 22 |
| ▽孫へのプレゼント…………… | 市川 | 忠夫 24 |
| ▽私の一番古い記憶…………… | 上田 | 信隆 26 |
| ▽古い記憶はすべり台から始まった…………… | 宇敷 | 辰男 28 |
| ▽古い記憶…………… | 大森 | 海太 30 |
| ▽母の背中…………… | 木村 | 敏美 32 |
| ▽三歳の記憶…………… | 児玉 | 寛嗣 34 |
| ▽京都駅火災と大内小学校のこと…………… | 清水 | 勝 36 |
| ▽古い記憶…………… | 志村 | 良知 38 |
| ▽ある戦後…………… | 首藤 | 静夫 40 |
| Ⅱ 自由テーマⅡ | | |
| ▽私の青少年時代…………… | 田原 | 敬 42 |
| ▽二つの古い記憶…………… | 長尾進一郎 | 44 |
| ▽六甲山麗・音屋の思い出…………… | 西川 | 武彦 46 |
| ▽マイファーストメモリー インライフ…………… | 山縣 | 正靖 48 |
| ▽大泉潤さんを偲んで…………… | 中村 | 晃也 50 |
| ▽オペラ座の怪人…………… | 吉田 | 真人 52 |
| ▽そうだ京都に行こう…………… | 矢澤 | 正二 54 |
| ▽グローバル・ワクチン・パスポート…………… | 森田 | 晃司 56 |
| ▽くすぐられたら笑っちゃう…………… | 三 | 春 58 |
| ▽ゴールはいずこに…………… | 松谷 | 隆 60 |
| ▽身延山参詣…………… | 松田 | 昌康 62 |
| ▽シルバーとプラチナ…………… | 松浦 | 純子 64 |
| ▽今日は！ ファウスト博士…………… | 藤原 | 道夫 66 |
| ▽仏像の顔…………… | 浜田 | 道雄 68 |
| ▽母の手紙と私のエンディングノート…………… | 浜口須美子 | 70 |
| ▽フェルメールを訪ねて…………… | 野瀬 | 隆平 72 |
| ▽資本主義経済の変貌…………… | 野上 | 浩三 74 |
| ▽古い初め顛末…………… | 新田由紀子 | 76 |
| ▽五十年目の修学旅行…………… | 中村 | 晃也 78 |

| | | |
|------------------------|-------|-----|
| ▽コロナ・コロナ・コロナ…………… | 富岡喜久雄 | 80 |
| ▽老いの壁を越える…………… | 塚田 實 | 82 |
| ▽量子技術の時代…………… | 杉浦 右藏 | 84 |
| ▽クラシック音楽の新しい試み…………… | 下山 健夫 | 86 |
| ▽産業技術の系統化調査 | | |
| ↳重要資料の技術遺産登録…………… | 荒野 喆也 | 88 |
| ▽庭仕事奮闘記…………… | 川村 邦生 | 90 |
| ▽長崎屋と室町三丁目交差点…………… | 川口ひろ子 | 92 |
| ▽南アルプス荒川岳から赤石岳へ | | |
| ↳山旅回想…………… | 大月 和彦 | 94 |
| ▽思えば遠くへ来たもんだ…………… | 大津 隆文 | 96 |
| ▽考古学雑感 | | |
| ↳縄文時代と「ウルシ」のはなし…………… | 大越 浩平 | 98 |
| ▽花の下にて〜旅立つWさんへ…………… | 内田 満夫 | 100 |
| ▽戦後七十七年を顧みて…………… | 稲宮 健一 | 102 |
| ▽サマーコース…………… | 池松 孝子 | 104 |
| ▽将棋とわたし…………… | 新井 良侑 | 106 |
| ▽犬を飼いたいけれど…………… | 宮原由利子 | 108 |
| ▽永住町を通り過ぎた文人たち…………… | 長谷川 修 | 110 |
| ▽大国のはざまに生きたサヴォイア家…………… | 松浦 俊博 | 112 |
| ▽細谷博さんを偲んで…………… | 塚田 實 | 114 |

II 創作短編 II

| | | |
|----------------------|-------|-----|
| ▽維新前夜…………… | 大塚 喜子 | 116 |
| ▽星に願いを…………… | 内藤真理子 | 121 |
| ▽綾子の初夢(がん治療体験記)…………… | 福本多佳子 | 124 |

II 活動報告 II

| | | |
|----------------------|-------|-----|
| ▽何でも書こう会…………… | …………… | 130 |
| ▽掌編小説勉強会…………… | …………… | 131 |
| ▽サロン21…………… | …………… | 132 |
| ▽ペン俳句のこの一年 佳句鑑賞…………… | …………… | 133 |
| ▽ペン川柳…………… | …………… | 138 |
| ▽ペン・フォト句会…………… | …………… | 143 |
| ▽英語を読もう会…………… | …………… | 144 |
| ▽何でも読もう会…………… | …………… | 145 |
| ▽ホームページ関連…………… | …………… | 146 |
| ▽クラブ活動を振り返って…………… | …………… | 147 |
| ▽会員名簿…………… | …………… | 150 |
| ▽編集後記…………… | …………… | 152 |

表紙の絵

Aー1ト

| | | | |
|-------|-------|--------|-------|
| 福本多佳子 | 安藤 晃二 | 木村 敏美 | 首藤 静夫 |
| 塚田 實 | 長尾進一郎 | 野瀬 隆平 | |
| 福本多佳子 | 松浦 俊博 | (五十音順) | |

会長 塚田 實

昨年は新型コロナウイルス感染症対策でOBペンクラブも様々な制約を受けましたが、Zoomと対面打合せを併用するなど会員の工夫と努力により、活発な活動を続けることができました。Zoomの利用により遠隔地の方も気軽に参加できるようになりました。

また長い間活動拠点として利用していた国立オリンピック記念青少年総合センターが大規模改修工事に入ったので、新たな拠点を求めるべく試行錯誤を重ねた結果、会員各位の努力で渋谷区の地域交流センターが利用できるようになりました。アフターファイブの懇親会も代々木周辺の色んなお店を開発中です。

『悠遊』も三十周年記念号を迎えました。OBペンクラブのホームページには、創刊号から二十九号まで掲載されています。創刊号の「刊行のことば」を読むと、文筆の研鑽に励むと共に、会員相互の交流・啓発の場とす

るというクラブ設立の意義と刊行の意気込みが語られています。PENのPOET（詩人）は俳句や川柳、フォト句として、ESSAYIST（随筆家）は八百字文学館やエッセイとして、NOVELIST（小説家）は掌編小説として結実し、更にサロン21での時事問題の討論会や英語を読む会、文芸作品を読む会、写真を撮る会など多方面の活動に発展してきました。

中国の四書五経の『大学』に殷の湯王が盟に「苟（まことに）日新、日々新、又日新」と刻み、毎日新しい心構えで事に当たったという故事があります。OBペンクラブも常に新しい気持ちで、明るく楽しいクラブとなるよう努力してゆきたいと思っています。

この年刊誌を手にとって、少しでも興味を持っていただけでしたら、ホームページ（obpen.com）「案内」をクリックして、気軽にお声がけください。創作と会員交流の楽しさを分かち合いましょう。

特集

『悠遊』誕生から30年

1994年の創刊号発行から30年を振り返り、『悠遊』を支えてこられた編集委員・関係者の中から、創刊号から第9号まで係られた西川知世さんと第14号から第20号まで編集委員を務められた大平忠さんに思い出などを寄せていただきました。

西川さんからは『悠遊』の誌名決定の瞬間の手に汗を握る様子や、発刊以降クラブがどんどん和やかな会になったなど、OBペンの礎石となる『悠遊』の誕生と会への影響など。

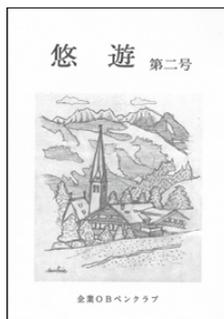
大平さんからは、プロから編集委員を引き継いだ時に「すべてお任せいただきたい」と啖呵を切られたこと。また友人や先輩家族から受けた『悠遊』への感想紹介や、投稿作品に感動された大平さんが作者と長電話をした話など、手本となる貴重なお話が満載されています。

『悠遊』表紙の変遷 創刊号(1994年)～第3号(1996年)

創刊号 (1994)



第2号 (1995)



第3号 (1996)



『悠遊』表紙の変遷 第4号(1997年)～第12号(2005年)

第4号(1997)



第5号(1998)



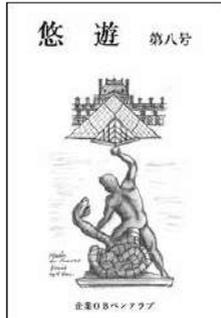
第6号(1999)



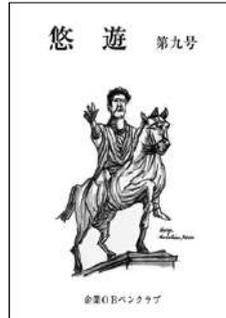
第7号(2000)



第8号(2001)



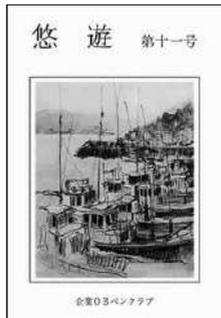
第9号(2002)



第10号(2003)



第11号(2004)



第12号(2005)



『悠遊』表紙の変遷 第13号(2006年)～第21号(2014年)

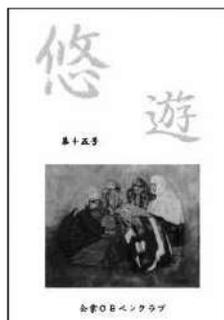
第13号 (2006)



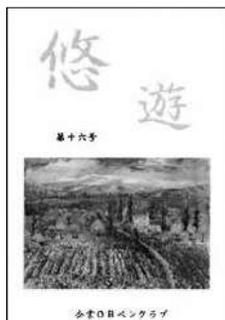
第14号 (2007)



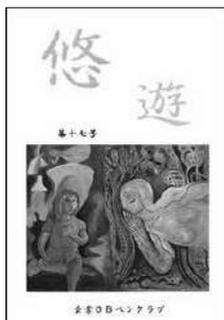
第15号 (2008)



第16号 (2009)



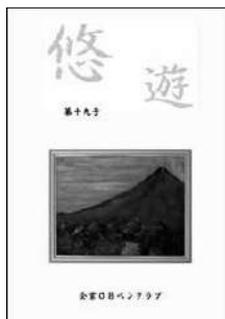
第17号 (2010)



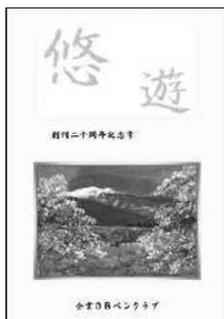
第18号 (2011)



第19号 (2012)



第20号 (2013)



第21号 (2014)



『悠遊』表紙の変遷 第22号(2015年)～第30号(2023年)

第22号 (2015)



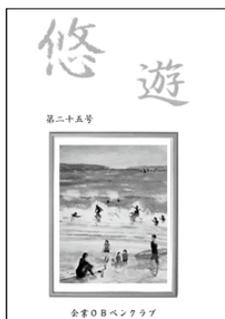
第23号 (2016)



第24号 (2017)



第25号 (2018)



第26号 (2019)



第27号 (2020)



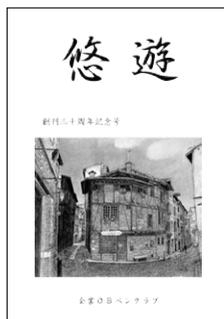
第28号 (2021)



第29号 (2022)



第30号 (2023)



『悠遊』の編集委員/関係者と特定テーマ

| 号数 | 発行年 | 編集委員/関係者 | 特定テーマ |
|----|------|------------------|-------------------------|
| 1 | 1994 | 石川、西川 | 自由題 |
| 2 | 1995 | 三枝、西川 | 戦後50年に思う |
| 3 | 1996 | 石川、林、西川 | どうなる？どうする21世紀 |
| 4 | 1997 | 石川、林、村田、西川 | 地球環境と資源のこれから |
| 5 | 1998 | 石川、中川、西川 | 高齢者の主張 |
| 6 | 1999 | 小島、石川、西川 | この十年これからの十年 |
| 7 | 2000 | 小島、石川、西川 | ミレニアムに思う |
| 8 | 2001 | 小島、石川、西川 | IT革命の世紀 |
| 9 | 2002 | 小島、石川、西川 | 構造改革 |
| 10 | 2003 | 小島、石川、山内 | ここがおかしい |
| 11 | 2004 | 小島、石川、山内 | 自由題 |
| 12 | 2005 | 小島、石川、山内 | 日本洗濯 |
| 13 | 2006 | 小島、石川 | 卒サラのGNP一元気で長生きポックリー |
| 14 | 2007 | 大平、安藤 | 仕事の風景 昭和を生きて |
| 15 | 2008 | 大平、浜田 | 異文化との付き合い 嘘 |
| 16 | 2009 | 大平、浜田 | 私と企業OBベンクラブ 七十代を生きる |
| 17 | 2010 | 大平、浜田、三春 | チェンジ 初体験 |
| 18 | 2011 | 大平、浜田、三春 | JAPAN 2025 大失敗 |
| 19 | 2012 | 大平、浜田、三春 | 日本の宝もの 我が人生に悔いあり |
| 20 | 2013 | 大平、浜田、三春 | 日本の再生のために くされ縁 |
| 21 | 2014 | 安藤、浜田、三春 | 我が世代の負の遺産 男と女 |
| 22 | 2015 | 平尾、浜田、首藤、福本(アート) | 日本語の魅力 心に残る一冊・一句 |
| 23 | 2016 | 平尾、斉藤、首藤、福本(アート) | 日本 これから 旅の流儀 |
| 24 | 2017 | 平尾、斉藤、首藤、福本(アート) | 二つの東京オリンピック 私のソウルフード |
| 25 | 2018 | 平尾、斉藤、首藤、福本(アート) | われら高齢世代 |
| 26 | 2019 | 斉藤、首藤、松浦、福本(アート) | 平成とともに—OBベン三十年— |
| 27 | 2020 | 斉藤、首藤、松浦 | 自由題 |
| 28 | 2021 | 首藤、松浦、宮原(アート) | 自由題 |
| 29 | 2022 | 首藤、松浦、宮原(アート) | 自由題 |
| 30 | 2023 | 松浦、長谷川、宮原(アート) | 私の一番、古い記憶 |

『悠遊』創刊三十周年によせて

西川 知世

『悠遊』の創刊三十周年を迎え、創刊号から名前が載っているということで、原初十年間のエピソードをと依頼を受けました。企業OBペンクラブの月例会は、一九九〇年一月二十二日に第一回が開かれました。『悠遊』の創刊は一九九四年ですから、企業OBペンクラブの創立から紆余曲折の四年を経て創刊されたのです。発起人は、三枝亨さん。誌名は会員公募の中から選び、石川正達さんが当て字を捻り出しました。企業OBペンクラブ創立以来、数社の出版社から来ていた書籍出版受注に翳りが見えてきた中、今を機に会員の筆力を上げるという目論見がありました。

当時、私はクラブの発起人である八木大介（本名・木本平八郎）の参議院議員時代後半に秘書だった縁で呼び出されました。企業OBペンクラブ定例会のお茶出しと印税の支払い（執筆したページ数でプロマネが配分）の

ためのアルバイト扱い会員として末席に座っていました。ペットボトルのお茶などなかった時代ですから、お茶出しなど会員のお世話係が必要でした。家庭にパソコンが入り込み、メールでやり取りなど想像もしない時代。何事も会って話す、議論や口論になるのも恐れずに物事を決めることが大切で必要な時代を生き抜いてきた、一方でクラブのティータムにはコーヒーよりアイスクリーム好きが多い、サラリーマン卒業紳士の集まりでした。

定例会は、誰かからなにか発案があると、大揉めに揉めることが多いのですが、同人誌の出版提案は会員に大歓迎され、終始和やかに全員一致で決まりました。誌名は公募でした。誌名決定の日、どうか平穩に……とひやひやしていた私にとって「悠遊」と文字を発表した時の石川正達さんの笑顔と全員賛成の挙手は忘れられない場面です。『悠遊』発刊以降、クラブがどんどん和やかな会になっていきました。クラブ発足の初期の月例会を知る私には一入の感慨があります。

創刊号が月例会に運び込まれた日の熱気は、企業OB

ペンクラブという会を支える礎石だったと思います。

原稿はもちろん手書きが多く、執筆者は石川正達編集長の校閲を受けて書き直し、編集長が再校正をして、印刷に出す手順でした。戻ってきたゲラ刷りの原稿を赤ペンで校閲、書き直すと、石川編集長が八面六臂の活躍で、ときどき口論、すぐ仲直りの繰り返しでした。

第二号から、私に「事務局から」というコーナーを書くことが求められて、おっかなびっくりでしかたなく文章を書くことになったのも思い出深いことです。学校以外で、しかも印刷される本に載るのは今から思い返しても恐ろしい経験でした。

この年、我が家に企業OBペンクラブのコピー機が入りました。『悠遊』発刊が加わり、資料のコピーが飛躍的に増えたためです。それまでは家の近くのコンビニでクラブの会議資料を人数分コピーするのも、事務局の私の仕事でした。大量でしたから、小一時間はかかります。昼間は営業妨害になるので、コインと原稿を持って夜中に行きました。当時は家庭用コピー機が無く、事務所用

の床が抜けないかちょっと心配するほどの機器でしたが、夜中のコピーから解放され嬉しかったことを思い出します。夫の両親との同居開始を機に、事務局を石川さんにお任せし、コピー機は彼の家に移動しました。

その後、病に倒れられた平間真木子さんのペン俳句を引き継ぎ今に至っています。私の俳句活動は、『悠遊』から始まりました。今は俳句に明け暮れる私のふるさとのようなペン俳句会が続いています。形式も、悠遊用原稿集めの方法も真木子流をそのまま踏襲しています。すでに真木子さんより年数が長くなりました。

『悠遊』と時を同じく発足したペン俳句が、今に至る私の俳句生活の原点であり、ペン俳句のメンバーの相互研鑽によって豊かな句座、沢山の句と出会う場所となりました。感謝です。

『悠遊』は、現在でも会員相互のきずなを培い、「ペンを持って活動する」という先人たちの創刊以来の夢を担い続けていることを目の当たりにしています。

創刊三十周年おめでとうございます！

『悠遊』編集記 第十四号から第二十号まで

大平 忠

二〇〇六年の春から夏の頃だったと思う。事務局長の平尾さんと運営委員長の松谷さんから、安藤さんと大平に、十四号から『悠遊』の編集をやってほしいとの依頼があった。依頼というか懇願を経て命令に近くなった。

十三号まで編集をやってこられた石川さんと小島さんは何と言っても毎日新聞社で編集をやってこられたいわば編集のプロの方々である。安藤さんと顔を見合わせ、当たって砕けるでやりますかと覚悟を決めた。

安藤さんと何度か打ち合わせを行い、編集にあたっての二人の考えを月例会で発表した。

「すべてお任せいただきたい。『悠遊』は、作品の評価を競うものではなく、できるだけ多くの会員が気楽に好きなことを書いてもらおう場である。いわば『何でも書く会』と同じ方針で行きたい」。北田会長がこれに対して何か言われたが、笑って答えずやり過ごしてしまった。

十四号の作業は最初の前半は楽しかった。特集テーマを決めるのに安藤さんと新宿の「ルノアール」とか蕎麦屋で何度か打ち合わせをした。しかし、いざ原稿集めとなると難関だらけだった。会員全員の方に書いてもらおうと今まで書いていない人にも書いて下さいと依頼した。メールと電話を使つての催促である。

次は、締切日を片目に見ながらメールを開始、しかし、わずかだがパソコンを使わない会員もいる。電話も併用。原稿の集まり具合を見ながら、また催促する。会員のほとんどが安藤さんと大平より先輩の皆さんである。神経を使う。さあ、締切が迫つて来た。こうなれば電話だ。

「また大平さんか」と辟易されている様子が分かる。なかには、締め切りを延長してくれという人も現れる。流行作家の心境が分かったと言う人もいた。

メールと電話攻勢の成果が上がったのだろう、原稿の数は前号をかなり上回った。

原稿の書き方の問題で助かったのは、テンプレートである。鶴飼さんが、現在に続く悠遊テンプレートの土台を作ってくれたのは貢献度大だった。

校正作業もてんやわんやのうちに終わり、何とか予定どおりの期日にすべての原稿を印刷所に送り込んだ。

いよいよ翌年二〇〇七年二月、月例会の会場に『悠遊』第十四号が到着した。箱を開け本を取りページを抜けた途端、安藤さんとシヨックを受けた。何と目次のページが、右と左逆になって印刷されていたのである。印刷所は平謝りに謝っていたが、最初に手がけた『悠遊』にケチがついてしまった。

『悠遊』の表紙・カットを描いたり作ったりして頂いた山縣さん、野瀬さん、吉田邦彦さんと一緒に十四号の打ち上げをやった。この発行後の打ち上げは、その後も毎年恒例として続けられた。

五月に行われた合評会のやり方を従来とは変更した。

それまでは、あらかじめ良いと思った作品を一人が五作品選んで、感想を書いて提出し、投票順にまとめて合評会で配り、その順番でみんなて話し合うというやり方だった。このやり方のせいかな、あるメンバーは「僕のものはいつも上に行かないんだよなあ」とぼやいていた。そこで、投票で選ばれたものだけでなく、掲載順に全作

品を対象とすることに変えた。

十四号で従来と変更した点のもう一つは、亡くなられた会員への追悼文から故人の入会以前の履歴を一切省いたことだった。この会での活動に前歴は全く関係ないからだった。これについては、合評会で異論が出た。編集を任された我々は今後ともそうしますと押し切った。

合評会が終わってやれやれである。ところが思わぬことが起こった。相棒の安藤さんがドイツの会社にスカウトされ現役復帰せざるを得なくなったのである。これには参った。そこで新しい相棒探しをせねばならない。

入会して間も無くの浜田道雄さんに三拝九拝、あることないことを言ってお願した。

十五号、十六号は浜田さんと二人で編集作業をした。

何とか頑張ったものの、どうも私たち二人では荷が重く抜けも出る。三春さんに二人で頼み込んだ。女性の目が必要だからである。これはうまくいったと思う。十七号から二十号までこの体制で五年間続いた。ただこの体制には一つ問題があった。何かと編集会議と称しよく飲んだ。横須賀線の終点まで乗り越したこともあった。

『悠遊』を送った友人たちからの感想

◎ 昨夜読み始めたら今朝方五時になりました。

どなたの文章も明治維新と並ぶ大実績、第二次大戦後の廢墟から立ち上がって世界第二位の経済大国にした企業戦士の文章ですから同年代として楽しいです。

今や金融じゃぶじゃぶ政策で物づくりを忘れた日本、

七十年後と言わず三十年後が危ぶまれます。もう一度「Japan as Number One」と言われた時の解析と今を比較してみたいものです。半導体も、スーパーコンピュータが百年かかる計算を数分間でやるといふ量子コンピュータの開発も、すでに遅れを取っているようです。

せつかく、鵜飼さんたちが頑張ってくれた功績を日本人の次世代が頑張つて欲しいと思います。

◎ インテリの皆さんが蘊蓄を傾けて書かれており読む方としてはその人のイメージを描きながら楽しんでいきます。

◎ 年齢や生い立ちや職業など、まったく知らない人の

書いた文章を読むのは楽しいですね。この人はいったいどんな人だろうかと想像力が広がります。

特に私は、普通のサラリーマンの経験が全くないので、変に劇的なものよりごく普通の企業戦士たちの思い出のデッサンが新鮮で、書き手の人となりが想い伺えます。今号は女性の書いたものが印象に残りました。

◎ 読んでいてなぜか心が落ち着くのは、高度成長期を支えられた皆様方の執筆によるものであるからかもしれません。同時代を生きた企業戦士の一人だったから、共鳴し、波長が合うのかも知れません。

もう一つ大きく違うのはいまのデジタル感覚人間と数万年前から続いてきたアナログ型人間の最後の生き残りとの差かも知れません。音ならグラランドピアノと電子ピアノの差でしょう。時計でも時間の連続を示すアナログ時計と単なる現時点を示すデジタル時計との差でしょう。

悠遊執筆者の皆さんに心の安らぎを覚え感謝申し上げます。

クラブの先輩たちのご家族から

故人となった当クラブの先輩たちのご家族へ『悠遊』をお送りした際にいくつか頂いた手紙の感想である。

古いものでは、私が入会時の会長北田さんの奥様から頂いた手紙があった。北田さんはどちらかといえばものごと厳しく辛口の方であった。私も入会早々怒られたことがあった。ところがこんなことを言ってはなんであるが、奥様の手紙は文章といい筆跡といい女性らしい優しさに溢れておられる。一組の夫婦を作られるに際しての神様の巧まざる思し召しであらうか。

石川さんの奥様からの手紙は、追悼文を掲載した『悠遊』をお送りしたことに對してのお礼状である。「主人は『悠遊』の編集を長くさせて頂いたが、皆さんの原稿を読みながら校正するのがいつもたいへん楽しそうでした」と書かれていた。そういえば石川さんご自身の原稿も何度となく推敲された痕跡があったと記憶している。

『悠遊』をこよなく愛しておられたのであろう。

遠藤さんは、ご息女から手紙を頂いた。見事な文章と筆跡は、さすが名文家の遠藤さんの血を引いておられると感心した。遠藤さんはいつだったか、『悠遊』に奈良の秋篠寺の伎芸天を拝観しての感動を書いておられた。やはり名文だった。ご息女の筆跡はその伎芸天が筆を取ればかくやと思わせるものがあつた。

佐久間さんは先輩ではなく同輩であつたが、早くに亡くなつてしまった。その愛すべきユニークな人柄はクラブでも目立っていた。奥様からの手紙は長文で、主人がいかにも「何でも書こう会」と『悠遊』を楽しみにしていたかについて詳細に書かれていた。『悠遊』を仏壇に飾られているという。

細谷さんとの長話

細谷さんが八月末に亡くなられた。細谷さんは専らペ
ン川柳で活躍されておられたので、たまに月例会でお目
にかかるだけだった。その私が、たった一回それも電話
でかなり長くお話したことがあった。

そのきっかけは、『悠遊十九号』の細谷さんが書かれ
た「またカタカナ語を増やしてしまった」であった。フ
ランス語の翻訳では学生時代から実績のある細谷さんな
らではのエピソードの紹介だった。

天女みたいに可愛い後輩から、フランス語の急ぎの翻
訳を頼まれた。服飾デザイナーとして売り出し中の彼女
の叔母様からの依頼だという。パリの新聞の高級服飾界
における新しい革命的潮流についての紹介記事の翻訳だ
った。この叔母様の名は書かれていなかったが、この八
月十一日に亡くなった森英恵さんだったことはすぐ分か
った。

彼女は、パリの高級服のオーダーメイド、いわゆるオ

ートクチュールの世界への進出に苦戦していた。そこで、
高級既製服の動きを突破口にしようと考えたのである。

細谷さんは、翻訳をほぼ終えたがどうしてもうまく日本
語に訳せない言葉があり、とうとう叔母様に電話で相談
をしたとか。叔母様は「あのフランス語は何と発音する
の?」「プレタポルテです」、少しやりとりした後、「無
理に訳さずにこれでいきましょう。日本にないことをや
るのだから斬新でいいんじゃない?」

この日から、彼女のパリと東京における名声も確立の
道をたどった。

細谷さんは、言語学を学んだ身として外国語まがいの
カタカナ語の氾濫を兼ねて苦々しく思っていたのに、慚
愧に耐えないと、締めくくってあった。

『悠遊』の編集人に届けられたこの原稿を読むや、私
は細谷さんに電話をしてしまった。

「細谷さん、團伊玖磨の『パイプのけむり』を読まれ
たことありますか?」から始めて次のような話をした。
團伊玖磨は、服飾界の人たちと話をすると、時々「王徳

忠」という名前を聞く。香港かどこかの有名デザイナーの名前だと思っていた。ある時、デパートのショーケースを見ていて愕然とした。「王徳忠」は、人の名前ではなく、「オートクチュール」というカタカナであつて高級服の特注品を意味することに気がついた。そこからの團伊玖磨の怒りの言葉が続く、「日本語に訳さずわざわざカタカナ語でいうなど怪しからん、例えば高級既製服のことをブレタポルテという変なカタカナ語にするなど……」

細谷さんは、「参った、参った、団さんに怒られましたか!」と、電話の向こうで頭を掻いておられたようだった。

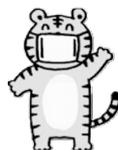
八月、森英恵さんの死亡記事を読んでいると、パリの「オートクチュールの協会」で、東洋人で初めて会員になったと書いてあった。彼女は、ブレタポルテを足掛かりにオートクチュール業界でも成功したのであろう。この記事を細谷さんは読まれただろうか。

故人となられた黒崎さん、鳥海さんとは、『悠遊』の原稿の校正そつちのけでたびたび長話になったのも、今となつては懐かしい思い出である。



最近のクラブ活動より

コロナ禍を工夫で乗り切るOBペン



4月21日
内田会員の講演
会後に新宿御苑を散策

5月19日
『悠遊』29号
合評会



11月4日
「俳句会」吟行
日比谷公園

特定テーマ
私の一番、古い記憶



写真 長尾 進一郎

八幡神社の迷子

安藤 晃二

人間の記憶が始まる。この世に生を受け、自己の意識が芽生え、行動による感激が脳裏に刻まれる。八十余年も経過した今、苦も無く、その情報を取り出すことができる。思えば興味深いことである。一方成長してから経験した多くの事象は、忘却の彼方に飛び去ってしまうことが余りにも多い。

記憶は、いったい何処まで遡れるのだろうか。昭和十五年二月生まれの私には、その作業の指標となる出来事があった。十八年の秋、父が、昭和初期の英国留学経験時の親友の縁から、国の対支政策関連任務の要請に応じ、中国の済南に派遣され、終戦の年の二十年五月まで家は不在であった。この、父の出発前の時間が、三歳児であった私の「最も古い記憶」の舞台となる。

三歳の夏、家から数百米離れた八幡神社の夜祭へ、五歳年上の兄に手を引かれて出かけた。夜店が並ぶ人込みに興奮し、参道の石畳で転んだ。なかなか起き上がれない。すつと誰かに抱きかかえられ、立ち上がった幼児の衣服の泥を手際よくはらって呉れる大人が居た。介抱された幼児は安心感に包まれる。「坊や、大丈夫、お家は何処」。中年の浴衣姿の優しい婦人の迷子対応が既に始まっていた。傍らにいるべき兄の姿はどこにも見あたらない。しかし、その時の私には迷子のパニック感は無かった。おんぶしてくれたその人の背中で「あっち、あっち」と、指差しで知らせ始めたという。

その頃、兄は脱兎の如く家に走り、狂乱状態で、弟が居なくなつた事を両親に大声で繰り返し、家中大騒ぎになったという。

さて、私の方とは言えば、八幡神社からの小道を、背負われたまま進み広い街道に達していた。幼児の頭に地図の感覚は無かったが、物事が旨く運んでいるのが解る。

婦人は僕をおぶった儘、落ち着いた体で八百屋に立ち寄る。新聞紙にくるまれた五個の梨、丸い、三歳児のサイズ感覚からは途轍もなく大きな果物のお土産を、婦人の背中と私のお腹の間に、店主が押し込んでくれた。気分は上がり、懸命に婦人の肩にしがみつきながら、指差しガイドの帰宅行が再開する。

程なくして家の門に至り、庭木戸を抜けて客間の縁側へゴールイン。集まっていた家族とご近所の人々も破顔一笑、今度は喜びのざわめきとなった。母親がニコニコしながら何度も何度もその婦人に頭を下げていた。当時は「人さらいに、サーカスに売られてしまふよ」と幼児は普段から警告を植え付けられていた。

煌煌と照る電灯に白煙が光り硝煙の匂いに気付く。兄は既に大きな花火を振り回している。八十年が経過した最近、八十七歳の兄と旅行した新幹線での会話が、その時の思い出話に触れた、「そうそう、あの方は八幡神社の近くに住むMさん、実に親切な方だったよ」。さすが

年長の少年として、事態をしつかりと把握していた。

父が中国へ出発の前日、私は敏感に両親の間に、何か確執があり、緊張感が流れていたのを憶えている。新幹線の兄が説明する「大日本帝国は、英米に勝利すると確信する父、勝てる訳がないと主張する母、そんな喧嘩が在ったんだよ」と笑う。面白い話だと思う一方で私は、戦禍の厳しい世情の下、家族を残して外国へ向かわざるを得ない父に、母が拒絶と悲哀の感情を訴えていたのではなかったのでは、と思うことがある。

二年後、終戦前の五月に、母は急性肺炎で他界し、急遽父が帰国する。八路军に追われながらの厳しい帰国行であったという。母の死という悲しい出来事が父を呼び戻した。その事が大陸に消えたかも知れない父の運命を救い、家族に幸せをもたらすという、思いがけない物語へと展開する。

ピカドン

池田 隆

階下より「こっちへ敵の飛行機がくつみたかよ！」と友の次姉の声。小学校（国民学校）一年生であった私は、隣に住む幼友達と彼の家の二階の縁側で将棋遊びをしていた。手摺りを乗り越え、一階の屋根に上がり空を見渡すが、一面白い雲で何も見えない。

がっかりして縁側に戻ったとたん、突然にピカッ！と強い赤紫の閃光が視界をふさぎ、続けてドーン！という物凄い爆音が響いてきた。やや間を置いて、強烈な爆風に包まれる。

窓ガラスが粉々になって飛んでくる。座敷にあった調度品も外に吹き飛ばされる。身をかがめ慌てて自宅に戻ろうと屋敷内の階段に向ったが、階段に沿った斜めの空間を猛烈な爆風が吹き上げ、階下にあった下駄や置物などが宙に浮いて次々と身体に当たる。やがて爆風が治まり、裸足のまま自宅に飛んで帰ると、窓ガラスの破片が

壁一面に突き刺さり、座卓が庭まで吹っ飛び、廊下の長い敷物が天井に吸い上げられたままである。

自宅と一緒に居た母と姉はたまたま居場所が良かったらしく、二人とも無傷であった。家の前の道を歩いていた小母さんが「防空壕に入らせて下さい」と塀の非常口から飛び込んでくる。暫くして、数日前より遠くの農家へひとりで食料の買出しに出掛けていた中学二年生の兄が、額に血を垂らしながら帰ってきた。自宅から数百メートルの所まで来た時に路上で被災したという。

当初は閃光、爆音、爆風の余りの強さに、皆が自分の直ぐ近くに爆弾が落ちたと思った。しかしだんだんと相当地に遠い所での何か異常な爆撃か爆発らしいと分つてきた。新型（原子）爆弾だった。

自宅は長崎市内、原爆の爆心地より三・六キロメートルの地点に在った。爆心地との間には標高約三百メートルの山が有り、直接的な放射線被害や熱線被害からは免れ、爆風も建物を全壊させる程ではなかった。後に知ったが、友の次姉は警戒警報中のラジオで「敵機二機、島原半島上空を西進中」との放送を聴いて声を掛けたとい

う。一九四五年八月九日の昼前の出来事である。

午後になると火事が広がり、空がうす暗くなり、紙などの黒い燃え滓が無数に空から降ってきた。原爆による火事の延焼が広がってくるが、幸いにも自宅より一キロメートルほどのところで止まったようだ。

しばらく経つと、広い電車道に面している自宅の前を、爆心地の近くで被爆した人たちが三々五々列をなして避難してきた。どの人も服は切れ切れになって、赤く焼け落ちた皮膚や肉にこびり付いている。

まるで夢遊病者か幽霊のような足取りである。後年になってその惨状を思い出すと戦慄を禁じ得ないのだが、その時はまだ幼かったせいだろう、まるで遊園地のお化け屋敷で恐いもの見たさに、小児が指の間から覗くように異常な姿の人達を好奇心一杯で見続けていた。

日が暮れた頃に父が「皆、無事か」と大声を上げて帰ってきた。買出しの兄を気遣い、迎えに諫早まで列車で行ったが、先方で行き違いを知り、十里の道を家族全員の死亡を覚悟しながら歩いて引き返してきたのである。

兄も父も原爆投下の直前に爆心地附近を列車で通過し

ており、原爆投下のタイミングが少し早かったならば、父、兄のいずれかは、あるいは二人とも犠牲になっていた。

私も数十秒違いで屋根から吹き飛ばされずに済んだ。わが家族五人が全員無事であったのは不幸中の正に幸運というほかはない。一緒に将棋で遊んでいた幼友達はあの一瞬で彼の父と長姉を亡くしたのである。

帰宅した父の指示でこのまま市内に留まるのは危険だと、市外に通じる日見峠を越えて海水浴場（東望の浜）まで直ぐに疎開することとなった。

しかし臨月を迎えていた母には長い登り坂が辛かったのであろう、市街地を外れたとうもろこし畑で野宿してその夜を明かした。敵の偵察機が空を飛ぶ。火事が市中に広がりドラム缶などの残油に着火したのか、暗闇のあちらこちらで大爆音を響かせ火柱が高く立ち上がる。私は恐くて、まんじりともせず母に抱かれていた。

疎開先で終戦を迎え、同じ道を辿って家族五人で美しい夜空を見上げながら帰る途中のこと、父が「戦争が終わり、世の中はきっと良くなるよ。だがもし戦争で殺されるのなら家族全員同時が良いな」と述懐していた。

孫へのプレゼント

市川 忠夫

「人の一番、古い記憶」は三歳半頃に始まる、と聞いたことがあります。自身の経験からも、そうだと感じます。

一九四六年の夏の初め、叔父（私の母の弟）が満洲から復員したのです。一九四五年八月の終戦から一年近くが経っていました。その頃の私は、四歳になる少し前で、東京目黒の母の実家にいました。その時の家族の喜びようは今も覚えていますが、特に祖母（叔父の母）の喜びは大変なものでした。私は、七〇代の前半まで、これが「私の一番、古い記憶」と思っていました。

一九四五年の春から夏にかけての頃だったと思います。家の八畳間の天井に電灯がぶら下がっていました。電灯のカサには、風呂敷がかけられていました。ある時私は、この情景をしっかりと思い出したのです。

後期高齢者になって間もない頃、小学校のクラス会が

開かれ、久しぶりに旧友が集まりました。話題が終戦後の思い出話になりました。すると一人が、戦時中の思い出を話し始め、こう言ったのです。「部屋の電灯にいつも布が掛けられていたよね!」と。この言葉を聞いて、私の頭の中にも同じ情景が浮かんだのです。空襲警報が鳴ると、祖母や叔母は、光が外に漏れないように、カサの風呂敷をかけたおしていたのです。風呂敷は、紫がかった色だったように思います。この頃の私は、三歳になる少し前でした。

後期高齢者になった途端に、「私の一番、古い記憶」がさらに古くなったわけです。これ以上古くなることは、もうないと思っています。

二〇一九年の晩秋の朝早く、三歳半の男の子と二人の後期高齢者の三人が、米国ニューヨーク州の小さな空港エルマイラにいました。三人は、孫とバビー（私の家内を孫はこう呼んでいます）とジイジ（私）です。デトロイトを経由して、成田空港へ向う旅の始まりでした。

空港では、孫がママと別れることを嫌がり、大泣きす

るのでは、と心配しました。しかし、飛行機に乗りたい気持ちの方が強かったためか、孫はママに「バイバイ」と笑顔で手を振って、機内に乗り込みました。デトロイトでは待ち合せ時間が五時間程ありましたが、その間も全くくずることはありませんでした。

デトロイトから成田までは約十三時間の長いフライトです。機内では、幼児と老人の旅のためか、客室乗務員や周囲の乗客がとても親切にしてくれました。孫もいつになくよい子になって、座席でスヤスヤと眠ってくれたのです。無事成田空港に着いた時には、旅の前の心配事が全て杞憂であったことが分かり、バビーやジイジの心は一気に軽くなりました。

この旅は、孫にとっては「バビー・ジイジとの初旅」です。しかも、三歳半という年齢を思うと、「僕の一番古い記憶」の有力候補になりえる、と思えてきます。

私自身の最も古い記憶である「戦時中の電灯の風呂敷」や「戦後の叔父の復員」は、自身の記憶に祖母や叔父・叔母の話が加わって形成されたものです。今の私には、

うすぼんやりとした記憶になってしまっています。

『悠遊』三十号の特定テーマが決まった時に、「バビー・ジイジとの初旅」が孫にとつての「僕の一番、古い記憶」になってくれるとうれしいなあ、という想いが浮かんで来ました。人間以外の生き物は、遺伝子だけで情報を次世代に伝えるそうです。人間だけは、文字でも伝えることができます。OBペンクラブメンバーの一人として、この人間だけの特性を身近に実現したいと願いました。

二〇二三年の春、『悠遊』三十号が発行されます。これまで、余分に入手した数冊は、親しい友人に配っていましたが、それらの方々は皆さん、五〇代以上でした。しかし今回は、一冊を「孫へのプレゼント」にしようと思っっています。孫は今六歳です。『悠遊』三十号を一年に一回取り出してページをめくってくれれば、「バビー・ジイジとの初旅」の記憶は蘇ることでしょう。

二〇九六年、孫は、今の私と同じ八〇歳になります。地球温暖化、巨大な災害、パンデミックなどを克服し、戦争のなくなった平和な地球上のどこかで、「僕の一番古い記憶」を孫が思い出してくれるよう願っています。

私の一番古い記憶

上田 信隆

昔から自分の記憶力には自信があまり持てなかった。

幼稚園に通うこともなかったせいも小学校以前のことはほとんど思い出すことが出来ない。多くの友達とよく古い話をするが話題は得てして戦後の食糧難時代のこと等が多い。

三島由紀夫の本の中で生まれた時の盥の縁の描写があったが、それには驚かされたことがある。三島ほどの天才なら有り得ることかもしれないが、多くの人の記憶はどのくらいのものか興味ぶかいものである。モーツァルトは三歳からピアノを始めたといわれているから彼なら少なくとも三歳の記憶は残っているだろう。

私の一番古い記憶といえば四歳の時の記憶である。昭和二十年のことだ。東京への空襲により私たち一家は焼きだされた。姉と私は両親に手をひかれて、妹は母の背におんぶをされ僅かな荷物を引き摺りながら火の粉の中

を逃げ惑った。幸い二キロほど離れた実家は火災をまぬがれていたのでそこを目指して親子五人は命からがら向かった。実家につくと父は玄関をゆっくり開けた。ホッとした様子の父の横顔がそこにあった。この父の横顔が私の一番古い記憶だと思う。

空襲の轟音、赤々と燃え盛る街、静かな玄関等は消えかかっては甦る点描画である。それらを想像力でつなぎ止めてストーリーにまとめてみる時、父のその横顔だけは、はっきりと映し出すことが出来る。

記憶とはじつと集中すれば出てくるものだろうか。記憶力は先天的なものなのか、努力によって培われるものか脳科学者でもない私にはよくわからない。記憶力の差だけでは頭脳の良し悪しは測れないと思うが、記憶力の優れているのは才能の一つかもしれない。何事にも言えることだが、人は努力さえすれば一定の水準にはたどり着けるものだと思う。限界があるようでは努力する気にもなれない。限界がないことで私たちはその気になって努力し続けることが出来る。才能に差があるのは仕方な

いことかもしれない。才能のある人をうらやましくもあるが、世の中に天才や秀才は「ごまん」といる。上を見てもきりがないし、まして人と比較をして優越感にひたるのもいだけない。

しかし、例えば弘法大師のような偉人となると話は別になる。詩文に長じ三筆にも入り、土木工事の知識にも優れ、とりわけ記憶力に通じる語学の力には凡人の私どもの到底追いつけるものではない。空海の本を読むたびに感じることは、その才能もさることながら、ものにより立ち向かう姿勢の鋭さ、努力の積み重ねが抜きんでていることである。

「私の一番古い記憶」の原稿の締め切りも年の瀬になりいよいよ近づいてくる。そんなある日にタクシーに乗った。運転手さんと世間話をしていううちについ「私の一番古い記憶」の話になった。目的地に近づき始めたころ急に運転手さんは振り向いた。私の顔を見ながら言った。

「お客さん。お客さんの記憶はきっと天国のお父様の

ご慈悲ではありませんか。お客さんのお父さんへの思いがあつてこそのことですよ」

なるほどね。こういうアプローチもあるのだ。



古い記憶はすべり台から始った

宇敷 辰男

私の幼いころの最初の記憶。それは家の近くにあった
こども広場のすべり台からスーッと滑り下りたら、そこ
に祖母が立って待っていてくれたシーンである。今年で
九十七歳になる母の話では、私が幼稚園の二年保育に入
る前の一時期、父方の祖母と一緒に住んでいたそうなの
で、この記憶は三、四才の時のことになる。

今の子供は誕生の時から多くの映像記録があり、胎内
記憶で母親のお腹の中も憶えていると言うこともあるそ
うだ。入園前の私の記憶は薄いベールに包まれたような
ただ滑り下りるだけのボヤーっとした一場面である。

当時住んでいたのは新興の住宅街で沢山の若い世帯が
一斉に引越してきて入居した。こども広場はその中心
にあった。子供たちは昭和二十年代生まれが大半で同じ
年頃であった。私は一才からそこで育ったので物心がつ

いた時には親友と遊んでいた。

幼なじみとの記憶は色々あってどれも最初からな
いけれど、こども広場のブランコに二人交代で乗って遊
んでいて、友だちが漕いで大きく揺れた座板の角が私の
おでこに衝突したことがある。左の額から血を流しなが
ら「なにするんだ」といつて食って掛かったときの友だ
ちの困った顔が忘れられない。

幼稚園の園庭の芝生に錠剤包装パックの様な物が落ち
ていたので、幼い手で拾いあげ右手の親指で包装のふく
らみを剥いたら途端に火花が飛び、親指の皮膚がふくれ
上がる火傷をしたことがある。錠剤の様に見えたのが実
は運動会のスターターピストルの火薬であった。

おでこの傷も右手の親指の火傷の痕も大人になっても
残っていた。でも高齢者になった今ではシワやシミと区
別が付かなくなっている。どうやら子供の時の衝撃的な
出来事は鮮明な記憶として残るようである。

小学校に上がって、家に遊びに来た友だちと庭で焚火
をやり、火の上に鉄の棒を渡して芋を焼いていたら、弾
みで棒がはずれ友だちが慌てて鉄を手でつかみ、掌てのひらに一

直線の火傷をしたこともしっかり記憶に残っている。

古い記憶をたどって先日子ども広場を探して歩いてみた。すると昔と同じ場所に広場があり、ブランコはなかったけれど記憶に残る場所にすべり台が立っていた。狭い鉄のステップを高齢者が一人でのぼりすべり台からスーッと滑り下りたら、思い出した。そうだ、子ども広場は当時「遊園地」と呼んでいて、もう一つ家のすぐ近くに遊び場があり、そこを「お稲荷さん」と呼んでいた。

当時の遊びはビー玉やメンコ、鬼ごっこや缶けり等々が流行っていて、その中にデベ野球があった。ゴムボールを手で打ち素手で捕球する。三塁のない三角ベースなので、狭かったお稲荷さんの境内で充分楽しく遊べた。

遊園地の方は広くて、ソフトボールとバットやゲロームも使って野球ルールで遊んだ。ここには幾つかの子どもグループが遊びに来るので、場所取りや対戦ゲームで競うこともあった。向こう三軒両隣近所の幼なじみの一番の遊び場はお稲荷さんだった。雪が降るとここを舞台

に雪合戦もやった。

記憶と同じ場所に残っていたお稲荷さんに立ち寄ってみると、そこに記念碑が立っていた。

「ここは、住宅街が出来る前に旧制東京商科大学（現一橋大学）の運動場であったが、神田一ツ橋の校舎が焼失したため、大正十三年仮校舎を建て昭和八年小平に移るまで約九年間、商大予科生の学んだ場所で、稲荷神社はそれ以前からここにあった」と記されていた。

そんな場所とは知らないで、小さな社殿の祠の上に伸びた木に登って遊んでいた。丈夫で太くうねった枝が何本も張り出し抜がっている絶好の木登り場で、一緒に数人が陣取れる子供たちの秘密基地であった。天辺に上がると住宅街の瓦屋根が、薨いづかの波のように見渡せた。

大人になって時に空を飛ぶ夢を見ることがある。ドラえもんやスーパーマンのように飛べないが、屋根から屋根へと、ぴょんぴょんと気持よく跳ぶ夢は、子供のとき体験したお稲荷さんの木登りのお陰かも知れない。

古い記憶

大森 海太

トシをとると新しいことが頭に入りにくいのに、古い記憶のごく一部はカサブタのようにこびりついていて、いつまでも消えようとしない。それが今回の「御題」であるが、それ以前のことについても少々。

私が生まれたのは、当時すでに敗色濃い昭和二〇年三月の東京。翌日の夜にはB29の大編隊が襲ってきて、十万人の人が亡くなった（東京大空襲）。母は産褥の床から窓が真っ赤に染まるのを見たという。

私は六百匁の未熟児同様で、その後も栄養状態が悪いせいか発育不良。そんな私を抱えて両親は疎開先の日光で終戦を迎えた。ニュース映画で終戦直後の列車の無茶苦茶な混雑を見るにつけ、頼りない赤ん坊を連れてよく無事で東京まで帰れたものだ。この世に生んでもらったことと共に、父母に感謝する（ここまでは記憶なし）。

さて本題に入り、物心ついてから私の一番古い記憶はどんなものだったのだろうか。

昭和二〇年代前半、物の乏しい時期、古い家の六畳の茶の間で薄暗い電灯の下、両親、祖母、曾祖母と五人でちゃぶ台を囲んでいた。何を食べていたのか覚えていないが、目玉焼きが出ればご馳走だった。まれに奮発して焼き焼きのときは、四つ足は申し訳ないといって神棚と仏壇を半紙で覆った。

三歳のとき弟が生まれ、祖母に連れられて病院に見に行ったときのこと、父の自転車のうしろに乗せられて、言問通り寛永寺橋の上から鉄道線路を見に行ったことなどが、なぜか記憶に残っている。

どういうわけか幼稚園には行かせてもらえなかった。いきなり近所の小学校の一年生となったが、発育不良もやしっ子で運動は苦手、徒競走はいつもビリ、早生まれのため、遅生まれの女の子にいじめられて、帽子をオルガンの上のせられても手が届かず泣かされちゃった、そんなひ弱な子だった。

ここから先は以前、書こう会で発表した『私の原風景』と重複するが、お許しいただきたい。

多くの皆さんと違って私は全くの都会育ち、それも戦後の焼け跡がアチコチに残った東京の街で、残念ながら自然豊かな故郷というものは持ちあわせていない。

そんななかで記憶に残っているのは、省線電車の駅で白い服を着た傷痍軍人がアコーディオンを弾いて金盞の前で頭を下げていたことだとか、毎朝父の出勤する都電が満員で、ドアにしがみついていた人がこぼれ落ちそうだったとか、あるいは進駐軍のMPがジープで通りかかったとか、そんなことばかりだ。

よく遊んだ場所のひとつは、現在の地下鉄後楽園駅の上の中央大学キャンパス、昔は陸軍の練兵場で私の子供のころは何もない一面の焼け野が原だった。

そうだ、私の記憶に残る小学校低学年のこのあたりは昭和二〇年代後半、戦後復興から一息ついた時代の東京だった。戦争で焼け落ちた廢墟から東京が、いや日本全体が健気にも、一生懸命に立ち直ろうと努力していた時代だったのである。

それからの日本は奇跡ともいわれる復興をなしとげ、所得倍増の時代に入る。昭和三十九年の東京オリンピックや東海道新幹線はその象徴である。

さらに高度成長を経て一流国の仲間入りをして、ジャパン・アズ・ナンバーワンとまでいわれるに至ったが、やがてバブルがはじけ徐々に守りの姿勢に入り、世界におけるプレゼンスが低下して、覇気のない老人国と揶揄されるようになってしまった。

これからこれがどう変化していくのかというテーマは別にして、終戦から今日に至る我が国の盛衰はなにか私の一生と符合するものがある。この八〇年足らずの間に、世の中は信じられないくらいの変貌を遂げた。パソコンもないスマホもない、貧しかったけど皆で頑張っていた子供のころ。

そんな思いで昭和二〇年代の日本と、古い記憶に残る幼い時代を重ね合わせてみた。

母の背中

木村 敏美

母は口数が少ない人だった。明治生まれにしては背が高く細身で和服が似合い、七十七歳で旅立つまで背筋が伸びて凛としていた。私は母三十八歳の時釜山で終戦の三日前に生まれ、引き揚げて八女の山奥に九年程住んだ。

四歳か五歳位の時脱臼した。病院は小学校から一山超えた中学校のある町迄行かなければならない。小学校迄もかなりあるのに母は背負って連れて行ってくれた。陽の光を受けた首筋を見ながら、痛さも忘れ幸せな気持ちだった。脱臼はすぐ治ったが、問題はそれからだった。帰りは当然背負ってくれない。小学校のある集落に近くなつた時あたりは真つ暗になつた。先を急ぐ母は手も引いてくれず、道は曲がりくねっていて姿がすぐ見えなくなる。泣いても叫んでも容赦なかった。灯り一つない暗闇の恐怖と疲れで、行きと帰りは天国と地獄位に感じた。母は山道で滑って怪我した時もお腹を壊した時も医者に行

行かなかった。一番古い記憶で、子供心に母には甘えられないと学んだ最初のでき事だったように思う。

小学四年生になって、福岡市の中心地にある全校生徒二千人位のマンモス校に転校、大きさに圧倒され言葉や服装の違いもあり友達もできず、五年生になって突然父親が交通事故で他界。辛い時期だったが母の苦勞もひしひしと感じられ何も言えなかった。そんな中でも母は仕事をする一方で、相撲や歌舞伎をテレビで観るなど好きな事を持っていた。見習った訳ではないが私も一人で図書館に行き、小公子、冒険物語等世界の名作童話を読んでいると、空想の世界でわくわくして楽しく孤独から救われた。読書好きは高校まで続いた。

中学生になってクラシック音楽を聴く時間があり、美しい音色は名作を読んだ時の感動と重なり感想文はよく褒められた。読書感想文の入賞や作文は手本になつたりして、読書の感性が一番高まつた時代のように思う。

高校生になって美術部に入り絵画に熱中したが就職し

た。絵画は好きだったが、夢より人並の生活を望んだ。特に五年生から下宿の人達と食事が一緒だったので、家族だけでの生活がしたかった。

就職して四年後結婚、三十八歳の時、家族同伴の海外転勤辞令でマレーシアに三年半滞在。現地の民族衣装のバティックをシンガポールまで習いに行き、布に描く蠟結染めに二年間位熱中した。

長い年月が流れ六十五歳を過ぎた頃、或る日、家の整理をしていると古い日記が出てきた。

中学一年から二十歳まで殆ど毎日書いていた。忘却の彼方になっていた過去を振り返る事になった。母は父亡き後、苦勞してまだ学生だった姉と私を高校迄行かせてくれた。勉強や心の問題で話し合う事はなかったが、私の健康には留意し、中二の時、扁桃腺と鼻の手術を受けさせてくれた。言葉ではなく背中、一生懸命生きる事と好きな事を持つ事を教えた。その生き方が伝わって人との出会いが生まれ、力になって今の私がある。

それに気付かせてくれたのが日記で、このことがペン

クラブに入るきっかけになった。

国境を越えシンガポール迄バティックを習いに行っていた時、車が故障しているのを見て助けてくれた中国人。そのお陰で続けられた点描画の作品は、無数の点描の大変さに途中で挫折しそうになったが、あの一番古い記憶の一日で学んだ経験があったから諦めず最後まで。母とのあの一日と人との出会いとが最終的に太平洋展まで繋がった。また山の畑の草取りの忍耐もあの一日のお陰だ。渡辺和子著の『置かれた場所で咲きなさい』と共通して、自分の環境を受け入れ一生懸命生きてきた。

末っ子の私は、母の苦勞している姿しか知らなかったが後になって兄や姉たちから、紙問屋の娘で女学校時代は卓球をし、町では評判の美人だったらしい事、釜山では着道楽だった事等を聞いてほっとした。晩年は生活も安定し、孫達と穏やかに過ごした。親孝行らしい事はできなかつたが、就職と結婚は本当に喜んでくれた。

あの日、母が何処迄考えていたのかはわからないが、「私の一番古い、記憶」の忘れられない一日である。

三歳の記憶

児玉 寛嗣

ひとつ年下の妹を病気で亡くしたのは、私が一歳八カ月の時だった。両親の話によると、顔を撫でるなどして可愛がっていた妹が急に居なくなつて、私は少しの間、元気を失くしていたそうだ。よちよち歩きを始めた頃だったろうが、記憶にはまったく残つてない。

ものの本によると、幼い頃の記憶が残っていない理由には二つの説があるそうだ。「幼児期の学習能力が未熟であり、記憶をうまく定着できない」という説、「記憶を貯蔵した神経ネットワークが発達した後に記憶が書き込まれて、当時の記憶が消された」という説だそうである。

たとえば言えば、製造過程のパソコンにファイルを書き込んでも記憶装置が未完成で書き込めない、あるいは、書いても後になって上書きされ記憶が消されるようなもの

のだろう。

ある研究によると、重要な出来事（弟や妹の誕生、祖母の死亡）について調べたところ、思い出せたのは三歳以降のことばかりで、それ以前についてはほとんど何も覚えていないものらしい。

三歳八カ月の時、昭和二十八年六月に西日本一帯に記録的な大水害があり、我が家も床下浸水の被害にあったらしい。と言っても記憶にはない。当時の新聞によると、活発な梅雨前線の影響で九州北部を中心に豪雨災害が発生、死者・行方不明者は千人を超え、浸水家屋四十五万棟以上にのぼり、山陽本線の関門トンネルが水没し、復旧まで二週間以上を要したとのことだ。

父は時々その水害の模様を話してくれて、その中で「水浸しになった玄関にあった自分の長靴が浮いて外に流されたのでそれを追いかけて行って、お前はなかなか戻って来なかった」と言っていた。何回もそれを聴かされ、またその話かと辟易したものである。なぜか「水に浮いて長靴が流されて、それを追いかけていくがなかなか追

いつけない」という夢を見たことがある。疑似体験をしたように記憶があとから刷り込まれて、古くからある記憶と勘違いしたのだろう。

一方、鮮明に覚えているのは、七月か八月頃のことだ。家の近くの公園で夜、野外上映されていた映画の一場面が記憶に残っている。注射器を医者を取り上げ、患者に注射しようとしている場面が大写しに映し出されたのだ。注射が大嫌いだったし、注射器が巨大に見えたからだろう、あまりの恐ろしさに母親にしがみつき、大声で泣き叫んだのを覚えている。恐怖を感じたことは、記憶に深く刻み込まれるものかもしれない。

その年の十二月には近くに公園などない郊外に引っ越したので、水害のあった年のことに間違いない。三歳九カ月か十カ月の頃のことだ。前述の研究によると三歳以降とあるから私の記憶力も標準並みということかと安心した。

時は下って中学生になった頃のことだった。テレビを見ていた父が母を呼んで「歌っているのは本屋の中尾の

娘だよ。オヤジによく似ている。間違いない」と言った。テレビの画面では中尾ミエが「可愛いベイビー」を歌っていた。母は「娘によく似てるが中尾ミエは芸名かもしれないし、本当にそうかな」と疑心暗鬼だった。しかし、父はどこで知識を仕入れてきたのか、彼女が福岡県小倉出身で間違いないと自信たっぷりだった。

園まり、伊東ゆかりとともに彼女は「ナベプロ三人娘」として一世を風靡していた頃のことだった。父の言っていた中尾書店は、私たちの家がまだ小倉の街中にあつた時に家の近くにあつた書店である。母から「中尾さんの娘さんはアンタをよく可愛がっていたよ」とよく聞かされていた。彼女は私より三歳年上であるからそういうこともあつたかもしれない。だが、残念ながら記憶にない。恐怖と違って楽しいことは記憶に刻まれにくいのかもしい。中尾書店が店を畳み、一家が首都圏に引っ越していったのは、私たちが郊外に引っ越して数年後のことだ。中尾ミエに可愛がられた夢は残念ながら、まだ見たことがない。

京都駅火災と大内小学校のこと

清水 勝

我が家が永く暮らしていた京都市の家は、昭和十九年に行われた建物強制疎開により退去させられ、身重の母が実家の滋賀県に疎開し、その地で私が生まれたそうだ。

戦後は京都に戻り、旧二条通りに住んでいた。ここで
の記憶はぼんやりとしているが、ある朝「京都駅が燃えている！」との叫び声が聞こえ、二階の窓から南の方向に大きな煙が上がっているのを見たのはすっかり記憶している。

一九五〇年（昭和二十五年）十一月十八日に京都駅火災が発生。それを遠くから見た私は五歳四ヶ月だった。これが私の一番古い記憶になる。

京都駅は全焼したものの、御便殿（天皇の休憩室）は延焼を免れ、その傍に置かれていた進駐軍の武器弾薬は無事に運び出されたと知ったのは、物心ついてからのことだった。そういえば、当時ジープに乗った進駐軍の兵

隊さんを見かけた記憶がある。但し、ガムやチョコレー
トを貰いには行かなかった。怖くて行く勇気がなかった。

この年は京都に大火災が多く、同年七月二日には有名な金閣寺が炎上している。さらに私の住んでいる旧二条でも近くの工場が燃えた。この時の消火活動の様子をすっかり観ていた記憶がある。

私の古い記憶というのは、火災と
いった非日常的な出来事ばかりだ。

この火事から数ヶ月後に父の転勤
で、七条の社宅に引っ越した。

七条の住まいで印象に残っている
のは、七条通りにネオン街灯が灯ったことだ。その点灯式に島原太夫さんの一行が練り歩いた。高下駄姿で妖艶な歩きと立ち振る舞いの美しさに驚いた記憶がある。

六歳になった昭和二十七年四月に同じ町内にある京都



焼失した二代目京都駅

市立大内小学校に入学した。一年生の担任は龍先生。

この小学校は校区に鳥原があつた所為か芸事が盛んで、学校行事では三月に行われる学芸会に力が入っていた。学年毎に劇や音楽演奏などを舞台で披露するのだ。

一年生の演目は『浦島太郎』だった。誰が浦島か、誰が乙姫様か、子供心に興味と関心を持った。

どういふ訳か私が浦島太郎役となった。おとなしく目立たないタイプだっただけに自他ともに驚いた。後で聞くと、話し方が当時としては比較的是つきりしているから選ばれたそうだ。

それからが大変だった。台詞を暗記するのに苦勞したが、それ以上に母に苦勞を掛けた。戦後間もない物資不足の時に衣装等を揃えるのに母が随分困っていた。全て手作りで本番の二、三日前によく揃えられた。

舞台での課題は、浦島が玉手箱を開ける時にどんな振る舞いをするかだった。先生方が知恵を絞られて、玉手箱を開けた時に浦島が両手で顔を覆い、第一幕終了の幕が引かれることになった。次の第二幕は老人になった浦島太郎役を確か北島君がやったように思う。残念ながら

乙姫さんの写真はなし、名前も記憶がない。

思ひ出深い大内小学校には三年生までで、父親の転勤に伴

い大阪府吹田市に引っ越した。

転校して五十年後に大内小学校を訪ねてみた。同じ場所にあつたものの校名が変わっており、校門の傍に大内小学校の碑があつた。

「大内小学校は明治五年東寺境内に東寺廻り村小学校として創設され、以後八条学校修道小学校と校名を改称。明治十九年現在地に移転し、大正二年更に校名を大内尋常小学校と改称した。開校以来百二十四年の歩みの中に一万三千余名の卒業生を世に送り出した。平成七年二月校区の人々の賛同を得て安寧小学校との統合を決定し、新しい統合校梅小路小学校に後を託して、平成八年三月その輝かしい歴史の幕を閉じた」とあつた。

その時に訪ねた級友大川君とは今も親しくしている。



古い記憶

志村 良知

誰かに背負われて小高いところにいる。

遠くの闇の中を松明が連なって動いている。「こっちへ来たらおっかねえ」

虫送りの風景であろうが、誰に背負われていたのか、本当に見たのか、後に聞かされたことなのか定かでない。

これでもし本当に私の記憶なら二歳になったばかりの夏ということになる。それはいくら何でも早すぎると自分でも思うが、三歳の夏と四歳の夏にはともに大きな出来事があり、こんな抒情的な風景の中に身を置くことはなかった筈である。

人間の一番古い記憶というのは、普遍的には三歳くらいの時のものらしい。三歳という年齢はこれも平均的に、言葉をかなり自在に操って考え始める時期、すなわち自分以外の人間とは別の独立した存在であると気付く時

期である。言葉を操って思考し、自我に目覚めるのと同じ時に記憶が始まるということであろう。

虫送りから一年経った三歳の夏、私は親も死を覚悟したほどの大病をした。

村に消化器系の伝染病が流行り、兄ともどもそれに罹った。三歳になったばかりの私はまさに瀕死であったらしい。当時の我が家の主治医は、遠縁の元海軍軍医学校長の中将閣下というとんでもなく偉い先生で、クロロマイセチンを処方してくださった。

病人は、土蔵に付属した小座敷に寝かされていた。そこから裏庭が良く見える。雨の中、その裏庭を走って行く黒い影の記憶がおぼろげにある。後で聞くとそれは爺様の甥という人で先生の命を受けてクロロマイセチンの入手に奔走、やっと見つけた薬を一里の雨の山道を走って届けてくれた時の姿だったのだという。先日、当時九歳だった長兄とこの時の詳細を確かめあったが、あまり矛盾はなかった。薬はカプセル入りで、先生の手紙での指示通り母がそれを割って指先につけて私になめさせた。

その効き目は鬼神の如し、で日ならずして命の危機は脱した。安堵した父が詠んだ。

蝸^かを去る死魔の寢夜が白む

黙榮

四歳の夏の始め、高所から落ちて右腕を骨折した。落ちた瞬間のこと、農繁期で忙しかったであろう父が自転車の後ろに括り付けた竹籠に私を入れ、四キロ余り先の町の医者まで通ったこと、青いギンガムチェックの半袖シャツから突き出す針金で補強されたギプスなどを覚えている。

この時の後遺症で右腕は、伸ばした時肘関節の内側が上を向いてしまう。小学校一年生の時、「前へ倣え」で、他所のクラスの男教師が後ろから無言で肘関節を強く振り、直らないとわかると「なんだ…」と、立ち去った。これは強烈な侮辱だった。ませガキだった私はその背中に「死ねっ」と呪詛を送った。人を憎んだ最初の記憶である。小学校一年生にして学校の先生といえどもまず人格を疑い、慕うという事もせず、距離を置くようにな

った。この事件が無かったら私はもっと素直な良い子で成績を伸ばし、人生が変わっていたかもしれない。

楽しい記憶もトラウマも時の経過と共に薄れ、消えていく。それが映像であっても匂いであっても音であっても、意識の中に留めておくには言葉による補強・キャプシオンが必要だからである。

自我と言葉の確立で生まれ、意識の中に留めてこられた記憶。自我と言葉が揺らぐと、記憶も瞬き、斑になっていく。意識の中に映像が浮かんでも、戸棚の奥の古い手箱にあった百年前のバラバラの写真を見るのと同じで、ただそこに色あせた景色があるだけになる。

年齢と共に記憶が薄れ、斑になり、消えていくのは宿命であろう。その速度が異常に早くならず、周囲から「年だね」と笑われる程度に収まっていて欲しい。それは高齢化社会のみんなの願いである。

ある戦後

首藤 静夫

戸戦争が終わって 僕は生まれた

戦争を知らずに 僕は育った……戸

この歌が流行ったのは一九七〇年、いわゆる七〇年安保の頃である。僕たち戦後のベビーブーマー（団塊の世代）は大人になりかけの、危なっかしい年頃だった。学園紛争（当時は学園闘争といっていた）の主役を演じた世代である。

僕が生まれ育ったのは九州東部の半農半漁の村。数千人の人口で、先祖代々受け継がれた田畑や沿岸漁業を大切に次代に受け継いでいる村だった。

物心がついた時、戦争の傷跡は村内に殆どなく、粗末な衣食住ながら一応は三食にありつき、「民主教育」のお陰で学校生活も平穩に送ることができた。

教室では大半の子が夏は裸足、冬は足袋。一人か二人

は靴下をはいていたが、靴下の底はすり切れている。それでも村内ではましな家庭の子だ。冬に半ズボンの子など一人も居なかった。

戦後ののどかな村であるが、記憶の底に残っているのは在日韓国・朝鮮人の人々である（以下、在日と略称）。全村で約十五戸が二ヶ所にまとまって住んでいた。

小学校では普通につき合い、一緒に登校した。ただ、雨の日など、傘を持たずに濡れて登校する在日の子、雨靴がなくゴム草履や裸足で登校する子の姿は今も記憶にある。この方が気持ちいい、と強がりをつけていた。

学校給食が始まったのは三年生くらいで、それまでは弁当持参。ところが、在日の子の中には、食べに帰るといって昼になると教室を出ていく子がいる。それが弁当時代なのか給食時代なのか、その両方だったのか記憶ははっきりしない。後年、あれは食べに帰ったのではない、昼食時間の教室に居づらく、外で遊んでいたのではと思うようになった。学校から食べに帰るには距離があった。幼い子供には大変なことだったのではないだろうか。

在日の子の一人にM君という同学年生がいた。小柄な気の強そうな子で、家が近いことからよく遊んだ。

夏休みには近所の畑でトマトを二つ三つ失敬し、遠浅の海にそれを放りこみ、二人で競って奪い合う。敏捷な彼は素晴らしい抜き手で水をかき分け、いつもトマトに先着した。

ある夏、脚が立たない深さまで泳いでいき、二人とも体力を消耗して溺れかかった。たまたま沖の方を見ていた網元が小舟でかけつけてくれ命拾いした。その網元が営む地引網にも二人して勢子で加わった。朝早い網の時には彼が迎えにきてくれた。

これほどの仲であったが、彼の家に行ったことはない。家に入るのには暗黙のタブーだった。彼らの親はほとんどが日雇いや養豚、芋焼酎のヤミ醸造などで暮らしていた。日本語がたどたどしい親もあり、字を書けない人は僕の父親に代筆を頼んでいた。彼らはどういう経緯でいつ渡日したのか。年寄りは見かけなかった。古い話ではなさそうだ。

村の駐在がヤミ焼酎を飲みにきていた。恐らくはタダ酒だ。ところがある日、そのヤミ焼酎が摘発され、醸造用の瓶がたたき壊された。その駐在が警棒でM君のお父さんを殴っている。子供ごころに腹立たしかった。

中学に上がる時分には在日の子供たちは半分近くになっていた。M君ともいつの頃からか疎遠になり、途中ですれ違ってても会釈する程度だった。

ある時、たまたま出会った彼から、近々一家で神戸に移ることになったと一言聞かされた。

その後北朝鮮に渡った人、韓国に帰った人、そのまま関西に住みついた人、それぞれの人生を生きてきたのだろう。ただ、いずれも平坦な道ではなかっただろう。

日本は平和ボケで八十年近く来たが、朝鮮半島は今も一触即発の日日だ。朝鮮が話題になる度、彼らの昔と今に思いを馳せる。

私の青少年時代

田原 敬

私は二〇二二年現在で九一歳になる。昭和六年二月八日に東京浅草で生まれた。両親は共に日本画家であった。父は三重県鈴鹿市にて明治二四年に生まれ、母は長野県上田市に近い川辺村の農家で明治三七年に生まれた。

母は、親に相談もせず本人の志望で上田女学校に合格すると歩いて上田まで通った。片道でも一時間半位はかかったようだ。卒業すると地元に住られた堀内海軍中將に相談し、中將の紹介で東京大学の近くに住んでおられた女流画家荒木月畝先生宅にて、住み込みで日本画を勉強した。父は、上野の芸術大学の近くに住んでおられた池上秀峰先生の門下生となり日本画家となった。

終戦の昭和二十年三月、日本で初めての大空襲により浅草地域は広範囲に亘り被災して、私が生まれた浅草の

家は、一夜で焼けてしまった。私達家族は信州上田市に隣接する母の生まれ育った川辺村へ疎開して過ごした。

父は信州に疎開したものの、画家としての生活は容易ではなく、日本橋に近い証券会社に就職した。その会社から大阪方面へ出張を命じられた。

ところが、大阪へ向かう汽車が静岡県の弁天島の辺りで米軍飛行機の機銃掃射に襲われて、父は胸に被弾し即死してしまった。電報を受けた兄の豊は直ぐに現地へ向かった。父の遺体は、教えられた場所に仮に埋められてあった。シャベルはどうしたのかわからないが、兄は自分で掘り出すとトタンに乗せ焼き、骨にしてから信州へ持ち帰った。

出発前に信州の家へ電報を打ってから現地へ行ったが、終戦の間近で電報は信州の私達の家には届いていなかった。信州に帰った兄から、母がその経緯を聴かされている傍に私は居た。

地獄へ落ちるような心境だった。収入を失った母は地

元の農家の手伝いなどで収入を得て、私達を育ててくれた。そういう厳しい状況の中で育った私は、高校を卒業すると就職の為に直ぐに東京へ向かった。

初めは兄の住む下宿で居候をしていたが、この家は異常な程の綺麗好きな家であった。私にはとても向いていないと思い、直に日暮里へ移り住んだ。

終戦後間もない時期であり、浅草区や向島区の広範囲にわたって丸焼けの状況であった。その当時はろくな仕事もなく、初めは、生命保険の外交員をやってみた。

ある日、日暮里の近くの民家を保険の仕事で訪れると、私は「この辺で部屋を貸してくれるような家はないでしょうか？」と聞いた。すると「又、いらっしやい！」と言われ、私は信用されてこの家に永く住んだ。この家は、奥さんと小さな子供の二人だけであった。

私は気に入られ、其の家の二階の二部屋を兄と一緒に貸してもらった。当時は雇ってくれる会社も少ない時代であった。



二つの古い記憶

長尾 進一郎

古い記憶は、頭の中にふと現れては消える走馬灯のようなものだ。どれが一番古くてどれがもつと後か、それぞれの記憶に日付が付いている訳でもなく、今になると時期を思い出せないものも多い。しかも残念なことに、古い記憶は加齢と共に少しずつ失われている気がする。その中から、比較的鮮明な二つの記憶を記してみた。

一つ目は、幼稚園に上がる前だろうか、家から十分ほど歩いた所にある東北線の線路際の光景だ。私の父は鉄道などの乗り物が好きで、私に列車を見せるために時々ここへ連れて来てくれた。この日は姉も一緒に居たと思う。目の前の六本の線路に列車が行き交い、その手前、普段は列車が通らず草の生えた引き込み線が、本線から分かれて右手の工場へ向っている。この時代には線路際に柵も無く、三人は引き込み線の線路に腰掛けて、本線

を通る列車を眺めながらのんびり菓子を食べていた。すると突然左側で汽笛が鳴り、引き込み線の線路上にのっそりと黒い汽車が現れた。工場へ貨物を運んで来たらしい。座っていた三人は大慌てで跳び退いた。でも当時では珍しいことでもないとみえ、機関士に叱られることなく汽車はゆっくり通り過ぎた。

この線路際はその後何度来たことだろうか。気づいたら鉄道が私の趣味になり、模型を作って走らせ、学生時代には汽車の写真を撮りに各地へ出かけた。退職後は実家の庭に線路を敷いて、時々豆列車に友人や近所の子供を乗せて遊んでいる。幼時の体験が生涯の道楽になった。そのきっかけを作ってくれた父は、喜んでいるだろうか、あきれているだろうか。

二つ目の記憶は幼稚園の入園式当日のことだ。これが私にとって最初に家族以外の集団に入った体験である。それまで優しい母や祖母に見守られ、ほぼ家で過ごしてきた私は、外で遊ぶ友達も少なく、絵を描いたりして一人で遊ぶ内気な子供だった。

入園式当日、母に手を引かれて幼稚園に来た私は、玄関で先生に引き渡されて教室に入った。室内にはこれから一緒に過ごす子供達がいるが、私の隣にもう母はいない。窓際に寄って外を見ると、一人で帰ろうとする母が手を振っている。

この時の心細さは、今でも忘れられない記憶である。見ず知らずの集団に放り込まれて、誰の言うことを聞いて何をすればよいのか。私は半泣きになっていたに違いない。大げさに言えば、これが初めて私が家から「社会」に出た試練の始まりと言つて良い。

多分最初の頃は下を向いていたと思う。しかし先生の話を聞き、歌を歌い、外で遊んで幼稚園の生活が進んで行くうち、幼いなりに、自分の置かれた環境に慣れて行かなくてとはという気持ちが出て来たのかも知れない。同時に友達と遊ぶことが楽しいものだと思えて来た。程なくして幼稚園生活が普通の日常になった。そして今振り返れば、友達と仲良くしたり、皆で協力して作業したりといった、社会生活の元になる行動の訓練も、知らず知らずのうちにされていたのだと思う。

幼稚園の次は小学校、中学校……と進むたびに、これまでと異なる環境に否応なしに飛び込んで、変化に戸惑いやがて慣れて友達ができ、楽しい経験をし、時には先生に叱られたり友達に意地悪されたり、様々な体験をしてきた。総じて見ると楽しいことの方が多く記憶に残っているのは、環境に恵まれていたのだろう。その後経験した就職にしても結婚にしても、これまでと違う新しい社会に入る点においては、同じ延長線上にあつたと言える。誰もが通る道だと言われればその通りである。そうした体験のひとつひとつが、大なり小なり現在の自分を形作っていると思うと、振り返って感慨深い。そこから得た教訓の一つは、大抵の事はチャンスがあれば経験しないよりはしておいた方が良く、ということだ。そうすれば次の機会にはあまり戸惑わず、もう少しくまぐできるような気がする。でも、もう一度最初からやってみたくかと思われれば、何度となく受けた試験や苦しい体験をまた味わうのはご免である。

六甲山麓・音屋の思い出

西川 武彦

今から八十年前、幼稚園に入る頃に数年間、父親の大阪転勤で、関西は六甲山の麓に住んだことがあります。

その山麓から芦屋の海に流れ込む宮川という川幅二十メートルほどの川があり、今という社宅は、山に向かつて川の左側の緩やかな坂の上にあります。

向こう岸には、在日韓国人が住む集落が拡がり、異国の風情が漂っていたようです。親からはなぜか危ないからそこには行かないように言われていました。

昭和三十年代の学生時代の夏休みに、好奇心で、界隈を探訪したことがあります。住所を頼りに、それともしき場所に辿り着き、箒で家の前を掃いていた同年代の女性に声をかけると、「あらまあ……」と、目を丸くしながら懐かしそうに頬を崩し、川向うへの行き方、今の状態などを簡略に教えてくれました。

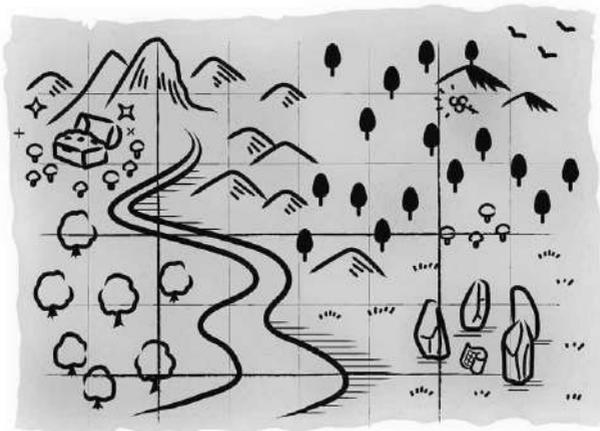
五分ほど県道を歩き、初めて訪れる異国という感じで、胸をふくらませながら木造の橋を渡ると、地形は変わっていないものの、平屋が多い家並みは今風に変貌して、異国の趣はありません。韓国の町に漂うキムチの香りもない、今時の日本ならどこにもある風景です。

耳をすませば、韓国語が飛び交っていました。それがなぜか日本語に聞こえるほどです。集まってお喋りしている女性群に話しかけ、事情を話すと、「そういうことですか、いやまあびつくりですね……」と、頬を緩めながら、界隈の状況をしっかりと説明してくれました。

「この辺りの地図がこれです。よければお持ちください」差し出されたよれの地図を拝むように頂き、お礼を告げて別れました。地図には、そこから歩いても行ける距離にある六甲山も載っています。半日の「お国帰り」で、手持ちのフィルム二本をあつという間に使い切ってしまった。

東京の下北沢の家に戻ると、裏手にある洋館に住む進

駐軍の将校の娘たちが遊びに来ました。クッキーのお土産付きです。同じ年代の妹の遊び友達なのです。英語が飛び交います。時代が変わったのだ……と、奇妙な感覚が身体を包みました。



マイファーストメモリーインライフ

山縣 正靖

小生の幼年期の思い出は切れ切れで、はなはだ危ういものですが、その中で断然切れのよい思い出がある。今でも再現できる。それが「マイファーストメモリー」だと思います。

当時、小生の父は江田島海軍兵学校の教官をしていましたので小生も江田島にいました。そこで鮮明に覚えているのは海軍の軍人が白の礼装でぎつつぎつつと行進している姿です。その厳肅な姿から子供でも海軍葬だということとは明らかでした。後で判ったことは南方で戦死した山本五十六元帥の海軍葬だったのです。当時わが軍は空母撃沈何隻、戦艦何隻とのプロバガンダが盛んでした。東京で海軍葬を行うのはいかにもまずい。そこで江田島で海軍葬を肅々と行ったのだと思います。

次のメモリーは広島に原爆が落ちた朝のことです。当時、父はレイテ沖海戦に出撃していたので、家族は官舎

を出て母方の故郷岩国にいました。小生はあの日に体調不良で家にいたのですが、朝八時ごろいきなりドーンと物凄い爆音がとどろいたのです。広島隣の岩国までまさにピカドンでした。これまた鮮明に覚えています。数日後に頭髮の抜けた女性が広島から帰ってきました。後日、丸木俊夫妻の原爆の図を見ると、惨状はそれどころではなかったとわかりました。

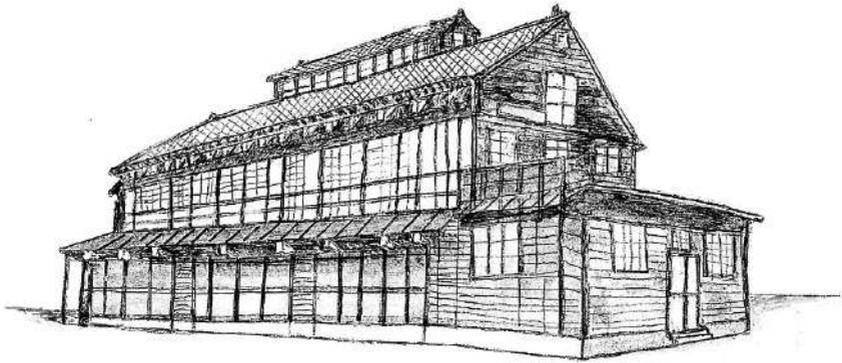
小生の幼年期は我が国の敗色が明らかになった時期です。小生が鮮明に覚えているファーストメモリーは悲しいものでした。

「勝負師は『負ける戦争を始めてはいけない』という鉄則を守れ」と思う日々です。

挿絵について

小生は今や歴史のかなたに消えさりつつある歴史的建造物をせめて『悠遊』に残そうとの思いで挿絵を描いています。

今回の建物は八王子から秋川に進む秋川街道の一面にある旧織物工場です。当時八王子は各街道から生糸や織物を集め、織物や染色の加工を加えて貿易港である横浜に届けるというザイデンシュトラッセ（絹の道）の役割を担っていました。当時としては壮大な三階建て、日本の伝統的な木造建築手法で建てられており、よくも火災に会わずに生き残ってくれたと感謝する次第です。工場の中には蒸気機関がゴッシュ、ゴッシュとうなりをあげ、そこからベルトが張り巡らされてガチャ満と呼ばれた織機がガチャン、ガチャンとはたを織る。野麦峠を越えてやってきた若い女工さんがかいがいしく働くという姿が思い浮かびます。



my

大泉潤さんを偲んで

中村 晃也

『悠遊』二十七号、二十八号と連作で彼は「私の履歴書」という文を掲載している。二十七号では生い立ちから始まり、晩年は日本ラグビー協会の事務局に奉職し、ワールドカップの日本での開催に尽力したこと。そして自分の人生での最大の遺産は母校一橋大学のラグビー場を国立市に建設したことだと述べている。一昨年発刊の二十八号では、自宅のある世田谷の立地の良さに満足しこの地を終の棲家になりたいと述べている。この頃から自分の体調の不安を感じていたのかも知れない。

彼と私は都立戸山高校の同期生であるが、在学中はお互いにその存在すら認識していなかった。彼はラグビー部で練習に明け暮れ、私は登山とスキーにうつつを抜かしていたからだ。共に一浪して同じ会社に入社して、その時に高校同期であったことを知った。

会社でも彼は合成樹脂の営業販売で全国の支店を巡り、私は研究所から新事業開発部門で海外出張が多かったので、本当に親しくなったのは退職後の同期会の幹事を一緒に務めてからであった。彼は実直な人柄で同期会の幹事を誠実に務める一方、話と言えばラグビーのことばかりで個人的な接点はあまりなかった。

私が『団塊が思わず嵌るフォト俳句』というアルバムを刊行した際、「写真は上手いが句は今いち」だと評されて悩んでいた時、俳句を習うのならこのペンクラブに入ると良いと教えてくれたのが彼だった。

それから十年余り彼とは「ペン俳句の会」と「何でも書こう会」で月に一回顔を合わせる程度のお付き合いだった。コロナ禍の影響もあってこの二、三年は会社の同期会も実施できず、連絡し合う機会のないままに、この追悼文を書くことになろうとは…。

潤さんよ、天国で再会したら改めてこのペンクラブを紹介してくれたことのお礼を言いたいと思っっているよ。

自由テーマ



写真 松浦 俊博

オペラ座の怪人

吉田 眞人

いささかミーハー的ではあるが、ミュージカル「オペラ座の怪人」を何回も観に行った。ロンドンとニューヨークで併せて十回程になるだろう。

このミュージカルは、フランスの作家ガストン・ルルーが一九〇九年に発表した小説を基に、アンドリュール・ロイド・ウェバーが作曲だけでなく、脚本(リチャード・ステイルゴートと共作)も担当して出来たものである。

ロイド・ウェバーはこの「怪人」の他に、「キャッツ」や「エビータ」等も作曲・製作しており、ミュージカル界の巨人と言えよう。

話の筋は他愛もないものだ。

一九世紀末のパリ、オペラ座(オペラ・ガルニエ)では、仮面をかぶった謎の怪人の仕業とみられる奇怪な事件が多発し、劇場関係者から恐れられていた。若きコーラスガールのクリステイン・ダーエは、ある時、オペラ

で主役を務める女性歌手の代役として抜擢され、喝采を浴びる。新たにオペラ座の後援者となったラウル子爵も祝福に訪れ、彼女のファンとなる。その直後、怪人が現われ、彼女をオペラ座の地下へと誘い出す(*)。怪人は彼女に歌手としての素質を見いだしレッスンを授け、彼女は怪人を「音楽の天使」と信じ、彼の指導で歌の才能を伸ばす。クリステインを巡り、ラウル子爵と怪人のさや当てによる三角関係のストーリーが描かれ、最後は怪人が…

(*) 地下の水辺をボートで渉る場面がある。現実のオペラ座にも、湧き水を貯める地下プールがある。このミュージカルの魅力は何だろうか。起伏に富んだ展開、豪華な舞台、そして何よりも記憶に残る数々のメロディー。またハッピーエンドではない結末も。

二〇一六年時点で、三十五ヶ国、百六十都市において十五ヶ国語により六万五千回の公演がなされ、延べ一億四千万人が観劇している。

初演は一九八六年九月にロンドン・ウエストエンドの

ハー・マジエステイズ劇場でなされた。ここには欧州出張や旅行の機会に、ほぼ必ず行った。チケットは、取引先に頼んだり、当日のキャンセル待ちに並んだり、又ダフ屋から買ったこともある。その後はネットでの購入が可能となり便利になった。観劇後、いつも劇場からホテルまでのんびり歩いて帰ったので、ロンドンの治安は良かったと言えよう。尚、この劇場の名前は昨年九月にヒズ・マジエステイズ劇場と改称された。

ニューヨークではブロードウェイのマジエステイツ劇場で上演されている。ここにも三回行った。さすがに歩いて帰る訳にはいかないので、最寄りの停留所からバスを利用した。これも便利で安全だった。

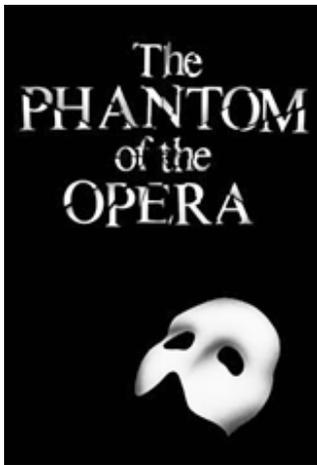
ヒロインのクリステイン役は、ミュージカルを目指す女性の憧れで、様々な国でこの役を目指して多くの女性が鎬を削った事を、ユーチューブで見ることが出来る。サラ・ブライトマン（初演時に彼女の声に合わせてロイド・ウエバーが作曲したといわれる）等、その後スターの座を獲得した歌手も少なくない。

コロナ禍でロンドンとニューヨークの両劇場とも一時

は閉鎖を余儀なくされたが、現在は上演が再開されている。昨年初めて、折からのブラック・ライブス・マターの動きに対応するためか、また陰りの見られる観客動員に黒人客を呼び込むためか、両劇場ともヒロイン役に黒人の歌手を起用した。ユーチューブで見たがなんとなくしっくりしない。

日本では劇団『四季』が何回も上演しているが、観に行ったことはない。日本語訳の歌詞で歌うので、まるで学芸会のような。

尚、ニューヨークでは観客数が盛り返せず、本年の四月で上演を終了する、と発表された。何とも残念なことである。



そうだ京都に行こう

矢澤 正二

紅葉の京都、雪の京都には既に訪れていたが、かなり以前のことであった。今回は初夏の京都を、東山に宿をとり奈良、先祖出身の滋賀県それから幼少期住んでいた神戸・岡本を訪れた。

京都は第二次世界大戦中、アメリカの文化人が「歴史的環境保全」の見地から合衆国政府に空襲免除の要望書を提出した。その結果、京都ほか数か所の都市は戦火を免れた。そのお陰で私たちは千年の古刹を訪れることが出来る。

現在のウクライナの惨状には胸が痛む。

南禅寺・永観堂

紅葉では訪れたが、今回はゆっくりと拝観できた。境内は人もまばらであった。南禅寺を抜け哲学の道を歩く。コロナ禍の規制が緩和されたとはいえ市内の店は休業

のところが多かった。

五月ながら真夏のような暑さで歩き疲れた。路地の奥まった所に和菓子の「のれん」が目にとまった。品のいい女主人が割烹着姿で応対してくれた。店に入ると年代物の調度品に目を奪われた。聞けば亡きご主人の愛した品であると話してくれた。美術を愛しジャズを愛した亡き夫との想い出を控えめに語る。そのステレオから流れるジャズに時を忘れた。

抹茶と和菓子は絶品であった。再来を約して店を出た私は爽やかな気持であった。

旅は、人との出会い、そして食であると再認識した。なかなかの名店であることは後で知った。

糺の森・北野天満宮

鴨川と高野川の合流する三角洲にある下鴨神社の境内の原生林。ここにくると下鴨神社の神霊から暑さ、雑念を忘れおごそかな気持ちになる。エノキやムクノキが生い茂り落葉樹が中心の森をなしている。これが近年日照不足や気温の上昇により元々ここには生育していない

シユロの樹が侵入し増加しているようだ。

その後、北野天満宮を訪れ、あおもみじを鑑賞した。

奈良・般若寺

近鉄奈良駅からバスで一〇分、源平の戦いを始め幾多の争乱をくぐり抜けてきた般若寺がある。境内には季節はずれのコスモスの花が咲き、コスモス寺と呼ばれる。

その近くにある旧奈良監獄は、赤レンガの秀麗な明治建築で、リゾートホテルに生まれ変わるといふ。

東大寺

「奈良の大仏さん」が入る大仏殿は内も外も修学旅行生で溢れていた。「立ち止まらなくてください」のアナウンスにゆっくり見ることは出来なかった。大仏殿から外に出ると修学旅行生が鹿と戯れていた。日本は平和でいいなと感じた。

滋賀県・比叡山

叡山電車、ケーブルカー、ロープウェイを乗り継ぐと

比叡山山頂に着く。そこから琵琶湖が眼下に見える。

これが滋賀県、我が祖父が幼い頃、近江商人としての第一歩を踏み出したところかと思いをさせた。そして坂本において延暦寺御用達の「手打ち蕎麦」を賞味した。

それから叡山電車で貴船を訪れた頃には、あたりは薄暗かったが貴船神社にお参りした。

神戸・岡本

京都から阪急電車に乗って神戸・岡本に着いた。岡本の想い出は、まだ幼い頃焼け焦げた焼夷弾の抜け殻と防空壕の湿った空気である。駅を降りてあたりを散策した。

おもかげを辿って歩いたが勿論当時の家らしきものはない。老婦人に出会い、聞けば震災（阪神淡路大震災）以降街は大きく変わったとのこと。

京都市民にとっては、市の財政難から元々高い地下鉄運賃の値上げ、高齢者向け福祉行政の低下、外国人旅行者が戻ってくることの功罪など問題山積である。

「どうする京都」「どうする日本」

グローバル・ワクチン・パスポート

森田 晃司

二〇二二年十一月十五・十六の両日、インドネシアのバリ島でG20が開催されました。世界の二十の大国の首脳が参集するこの会議に、なんと、クラウス・シュワブ氏が、ビル・ゲイツ氏とともに参加しています。シュワブ氏は、世界経済フォーラムの創設者であり、ダボス会議の主宰者であり、世界を根底から再構築するとう「グレート・リセット」を提唱しているグローバルイズムの理論的指導者でもあります。

この会議で、同氏は民間人でありながら各国の指導者に対して、「グローバル・ワクチン・パスポート」の推進を提言しています。従来の紙のパスポートに替わって、WHO (World Health Organization 世界保健機関) の認証するデジタル・パスポートに発展させるべきと主張されます。

デジタル・パスポートが実施されれば、我々の行動は

一部始終を権力者によって監視され、束縛されることとなります。WHOのご意向に反して、例えば、ワクチンの接種を拒否すると、飛行機はおろか、電車もバスも利用を制限され、スーパーも飲食店も入店を拒否され、野球観戦もままならないといった事態となりかねません。

特に、この提唱の肝はWHOの認証するパスポートで世界を渡航できるとする点にあります。WHOに国家を超える絶大な権限を付与することになりますが、WHOは、国連の機関ではあるものの、もともと「ロックフェラー財団」の内部の「国際保健部」が母体となって誕生した組織です。現在も最大の資金提供者は、各国からの出資を抑えて、ゲイツ氏及びビル&メリンダ・ゲイツ財団です。いわば、「ロックフェラー財団」からゲイツ氏が運営を受け継いだ形で、WHOはゲイツ氏の意のままに動く組織と云えます。

この「グローバル・ワクチン・パスポート」なる構想が実現すると、ゲイツ氏及びその背後に控えるロックフェラーやロスチャイルドなど国際金融勢力が全世界の人々の行動を把握し、彼らが必要と判断すれば、いつで

も人々の行動を制限することができるようになります。

二〇二二年十二月五日、ジュネーブにあるWHOの本部において、グローバル・ワクチン・パスポートを認可する権限をWHOに付与することを骨子とした「パンデミック条約」についての討議が開始されたと報じられています。

有力なIT企業のエリクソンを抱え、グローバルイズムの先進国と云った趣きのあるスウェーデンでは、人間の体内にチップを埋め込む「トランス・ヒューマニズム」の実験が始まっています。「超人間主義」と訳されるように、チップの機能で通常ではありえない超能力を獲得できるようにします。

しかし、常に居場所を特定され、人間性を喪失し、自分自身がチップを通じて他人によって操作されるなどの懸念も出てきます。

先進各国ではCBDDC（中央銀行デジタル通貨）導入の検討も始まりました。

米国でも、二〇二二年十一月十五日には、中央銀行に相当するFRB（連邦準備銀行。公的な機関ではなく、実態はロスチャイルド系の民間銀行）が、シテイバンク、マスターカードなどの協力を得て、CBDDC運用の検証プロジェクトを開始すると報じられています。

旧来の現金通貨の使用が禁じられ、すべてCBDDCでの決済を迫られると、いつ、どこで、何の目的でお金を使用したかを残らず権力者に把握されます。その上お金の使い先も限定されて、好きな用途にお金を使う個人の自由もプライバシーも取り上げられることになります。

グローバルイズムを推進する国際金融資本を後ろ盾にした巨大な民間の組織が、公的機関の権限を蔑ろにしつつ、パンデミックやマイクロチップ技術やCBDDCに関連した一連のデジタル化の動きを推進し、世界の人々を監視し、自由を奪う試みを、「グレート・リセット」と称しながら、臆面もなく取り進めています。

平和な日本で穏やかな日々を送れる時代は終わろうとしているかのようです。

くすぐられたら笑っちゃう

三 春

OBペンクラブに入会したのは今から十五年前の二〇〇八年一月だった。あの頃こんな小文を書いた。

『ロシア人の名前』

近頃は年賀状のやりとりも激減し、个性的で楽しいものにお目にかかることも少ない。それだけに、気の利いた賀状に出会った時には嬉しさもひとしおだ。

私も、受取った人に楽しんでもらえる年賀状を志して、無い知恵を絞ったことがある。なかでも我ながら名案だと思っただのは、社内の面々にロシア人風の名前をつけて紹介したもので、これは顧客への宣伝効果もあって好評だった(?)と勝手に思っている。例えば、

◆キリキリル・ベンザスキー

白いご飯と鮭缶にお醤油たらの猫まんまが大好きなYさんにとって、一流料亭での通訳には悩ましい問題が

付きまとう。綺羅星のようなご馳走を食そうものなら必ずお腹を壊してしまい、翌日は「個室」に住み着く羽目に。便座とは切っても切れない仲のベンザスキー。

◆アナスタコラ・ハダシヤンコ

昔はウワバミと言われたM姐さんも今や牙を抜かれた虎のよう。ある夜、千鳥足で帰宅の道すがら靴ずれに泣かされてか映画の一場面を気取ってか、両手にハイヒールをぶら下げて裸足で歩いていたら幼友達とバツタリ。

「何が悪い？ ウワバミも虎も靴なんぞ履かないよ！」

ロシア人の名前は正式には三つの部分から成っている。例えばミハイル・セルゲイヴィチ・ゴルバチョフのセルゲイヴィチは父称といつて父親の名を示している。セルゲイの息子だからセルゲイヴィチ、娘ならセルゲイヴナ。奇妙奇天烈な名前の父親を持つ私としては日本に生まれたことを神に感謝している。

さて、最も単純な渾名は名前や容姿をもじったものだが、それだけでは芸がない。機知に富んだくすぐりエツ

センス溢れるネーミングを目指したいものだ。これはエッセイのタイトルのつけ方にも通じるに違いない。そうした「名人級」の技を紹介してくれた二作品を挙げよう。

年賀状の一件から数年後に米原万里のエッセイ『ガセネッタ&シモネッタ』を読んだ。下ネタ好きの同時通訳者(ドージ↓ドジ)「シモネッタ・ドッジ」や、「ガセネッタ・ダジャレ」のアイデアには称賛あるのみ。

なかでも秀逸なのはTさんのひねり。「年取つたら老人ホーム作って仲間と一緒に住もうよ。ホームの名前はもう決めてるんだ。『アルツ・ハイム』っていうのさ」。

もう一つの「名人級」には椎名誠のシベリア横断紀行を推したい。『ロシアにおけるニタリノフの便座について』という、長〜いタイトルの短いエッセイは何度読んでも笑ってしまう。

取材クルーの面々にロシア風の名をつける。ラーメン好きの椎名にはシイナという名をもじって「シナメンスキー」。やがて、居眠り三昧を呆れられて「アキレサン

ドル・シナメンスキー・ネルネンコ」という三点セットの立派な名に(父称を解つちやいないけどどうでもいい)。いつもニコニコしている新田はニッタと掛け合わせて「ニタリノフ」。技術者ニタリノフはロシア特有の想定外不具合をたちどころに解決してしまう。卒倒しそうに汚い便座なしトイレもなんのその、たちまちにして簡易便座をしつらえちゃうという凄腕なのだ。

ここで話は急展開。世界を股にかけてきた彼らのウンチ(ク)話へと続く。トロブリアン諸島のキタバ島、サハラ砂漠、アルゼンチンの海岸、インドネシアのカリマントアン、タイのメナム河、オーストラリアのグレートバリアリーフ、スリランカのマレなどでの排泄風景にケタケタ笑いながらも、嬉しそうにくる猪豚や、現場に捨てたペーパーをマフラーふう巻きつけているいなせなペンギン、いつのまにか顔馴染みになった蠅たちの陽気で健気でどこか哀しい姿に、人糞と生物たちとの共生(助け合い?)がほんわかと伝わってくる。

何のことやらさっぱりという人は、是非ご一読あれ。数か月間は思い出し笑いが止まらないはずだ。

ゴールはいずに

松谷 隆

人類は二本足で歩けることおよび火を使えることで、多くの巨大かつ獷猛な動物や彼らが死滅した厳しい自然現象に打ち勝ってきたと言われている。

だが、不幸にして病気や事故による怪我のため、歩行が困難になられた人々も数知れない。技術革新により、医療システムは格段の進歩を遂げ、歩行困難者の助けとなるロボットができては高くて、大半の障害者には手が届かない。さらなるコストダウンが望まれている。

二〇二二年は筆者にとって、初めて歩行の楽しみを満喫できなかった年になった。新年早々、左腰を捻挫。それをかばっているうちに右腰までも捻挫し、完治まで一カ月半もかかった。このため、毎年恒例の初詣での前年の厄よけ札の返納ができず、縁起の悪い年明けになった。

三月下旬には、予定通り内視鏡による、二度目の胃ガンを手術を受けた。外科手術とは違い、術後の生活は非常に楽で、歩くことで体力を回復できた。

さらにコロナ感染者数も減少した五月には日帰りバスツアーや温泉に行き、六月には背中に痛みの発症も十日間の治療で完治。その後も温泉やバスツアーを楽しんだ。

だが、無罪放免とはならなかった。その悪夢は六月二十九日から始まった。バスツアーでの寺院見学中に坂道で左足を捻挫、翌日整骨院での診断は「左中足関節捻挫」で全治二週間だった。

そして、七月五日が最悪の日になった。昼食を予約していた飲食店に少し遅れて入店。混雑のなか、呼ばれたので立ち上がり一歩を踏み出した。一瞬、何が起きたか分らず、気がついたのは尻もちをつく直前。すぐ臀部に衝撃、そして上体がゆっくりと後に倒れ、後頭部をゴツン、野球帽がすっ飛ぶ。やっこのこと上体を起し、まわりを見た、踏み出したときと正反対を向いている、百八

十度回転している。

「大丈夫？ 救急車を呼ぼうか？ あの踏み台に躓いたよ」と指さす妻の声。また見知らぬカププルが帽子を渡してくれ、「大丈夫ですか？」を何回も繰り返してくださる。腰をつけたまま「ありがとうございます。少し休んでから病院に行きます」と答えるのが精一杯。

CTやMRIを備えた旧知の整形外科院がすぐ近くなので、駆け込んだ。「頭部はCT検査で異常なし。しびれが出れば、神経科へ。腰部はX線検査で異常なしの打撲、次週再診」の診断で、痛み止めと湿布薬だけで終了。

だが、翌週「左腰の痛みは収まらないので、整体院でマッサージを三日受けた」と訴え、やっと「次週MRIを」となった。その二日後、玄関先で空足を踏み、勢いよく左足をついてしまった。

十九日のMRIの結果、「ほぼ第四腰椎圧迫骨折。念のため、CTを」とのことで、ランドセル式のコルセットを装着（リハビリ開始までの五十二日間）。

その後、一進一退の繰り返しで、既に六ヵ月経過して

も、百歩も痛みなしで歩けず、完治していない。

九月、十月の院長診察では「骨折部は固まりつつあり、順調に回復中」と言われていた。十一月の診察でも同じ発言だったので、「左腰の痛みは続いている。一度MRIの検査を」と要求。二日後に検査結果、骨折部の様子は七月の画像と同じで、さすがの院長も絶句、「レントゲンではこうは見えなかった」と白旗。「あと二ヵ月の辛抱を」と言われ、渋々同意した。

「温泉療法」の賛同も得た旅行も、十二月中旬の出発時に、七、八キロの荷物を持ち上げたら、腰に電気が走った。宿では温泉に浸からずシャワーで我慢、あとは寝たきり。

七日後のX線検査では、患部以外に異常はなく、「患部に再度荷重がかかった模様。安静にして」のご託宣。

そろそろ、「セカンド・オペニオンを聴きたい」と切り出す時が来たのだとは思っている。しかし、いつになれば元のように歩けるのか見通せないことにはなんともどかしい。

身延山参詣

松田 昌康

昨年十一月中旬、一泊二日で身延山を訪れた。日蓮宗総本山の久遠寺がある。東京に来てから約六十年、比較的近い所に住みながら訪問できずにいた。久遠寺の三門に近い宿坊に一泊した。日蓮上人直弟子の方が開いた宿坊だそうで、当主は四十三代目とか。予約した妻もそこまでは知らなかったとのこと。

中央線で甲府まで行き、身延線の急行に乗り換えて身延駅で下車しバスで終点まで。半日以上の行程であった。昼食は身延線の車内で持参の弁当で済ませた。朝に自宅を出て、宿坊には午後二時前に着いたので、荷物を置いて久遠寺にお参りすることにした。歩いて約五分、商店街を通り、境内の石段の先に大きな三門が見えてきた。

久遠寺では山門ではなく三門という。これは、三解脱門を意味し、空・無相・無願の三解脱を表すそうだ。二

体の金剛力士像が本坊域を守っている。その像に供えられたと思しき大きな草鞋が吊るしてあった。門を潜ると大きな紅葉の木があり、真っ赤に紅葉していた。

石畳の先には急で長い石段が待っていた。菩提梯と言いつ、二百八十七段、高さ百四メートル、下から見上げるとほとんど壁のようだ。途中の踊り場で七区画に分かれていて、登り切ると解脱したことになるとのこと。一段の高さが普通の階段の三倍ほどもあり、年寄りにはとても登れそうにない。親子と見られる四人連れは階段を見上げていたが、結局登るのを諦めていた。

私達は時間が掛ったが、何とか登り切って本殿を拜することができた。本殿域は広く、正面奥に大きな本殿、右に鐘楼、左に大きな五重塔があり、さすがに総本山だ。平日午後だったが、人はそれほど多くはなかった。お賽銭をあげ、お祈りをしてから、本殿に上がった。

広い畳敷きがあり、ここで早朝の勤行が行なわれ、誰でも参加できる由。ただ、朝早く起きて登って来なければならぬ。本殿の天井一杯に、有名な日本画家の加山又造画伯の描いた龍の墨画があった。その眼は、どこか

ら見ても見る者を睨むようだ。本殿の奥の廊下伝いに祖師堂、総受付の有る報恩閣、日蓮上人の御骨を祀る御真骨堂への入口、さらにたくさんの位牌が収められた納牌堂（六階建ての五階まで）まで行って引き返した。奥は歴代法主の住居である水鳴楼だ。

廊下の途中に全国の日蓮宗寺院の金属製表札（多分寄進札板）が有ったので、高校まで過ごした岡山の寺院を捜してみた。岡山市郊外の妙林寺、生まれ故郷の備前福岡の妙興寺の札があった。妙興寺は、司馬遼太郎の播磨物語にも登場する由緒あるお寺で、子供の頃、境内でかくれんぼや鬼ごっこをした懐かしい寺だ。奥の墓地には、戦国大名の宇喜多直家や黒田官兵衛の曾祖父・祖父の墓もある。ともに、墓石は風雨に晒されて戒名等は読めなくなっていたが、今の住職から教えてもらった。

本殿を出て、周囲を見て回っていると、階段の下の方から大きな声が聞こえてきた。数人が托鉢僧の身なりで、一人が叩く団扇太鼓に合わせてお題目を唱えながら、菩提梯を登り、本殿参拝後に奥の院まで二時間の急な坂道を登っていくようだった。僧侶の修行も楽ではない。

宿坊には、我々の他は年配女性三人連れだけで、食事の時に宿坊の方と短い会話をすること以外、人気を感じられなかった。

翌日も良い天気で、坂道を約三十分間歩いてお寺の裏手にある駐車場まで行き、そこからエスカレーターに乗って本殿横に出て、少し歩いてロープウェイで奥の院まで行った。



思親閣を中心に、日蓮上人お手植えの杉の太木等があり、眺望が素晴らしかった。思ったより近くに雪を頂いた富士の霊峰、下には富士川が銀蛇のごとく輝いて、その先の山並みの間に相模湾が小さく輝いていた。

裏の展望台に回ると南アルプスの山々が眺められ、設置された大きな案内写真図と見比べながら、写真を撮った。帰りも同じ経路で下り、宿坊で荷物を受け取り、帰宅の途についた。帰りの身延線は各駅停車だったので、駅の数が多く、退屈した。でも、やり忘れていたことをやっと実行できたような満足感があった。

シルバーとプラチナ

松浦 純子

「マーブルアーチ駅で降りると人でいっぱいであった。そこで宿の主人が『次の駅まで行つて降りよう』と言つたので、また地下鉄に乗つてランカスターゲートで降車し、ハイドパークへ向かった……」。これはヴィクトリア女王の葬儀の列を見に行った夏目漱石の日記である。

一九七七年、私はイギリスのケンブリッジにいた。前年から滞在していたが、年が明けるとテレビも新聞も連日王室の「シルバージュビリー」ということばを繰り返して報じていた。ジュビリーとは25、50、60、70年経つた時に行われる記念行事のことであるが、初めて聞く言葉だった。王室を扱つた特別番組も放送された。Royal Heritage という番組を興味深く見た。王室が宮殿やロンドン塔の奥で、代々祖先から受け継いで保管している財宝を紹介する番組だった。特別な年に偶然イギリスに居合わせた

幸運をありがたく思い、何かに取り憑かれたように記念切手や記念硬貨など「記念」と名のつくものを購入しにくった。次のジュビリーは二十五年後の二〇〇二年。二十一世紀ははるか先のことように思え、自分自身も世界もどうなっているのか想像もつかなかった。

シルバージュビリーは、エリザベス二世にとつて初めてのジュビリーで、国民もこれから先の明るいイギリスの未来を想像したに違いない。だから女王は多くの国を訪問し、友好を深めようとしたのである。

今思いだすのは、パレード当日の六月七日、朝早くケンブリッジを列車で出てロンドンに入り、食事を忘れて一日中イギリス人になりきっていたことだ。セントポール大聖堂からバッキンガム宮殿に戻る女王とゴールドステートコーチと呼ばれる金色の馬車を見るために、先回りしてロンドンの地下鉄を乗り継ぎ、プラットホームから地上に駆け上がった待っていた時の思い出は、冒頭の漱石の日記と重なる。漱石はフランスから留学先のロンドンに来て、十日前に亡くなったヴィクトリア女王の葬

儀の列を見るために、地下鉄に乗ってハイドパークまでやって来た。偉大な女王を一目見たいという気持ちは漱石も私も同じだったと今でも思っている。

漱石は憂鬱なイギリスの冬と葬儀の列を見て、衰退していくイギリスと大英帝国を案じていたが、私は明るいイギリスの夏と金色の馬車、女王のピンクの洋服を見て、これからも繁栄していくイギリスの王室を感じていた。

昨年の一〇二二年は女王にとって最後となったプラチナジュビリーの年だった。従ってニュースは、エリザベスが女王の座にあった七十年間の歴史を振り返ることが中心で、さすがに次のジュビリーがあるとはだれも思っていないようだった。私は嬉しさと寂しさが入り混じった気持ちだった。しかし、女王の母は一〇一歳まで生き、女王の一〇〇歳の誕生日を祝うことだってできるのではないかと考えていた。今回、女王はいくつかの行事を欠席し、代わりに皇太子が執り行ったが、女王は最後まで自らの職務を果たすというメッセージを出した。

世界最長の在位を誇る君主は17世紀前半に四歳で即位

し、七十二年間国王だったルイ14世である。七十七歳の誕生日直前に亡くなったが、エリザベスは二〇〇三年、既に七十七歳を迎えている。ルイ14世は輝かしい時代を築いた半面、打倒ハプスブルクを目指して数多くの戦争をしたり、豪華なヴェルサイユ宮殿を造営したり、信仰をカトリックに統一したことで国家の財政を圧迫して、フランス革命の遠因を作ってしまった。

イギリスで長期の在位を誇り、在位五十年のゴールデンジュビリーを初めて祝ったのは、ジョージ三世である。この間にはアメリカ独立革命、フランス革命、ナポレオン戦争という大きな革命や戦争が続き、ナポレオンがヨーロッパ大陸の大半を支配していた一八〇九年にジュビリーを祝った。更に長い間王位にあったのは、漱石が葬列を見たヴィクトリア女王で、世紀末の一八九七年に在位六十年のダイヤモンドジュビリーを祝った。プラチナジュビリーまで祝ったエリザベスの七十年間は、国民の大多数が女王と共に生きた時代であった。エリザベスにぜひルイを抜いて、世界最長を記録して欲しかった。

今日は！ ファウスト博士

藤原 道夫

ゲーテの『ファウスト』は若い時からの憧れだった。とはいえ『若きウェルテルの悩み』と違ってたやすく読める作品ではない。何度か読みかけては挫折した。ようやく「読んだ！」と実感できたのは、訳者柴田翔による講座を受講し終えた十年前。訳本をテキストに用いて講師が文を読みあげ、その部分を解説するやり方ですすめられた。解説は詳しくないものの、全体の構成を見失わないように配慮されていた。月二回で二年半かかった。その後も何度か通読している。この頃は「今日は！ファウスト博士」と眩きながら、気の向くままにページを開く。人間の存在模様が自在に描かれているので、どこから読んでも引き込まれる。

読む上で、次のことが役に立った。

一、訳者による解説書。第Ⅱ部の解説については「宇宙

時間の諸相」「演劇空間の諸相」「死と救済の構図」といった分かりにくいテーマが設定されている。講座を受けては解説書を読み、ようやく本文に盛り込まれている内容が理解できるようになった。

二、ギリシャ神話への親しみ。ゲーテの古代神話への造詣には驚かされる。『イタリヤ紀行』にはふんだんに神話の人物が登場する。ギリシャ神話は、ヨーロッパの文化を理解する上で旧約および新約聖書と共に欠かすことができない。イタリヤを旅しながらそのことを痛感し、入門書や解説書から始め、『イーリアス』や『オデュッセウス』を読んで凡その知識を得ることができた。それから自面白かったし、『ファウスト』にも格段に親しみを持てるようになった。特に第Ⅱ部では神話上の人物が生き生きと扱われる。絶世の美女ヘレナがファウストと悪魔メフィストフェレスによって冥界からこの世に連れて来られ、子供を生むのだ。彼女に会うためファウストが案内役ケイロンに乗って魔女マントオを訪ねる場面は、神話の知識があればこそ感興が湧いてくる。

三、現地への旅。ゲーテゆかりの地は、フランクフルト・

アン・マインからワイマルを経てライプツィヒに至る約400kmの間に集中している。この地には何度か足を踏み入れた。フランクフルトの生家は保存状態がよく、博物館になっている。同市内のシュテューデル美術館にゲーテの肖像画が展示されている。ナポレオンをして「これこそ人間だ」と言わしめた風貌がよく表されている。

ワイマルは人生の大部分を過ごした地で、住居は「ゲート・ハウス」として公開されている。『ファウスト』を執筆した書斎も、息を引き取ったベッドも往時のまま。広大なイルム公園の中にある「庭の家」も見学、ゲーテが読書に使った立ち机の傍で文豪を偲ぶ。

ライプツィヒでは、ゲーテが大勢の友人たちとどんちゃん騒ぎをした「アウエルバッハの地下酒場」が今も営業している。この地下酒場を見学する機会があった。通常営業に使っていない部分がとても広く、当時の飾りもファウストに関連する壁画も残っていて感慨深かった。四、ダンテの『神曲』との関連。ゲーテはダンテを敬遠していたようだ。ところが『神曲』を読み込んでから『ファウスト』を紐解くと、ゲーテがダンテを強く意識して

いたと思われる箇所に出あう。例えばファウスト救済の場面。そう考えると『ファウスト』を一層深く読んでいけそう。ただし誰もそのことを論じていない。

次に私の好きな箇所を引用しよう。これはゲーテ自身への讃歌かも知れない。

塔守リユンケウス

見るために生まれ 見張ることを命ぜられ

塔がこの身の定めとなつたが

世界は俺の気に入った。

遠くを見 近くを眺め

目にするのは月と星 森と鹿。

すべてのなかに 俺は見る

永遠なる神の飾りを。

そして世界が俺の気に入るように

定めも俺の気に入った。

幸福なる俺の眼よ お前が今まで見たものは

それがいったい何であれ

みんな本当に美しかった！

(柴田翔訳)

仏像の顔

浜田 道雄

アジア太平洋地域の国々との国際協力を仕事にしているところ、アジアの多くの国を訪れる機会があった。そして、そこでたくさんさんの仏像に出会った。

ジャワ・ボロボドゥールとその近くの寺院遺跡の如来像や観音像、デリーやベシヤワールの博物館で出会ったガンダーラとマトゥーラの菩薩像、スリランカ・アヌラダプーラの巨大な涅槃仏、ネパール・カトマンドウのチベット密教仏、カンボジア・アンコールの門の上の大きな観音の顔、そしてラオス、ミャンマー、タイの各地の寺院に祀られた釈迦如来像など。

それらの仏像は国によってまた民族によってみな違った顔をしていた。ある仏は円満で穏やかな顔であり、ある仏は大きな眼をして厳しく近づき難い姿だった。

日本の仏に慣れた私は、これらの仏に出会ったとき、ひどく戸惑ったものである。

だが、その国の人々のことを知り、その歴史や宗教の有り様を学ぶにつれて、仏像は彼らの「理想とする人」の姿を映していることを知った。

ゴータマ・ブッダの弟子たちは、その師の死後ブッダの像を祀ろうとはしなかった。『マハ・パリニツパーナ・スッタナタ』は、ゴータマ・ブッダがその死に臨んで「私の死後は私の『教えと戒律』 Ⅱ 『法』を『師』として修行に励み、完成せよ」と言い残したと伝えている。以来弟子たちは仏の像を作ることなく、ただその教えを守り敬い、ひたすら悟りを求めて修行を続けてきた。

仏像がはじめて作られたのは、ゴータマ・ブッダの死から五〇〇年余りが過ぎたインド北西部のガンダーラとマトゥーラでだった。その地はアレクサンドロス of 東征とともに伝えられたギリシヤの神像彫刻が盛んだったところ。仏像彫刻はギリシヤ文化の影響を受けてはじまったのだろう。

仏像はやがて多くの地方の仏教徒によって作られるようになり、彼らの「仏の姿」が出来上がっていった。

森本哲郎さんは『そして、文明は歩む』のなかで、顔

を削られたバーミヤンの大仏を見上げて「無意識に日本的な表情を貼り付けてしまった」と書き、さらに「この大仏を仰ぐ人たちは、それぞれに自分たちの顔をそこにはめ込んでしまう。こうして私たちは、自分の心のなかに、それぞれの文明を創造しているのである」と続ける。

私が西アジアを歩いたころにはアフガンはすでに動乱のさなかであり、国際協力という仕事であっても入ることなどできないところだった。しかしその国境近くの街パキスタンのペシャワールまでは行ったことがある。緑少ない乾燥した大地が広がる厳しい索漠としたところで、同じような風景がそのままアフガンまで続いていた。

そのペシャワールの地に立って、私は考えた。バーミヤンもやはりこのような荒涼とした地に違いない。こんな風景のなかに立つ大仏に対面したならば、私はその削られた顔にどんな仏を思うだろうか、と。

まず思い浮べたのは、宇治平等院の阿弥陀如来像。だが、あの定朝風の穏やかで優しいお顔はともこの殺伐とした地には似合わない。日本の仏は、もっと緑濃い人に優しい自然のなかで生まれたのだから。

つぎに思ったのは、北タイ・ランプーンで出会ったハリブンチャイの仏だった。古式の仏塔の龕に立つこの仏はバーミヤンの大仏と同じテラコッタでできている。同じ肌合いをもつ仏なら、あの地の大仏には馴染むかもしれない。

だが、この仏もまたタイの豊かで穏やかな大地に育まれた仏。柔和で優しい表情には親しみがある。とても砂漠の厳しさのなかに毅然として立つ姿ではない。



今日バーミヤンの大仏は身体も失った。動乱のなかで無残にも破壊されてしまったのだ。

私はバーミヤンに仏像はいなくてもいいのではないかとと思うようになっていく。仏像はブツダの教えを信じ、それを支えとして生きる人々が、己の思いを込めて作り上げたもの。その人々のいなくなった地にある仏の像は、それ自体が虚しいと思うのだ。

(写真はハリブンチャイ仏)

タイ・ランプーン県ワット・チャーマテウイーにて

母の手紙と私のエンディングノート

浜口 須美子

母が百一歳と十一か月の天寿をまっとうした。神様から「百歳を元気に生きる旗頭」のお役を任命され、そのお役を充分果たして生ききった母。引き出しから二通の手紙が見つかった。

一通は父の亡くなった翌年の昭和六十年一月の手紙。「お父さんが亡くなって半年が経ちました。良い人と結婚し、良き子に生まれ、その子たちも良い配偶者に生まれ、また良い子を授かり、私の人生は本当に幸せだったと感謝します。私のお葬式は簡単に。お母さんが亡くなくても悲しまないでね。お父さんのいるところへ神様に連れて行っていただくのだから淋しくありません。かすみ草を供華にして喜ばせてください。元気な今、あえて遺す言葉を書き留めました」

もう一通には「お父さんが亡くなられて三十年、いつ何時終わっても充実、満足、幸せ。人生最高の真只中。

世界一幸福な私です。廻りの人達のおかげです。うれしい御礼の言葉です」

母は富貴子劇場の縮めの言葉も用意し、しかも「死に装束は青のフラダンスの衣装と経帷子」とのメモ書きまで見つかった。

十一月、季節柄かすみ草の供華の手配には慌てたが、総勢三〇名の子供、孫、曾孫たちが総力を挙げて二万円分のかすみ草を調達することができた。会場では母の好きだったハワイアン音楽と、一生分のアルバムの写真を展示して見送ることができた。

母は台所では「おふきどん」、フラダンスでは「フキラ」、俳句では「富貴女」、色々な役を演じ、しかも演じている本人が常に最高に楽しんでた。

一通目の手紙を書いたのはちょうど今の私の年代だ。先日市役所で「エンディングノート」をいただいたので、母を見習って早速書き始めた。

「大切な人へのメッセージ」には、「良き人と結婚し、良き子に生まれ、その子たちも良い子を授かり、私の人生は本当に幸せだったと感謝します……」。どこかで聞

いたことのある文章。私が一生懸命考えてたどり着いた文章は、母のとそっくりそのままだった。母が何を幸せと感じたのか、その価値観が私と一緒にだったのだと思う。

そして、夫と子供たちにもメッセージを書いた。

娘には「心配りのできる社会の役に立つ素敵な女性に成長してくれました。明子の笑顔と笑い声は世界一です。

『明子』の命名はどんな時でも『明るい子』でいれば運が開けるというメッセージです。いつも機嫌のイイ明子でいてください」

息子には「人生を楽しむことがじょうず。そのためにたくさん努力をしていることわかっていますよ。前向きに走りながらも、まわりの情報をしっかり集めて、あなたの決断は安心です。関西人の面白さが、知らずに人を傷つけていることがないように相手（特にお嫁さん）の笑顔をチェックしてね」

夫には「私以外の誰をも愛さないでください。再婚しないでください。心配なことはいっぱいあったけど、別れたいと思ったことは一度もありません（今日まで）」。思った以上に幸せでした。ありがとうございました。来

世も私の近くにおいて私を助けてください」

そしてつい先日まで家族であった母に「母親を尊敬できる幸せ、まわりの人にも自慢できる幸せ、長命というだけでなく、中身の素晴らしい母の子であることが最高の喜びです」

娘や息子には今すぐ伝えて、今後の人生の参考にしてもらいたいし、夫にも今の私の気持ちを知ってもらってほしい。なので、この『悠遊』の場をお借りして、母の残した手紙に便乗した形で、今日の時点での私の気持ちを伝えようと思う。

エンディングノートを書きながら、自分の最後の主役の様子を色々考えてみたが、ふと母の言葉を思い出した。「お葬式はどんなのがいい？」と聞いたときに、「お葬式は送られる人のものでなく、送る側の気持ちの表現だからあなたたちに任せます」

さすが、母の言葉は重みがある。

エンディングノートにあれこれ書くより、まわりのみんなに愛される人であるように努力しなさいという母の声が聞こえた。

フェルメールを訪ねて

野瀬 隆平

二〇〇六年の春、ライン・ドナウ川を巡る河船の旅に出かけた。出発点がアムステルダムであったので、船旅の前に観光をと思い、この街にある国立美術館を訪ねることにした。

街中を縦横に走っている運河を舟に揺られながら、景観を楽しんでいるうちに、美術館に近い船着き場に着いた。

この美術館が所蔵している自慢の絵は、レンブラントの『夜警』とフェルメールの『牛乳を注ぐ女』である。

『夜警』は、オランダの画家、レンブラントの代表作。大きなキャンバスに描かれた作品は門外不出だ。タイトルにあるように、夜に描かれた絵だと思われるが、実は昼間の光景だという。経年劣化のために表面のニスが黒ずんでしまい、あたかも夜のようになってしまった

ことが、後に行われた洗浄作業の結果、判ったというのである。

『牛乳を注ぐ女』は、フェルメールの代表的な作品の一つで、縦横共に五十cm足らずの小さな絵である。この絵を詳細に眺めていると、他の作品と同様に、小さな部屋の中で、一つの物語が進行しているように思える。

「光の魔術師」とも云われている彼は、パンの入った籠やパンの表面に、ビーズのような白い光の粒を散りばめている。また、画面をシンプルにするために、初め描き込んでいた壁の世界地図や、床の洗濯籠を除いたことがX線検査の結果わかっており、完成させるまでいかに試行錯誤を繰り返したかが伺える。

彼が生まれ育った街は、アムステルダムから五十五km離れた、列車で一時間ほどの所にあるデルフトという街だ。翌日、訪ねることになった。『デルフトの眺望』という作品が描かれたという場に立ってみたいという思いもあったからである。

デルフトでは、まず街の中心にあるマルクト広場へ向

かう。教会が天高くそびえている。フェルメールが洗礼を受けた所だ。塔に登り街全体を頭に入れた後に、『小路』が描かれたと云われている建物の前に立つ。絵とは少し異なるが、雰囲気は似ている。

さて、『デルフトの眺望』はどこで描かれたのだろうか。歩きまわった結果、それらしき場所にたどり着く。覚えている絵の構図とびつたりではないが、先ずここに違ひなかるう。後日、実際の絵と比べてみようと、何枚も写真を撮る。

帰国後、絵と比べてみると場所はここに違ひないが、絵の構図は実際の風景とはかなり違っていた。動かしようのない歴史的な建造物の位置関係も異なっている。色々と調べてみると、フェルメールは自分の生まれ育った故郷を理想的に表現しようと、その配置を並べ替えたらしい。

それにしても、フェルメールの絵は魅力的だ。初期の作品である宗教的な絵の二枚と、先にふれたデルフトの街を描いた風景画二枚を除くと、全三十七作品の残りは

すべて、「フェルメールの小部屋」とも云える小さな空間が舞台で、そこに登場する人たちの心の動きまでも、見る人に伝わるような巧妙さで描き出している。

あの旅から帰ってきて六年後、二〇一二年春のことだった。銀座「松坂屋」のすぐ裏にある「フェルメール・センター銀座」で、「フェルメール光の王国展」と称する彼の全作品を一堂に展示するという、夢のような企画展があることを知った。

勿論、複製の絵である。しかし現代の技術を駆使して、本物と区別がつかないほど精巧に作られている。生物学者の福岡伸一が監修しているという。彼は世界各地の美術館を訪ね、全作品を見たという熱烈な愛好者である。何故、それほどフェルメールに熱中したのか。その作品がこの生物学者の心を捉えたのは云うまでもないが、もう一つの理由は、顕微鏡を最初に創ったのがデルフトのレーウエンフックで、フェルメールが同じデルフトの画家であるからだ、と彼自身が云っている。

資本主義経済の変貌

野上 浩三

一九六一年に大学を卒業した私にとって、資本主義経済は地球規模の変貌を遂げた、と感じられる。

大学ではマルクス経済学者が人気を博していた。マルクスの資本論を読むことが理想化、常識化されていた。私は資本論を読んでおらず（分厚い本を買ってはいた）、解説書をかじった程度である。

入社した会社でも組合活動が活発であった。但し、執行委員長は将来会社の役員のポストが約束されているような穏健な労働組合であった。それでも、労働組合の執行部には急進的な勢力が存在し、会社による不法な扱いを受けたとされる従業員のために必死の抵抗を試みる人たちも居た。それを見て、労働組合に距離を置く自分を自己批判した記憶も残っている。

会社生活では、その殆どを株式投資の仕事に従事した。そのお蔭で、多くの株式会社の生の経営実態を知る機会に恵まれた。

退職後の二〇〇三年に『日本経済再生のために打破すべき三つの壁』という本を書いた。目的の一つは、株式会社の仕組みの素晴らしさと実際の運営実態との大きなギャップを世に訴えることであった。

大きなギャップの代表的な事例は、代表取締役社長制度と取締役会の在り方であった。前者はわが国だけの制度で独裁的なトップを生み、致命的な弊害を生みやすい制度である。後者は、代表取締役社長を筆頭に社内取締役で構成されており全く本来の経営チェック機能が発揮されない形になっている。残念ながら、現在でも状況は不変である。その犠牲の一例が東芝である。

渋沢栄一は「資本主義の父」と称せられている。

お孫さんの鮫島純子著『祖父・渋沢栄一に学んだこと』には、短歌雑誌「アララギ」に載った次の歌が、プロレタリア運動家のものであるとして、紹介されている。

資本主義を罪悪視する我なれど

君が一代は尊くおもほゆ

この歌も、渋沢栄一を「資本主義の父」として捉えている。しかし、渋沢栄一はイデオロギーとは無縁の存在である、と私は確信している。

この短歌の存在を知り、私は非常に重要な事を思い付いた。それは、「資本主義経済」をイデオロギー色の無い「株式会社方式経済」に言い改めることである。

共産主義国の中国でさえ、株式会社方式で世界第二位の経済的地位を築き終えている。

資本主義経済は既に大変貌を遂げている。

労働者搾取の要素は消えている。一国の経済を経営する仕組みとして株式会社方式ほど効率的で確実な方式は無いことが証明されている。

ピーター・ドラッカーは一九七五年の『見えざる革命』(The Unseen Revolution)で次のように喝破している。

「もし、社会主義が『労働者による生産手段の取得』

と定義づけられ、これがオーソドックスかつ唯一の厳密な定義であるとすれば、アメリカ合衆国は最初に真の『社会主義』国になっていることになる。米国企業の従業員は、年金基金を通じて、上場企業を支配するのに十分な、上場株式の二五%を保有している。この他に個人企業の従業員年金と公務員年金と教職員年金が少なくとも一〇%を所有しており、併せると年金基金が全米国企業の上場株式の三分の一以上を保有している。これ等の年金基金は一九八五年までの一〇年間に、あるいはもっと早くに、全上場株式の六〇%と言わないまでも少なくとも五〇%を保有することになる。」

事実、現在、主要先進国の年金基金の多くの部分が株式投資で運用されている。

私の山小屋の一角にマルクスの石碑の破片が置いてある。イギリスに実務研修で派遣された時に、マルクスの墓を訪れて見つけたものである。私が訪れた少し前に墓が暴徒に襲われ、破壊された石碑の破片である。

古い初め顛末

新田 由紀子

子供叱るな来た道だもの

年寄り笑うな行く道だもの

自分もとうとう笑われる道行きにさしかかった。

「定年なんですって、びっくりですよ」

「ホントですか、還暦なんて信じられな〜い」

会社で六十歳の定年を祝ってもらったとき、こう言われて大いに気を良くした。ま、お世辞半分だろうけど。

十年前のスーツのウエストも入るし、これといった肌のおたるみや頬の衰えもない。ないったららない。仕事帰りに続けているヨガや稽古事のおかげか。休日には早起きして山通いのせいかな。規則正しい繰り返し返しがA型の習性と言えばそれまでだが、これだけせつせと自分にかまけていながら、どうやって家庭を営みフルタイムの勤務をこなしてきたのかは、謎だ。実際は運営しきれず、大学

で同級だった伴侶には逃げられていたのだが。

それでも、細腕で娘たちを育て独立させたという気負いは人一倍。定年だからと家に引つ込むのは柄ではない。継続雇用で勤務を続けていれば老けないで済むはず。

「いつもトレンドイナファッションですね」とか「あ、美魔女オ」とか言われたりして。

七十にあと三年というところで、社長が代わって魔女狩りとあいなった。ま、会社生活に思い残すことはなかったが、気づけば退職金も年金もこれっぽち。青ざめてじつと手を見る。しかし、ここで立ち止まって沈思に至らないのが、亥まじりの子年。あたふたそそくさと資格をとって次の就業につなげた。

出版社でのデスクワークを鞍替えしたのは、健康麻雀クラブのスタッフ。客の大半はシニア層とはいえ、にわか仕立てのレッスンコーチとしては、若作りをしてカッコよく働ける。それが、しばらくすると、お茶沸かし、茶碗洗い、掃除機がけにトイレ掃除と、裏方仕事の比重が増してきて、そうカッコよくはしてられない現実。

母を看取ったのはこの頃だ。間もなく不意に兄もなくした。若々しいのが自慢だった九十二歳の母の容貌は、人はこう老いて逝くのだよと、教えてくれていた。

七十歳になっても私には老いの自覚がなかった。そりゃずいぶん前から髪は白いし、抜け毛も物忘れも増えた。体のあちこちが痛いし目はかすむ。でも、若く見られるし、そのつもりで気を張っていた。高齢者実態調査とか地域包括支援の案内が届くようになるが、忙しくてそつたらもの封を切る暇もない。

ところが、ここへコロナがきた。環境意識が激変し生活が停滞する。三年も経てみれば、外でふと映る自分の容姿、家でマスクをとって鏡を見やる顔の、なんと様変わりしていることか。こ、こんなはずでは！

そこで、一点突破全面展開。満を持して白内障の手術を決意。さあ、メガネいらすの新生活。衰えたお顔をお手入れして目化粧バッチリ、薄くなった頭髮も手当しよう。憧れのシニア劇団にも入ってワクワクドキドキ。

だが、とうとうそれは起こった。手術後検診に向かう地下鉄の階段で、クキッと左膝に鋭い痛みが走る。まっすぐに歩けない。なんだこれは。

お医者の前に畏まってみると、X-rayとMRIをお札のように示されて、ご託宣が下った。

「自分で思っている以上に悪いですよ。軟骨の摩耗。使えば使うほど磨り減りますよ」な、なに。足は使うほど発達進化するのではないかい、とお顔を仰ぎ見れば、「老化だつてば」と書いてあるではないか。驚きは山よりも大きく、落胆は谷よりも深かった。

以来、足を引きずりながらも活動止めぬ子年の老い初め。左膝はガンとして良くならず、右膝にも痛みを分け与えて今に至る。ついこの間まで、もたもたとガニ股で歩く年寄りたちを、舌打ちしては足早に追い越していたこの身。いまや、次々と追い越されていく。階段に溜息をついてエレベーターの前に並ぶ。無念の思いで電車を逃しつつ、じつとエレベーター、あなたを待つ。

笑われてもしょうがない。この道だもの。

五十年目の修学旅行

中村 晃也

二〇〇二年九月五日、都立戸山高校のクラス会有志と夫人の二十名がシアトル空港に降り立った。なんと卒業らしい約五十年目の出来事である。二年前に野球のイチローがマリナーズに入団し、シアトルの知名度が一挙に盛り上がった時期である。「永年幹事」の谷君のお陰で毎年何らかの催しを楽しんだ仲の良いクラスで、数年前に俳優の山口崇君の淡路島の実家を訪問した際に、みんなが元気なうちに海外旅行をしないかとの提案があった。たまたま住友商事のシアトル支店に勤務後永住していた世良君がいたため、イチローの野球をみてからカナディアンロッキー観光をする計画が具体化したのだ。

シアトル空港では、世良君夫妻の他にコロンバスから駆け付けた田中君夫妻とも再会し、全員でレストラン「ブルックリン」で夕食。おしゃべりに夢中なメンバーは、ポリューム満点のメインディッシュの大半を残す羽目に

なった。

翌日は市内観光、クルージング、ボーイング飛行機工場見学、ワイナリー観光など、それぞれに美しい自然に囲まれたシアトルの町を楽しんだ。まさにエヴァーグリーンステートのエメラルドシティそのものだった。

三日目はカンセコ球場でイチローの雄姿を拝み歓声を挙げたが、この日のハイライトは世良邸でのバーベキューパーティ。夫人と二人のお嬢さんで二十名を越える客人をもてなすのはいかに大変だったか。二十人分の椅子の手配から、各種の食器類や食材準備など。結局昔のクラスメートが手分けて食器洗いをし、無事完結した。

暮れなずむ樅の木立を渡る風の中で懐かしそうに三々五々歓談の一時を持って皆幸せだった。気分を良くした真下君は帰りのバスでお得意のド演歌を二曲も披露し、眠りかけた一部の女性の目を覚ます羽目になった。

ツアー幹事を担当した谷君の弁。「海外旅行に行こうといったって本当に何人が参加するのかねと訝りながら六泊七日のツアーを企画したところ、予想を上回る希望者が集まり賑やかに海を渡るようになった。

行けども行けども山並みが尽きないロッキーマウンテンの威容に歓声をあげながら、連日の好天気にも恵まれたツアーを満喫した。有名なレイク・ルイーズ・シャトウに一泊して夕暮れ迫る山と氷河とルイーズ湖が織りなす天下の絶景に、ホテル宿泊確保の苦労が吹き飛んでしまった」

この日は偶然村井君の誕生日だったので私がホテルのマネージャーと特別に交渉して、お誕生ケーキをサーブスしてもらった。大勢の級友に囲まれデザート皿にハッピーバースデーと書かれたチョコレートの文字を見て、彼は本当に幸せそうな顔をしていた。

翌朝早く山口君夫妻が湖畔に出て東京から持ち込んだ三味線を合奏した。澄み切った大気に冴えわたった三味の調べが朝霧を振り払うかの如く、氷河が顔を見せてくれた。

カナディアンロッキーマウンテン国立公園では、カナダの二ドル紙幣の図柄になったベイト湖をはじめ、モレーン湖、エメラルド湖などの名所を巡った。

群青色の神秘的な氷河湖、清流に影を落とす針葉樹林、数億年の歴史を刻む大岩壁。億年単位の地殻の変動のか

もす色彩と造形が次々に展開し、息を呑む景観が連続するのだ。悠久の大自然と永遠の友情に感激！

コロンビア大氷原の上で紫煙をくゆらせた愛煙家の前田君は「カナダでもちゃんと煙草は吸える。喫煙権は確保されているよ」とご満悦だった。

ホテルのあるバンフは山に囲まれた明るいヨーロッパ風の洒落た町だが、気温はかなり低く、便秘、喘息などの持病のある北西君から、寒いので街の雑貨屋でズボン下を買いたい、通訳してくれといわれ同行した。

サイズを合わせて購入した一品は、確かに暖かいが、トイレで女性モノと気が付き、男性用に取り換えたいというので翌朝同じ店に繰り込んだ。店では昨日とは違う店員が、頑固に取り換えを拒んだ。押し問答の末前日の領収書を見せて目出度く男モノを入手したが、今度は丈が長すぎて裾を切って使用することになった。

とにかく全員大満足で帰国できた。あれから二十年余り、本文に登場した級友は一人を除いて皆他界してしまつた。至福の時を共有できた彼らとのめぐり逢い、その機会を与えてくれた戸山高校に感謝したい。

コロナ・コロナ・コロナ

富岡 喜久雄

感染拡大予防の為、お上からの蟄居閉門の御触書が出
てから三年も経っただろうか。

従い、OBペンクラブの皆さんとのワイガヤの楽しみ
は得ようもなく、使わぬ我が脳細胞は名探偵の灰色とこ
ろか黒く染まったようで、近時の記憶が即喪失され、そ
の空間を埋めようと古い記憶がしきりに出てくる。

やけに幼児体験やら亡き父母兄弟の思い出が脳裏に浮
かび、時にその誰かが、「おいで、おいで」と呼ぶよう
な気がしてならないのだ。

通いなれた地元図書館脇の居酒屋では、時に仲間と
談笑したものが、そのトイレに掲げられた警句に、
「八十路を過ぎて、お呼びある時は、ぼちぼち行くか
らそう急かすなと言え」

と書かれていた。だから承知はしていたものの、我が

身も昨年七月で八十路と卒寿の半ばに達したからには
旅立ちの準備をせねばなるまいと覚悟はしてはいた。

ならばと「我が生き様」を書き残したいとの思いが募
りだしたのである。

世界に名を残した先達はそれぞれが半生記を残してい
ても、わが書架に見えるのはシンガポールのリー・クワ
アンユウ、南半球の小島を敢然と守ったイギリス首相・
サッチャー、アメリカはケネディ、ブッシュ、クリント
ンの分厚い英文自叙伝だけだ。それに厚さと装丁だけは
外人ものに引けを取らない旧友からの贈呈本だけである。

英文物はシンガポール在動中に購入したものが、今
までは積読のみで完読した覚えがない。ならば再読、参
考にして、我が半生記もそれに引けをとらない厚さと装
丁をと考えた。内容は残念ながら彼らほどの喧伝すべき
事績はない。そこで、ならばと、アフリカの生地からア
メリカに奴隷として売られた黒人奴隷のアメリカ映画
『ルーツ』を参考にしようかとも考えた。

あれこれネタ聞きをしているうちに、これを仄聞した我が旧友の内、旧財閥系大手商社と大手不動産会社の友人が、社友から寄贈されたという分厚い自叙伝を貸してくれた。もつとも彼らも関心薄く未読だとのコメント付きだったが。

また、地元の図書館にもこうした私家本が納められているコーナーがある。しかし、押しなべて自己陶醉か美化、或いは逆に世間への恨み節が多いようである。

これらを他山の石としようとは思うものの書き出せば、自分もそうならないという自信はない。

何故なら、自己の半生を省みても、その全ての行動をくどくどと説明しても、他人から見れば、単なる自己弁護か、自画自賛でしかないと思えるに違いないからである。どうしても、自分史とかの銘を付けて世に出す物は「自画自賛」か「自己弁護」だとの誇りを覚悟せねばならないようだ。

さすれば、これは断念し、OBペンクラブにて修行したであろう筆力を發揮して「掌編小説」ならぬ「大河小

説」仕立てにして、世の熟年世代に「生きる勇氣と意義と活力」を与えるものにして世に問おうと考えた。

たとえ書店で売れ残り、はたまた出版社の倉庫に積まれやがて再生紙となろうとも、少なくとも我が係累筋くらしいは、何がしかの記録として残してくれるだろうと考えた。

「たとえ完成を見ず絶筆したとしてもいいではないか!! 企業OBペンクラブに参加した意義があるとういうもの」。

そして「巻頭言」には、掌編クラブに誘って頂いた亡き濱田さんと、入会に際し海外経験者とは言え、花のロンドン、パリ、ニューヨーク勤務ではなく、発展途上国経験のみであったにも関わらず、入会を認めてくれた嘗ての事務局長の度量と、助言されたであろうJICA経験のある会員の応援推挙への謝辞を掲げよう。

企業OBペンクラブの皆さん、乞うご期待です。

老いの壁を越える

塚田 實

厄年とは良く言ったものだ。男の「老いの厄」は数え年六十一歳。私は正にその歳にステージⅣの大腸がンを患った。既に多臓器に転移しており、五年後生存率は十五パーセントの宣告を受けた。その後三年間転移による手術を重ねたが、名医の努力で救われ今は元気に暮らしている。

一昨年人間ドックで検査すると、左目の視力が極端に落ちており、白内障と診断された。七十歳を過ぎると殆どの人が白内障になると言われているので、これも老いの経年事象と捉えて、手術することにした。手術は約十五分で、翌日眼帯を取ると真っ青な青空が目飛び込んで、世界の明るさが心に染みこんだ。

昨年七十五歳の後期高齢者になった。再び人間ドックを受けると、今まで右耳の高音が聞こえにくくなってい

ると言われていたのが、今度はすべての音域で聞こえにくくなっているとの指摘を受けた。そう言えばZoom 会話が聞き取りにくくなってきていたし、テレビの音量も自然と大きくなっていった。迷わず補聴器を付けることにした。様々な調整を経て装着すると、今まで聞こえなかった雨だれの音や紙を折りたたむ音もすっかりと聞こえるようになった。何よりも嬉しかったのは、レコードやCDの伸びのある高音が楽しめたことだ。

白内障も補聴器も現代医学の最先端技術のおかげで、老いと共に現れる様々な身体的障害を克服することができた。

さて問題は健康寿命だ。私が小さい頃は七十歳を過ぎたお爺ちゃんはいかにもよぼよぼの高齢者という印象でしかなかったけれど、今や自分がその歳に到達した。厚生労働省の資料によると男性の平均寿命は八十一歳を越えたものの、健康寿命は男性七十二歳だそう。因みに健康寿命とは「健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間」とある。そこで一番問題なのは

認知症対策だ。

七十五歳になると免許証更新に認知症試験を受けなければならぬ。今やネット上では問題事例と覚え方記事が溢れており、これを体よく覚えて試験に臨むと満点だったが、これはあまり自慢できない。

やはり重要なのは、常に新しいことに挑戦する気概だ。会社を辞めたとき、ひよんな事から絵を学び始めた。小学校の図画工作ではいつも五段階評価の二だったのに新たな挑戦だ。一からのスタートだから先生の言うことに素直に従う。構図の決め方、絵の具の特徴、筆の使い方など学ぶうちに、本当に絵が好きになった。今では仲間の人たちと世田谷美術館で展覧会に出品している。

ゴルフは元々上手い方ではなかった上に、歳を経ると益々下手になってきた。もうゴルフも卒業かと決心しかかったものの、ゴルフのスコアも大事だが楽しく回ればいいかと考え直し、二〇〇八年製ゼクシオ・モデルだったゴルフ・クラブを、最新のティラーメイドのものに

変えた。投資効果はあったと信じている。

そして企業OBペンクラブに参加して、文章を書く楽しさに出会った。エッセイでは、自由に題材を選び、皆で批評し合う。掌編小説では、フィクションとノンフィクションを混ぜ合わせながら作品を生み出す。川柳では偶々参加した川柳会に誘われて、今やプロマネを務めている。

楽しいのは、今までとはまったく違う会社や役所の人たちとの交流だ。皆幅広く且つ奥深い教養を持っている。私も長い海外生活の経験を活かしながら、話題を提供するよう努力している。アフターファイブの懇親会はいつも楽しい。ちょっと飲み過ぎるのが問題だ。

中国の四書五経の『大学』によると、殷王朝を開いた湯王は盥に「苟（まことに）日新、日々新、又日新」と刻んで毎日心新たに政治を行ったという。

創造の精神で新しいことに挑戦し続けると、きっと老いの壁は越えられるような気がする。

量子技術の時代

杉浦 右藏

人間も卒寿を超すと体力劣化を痛感する。元々良くないお脳のほうも劣化している。幾つかの学会や協会に入っているが、会誌も印刷物から電子版に切り替わった。ダウンロード時、この記事は後で読もうと思いついてメモりに格納するが次々と溜まって未読となる此頃である。

人類の誕生は数十万年前からと言われるが、文字や記録で残っているのは最近の二千年位だ。

現在、人間が使っている技術をマクロ的に考察すると、第一次革命は西暦1400年の印刷機、第二次革命は蒸気による産業革命、第三次は固体化電子計算機とパソコン革命で急速に発達して来た。第四次は現在変革の入り口についた量子技術の世界になるようだ。その次、数十年後の第五次は人類滅亡？ かも知れない。

私が七五年前教わった1ビットの実現には五極真空管二本が必要だった。いまは3ナノメートル半導体で実現してい

る。

1900年、放射線の不可思議な現象を説明するため、プランクが「量子」という概念を考案した。この量子技術は1985年頃から光半導体などの一部に利用され始めた。本格的に量子技術として開発体制が発足したのはごく最近だ。明確な時期は決め難いが量子コンピュータの開発が始まった。

量子技術 (Quantum Technology) とは、文部科学省は次のように説明している。(2022年4月22日統合イノベーション戦略推進会議決定の量子技術イノベーション戦略より引用)。「量子力学で記述される原子、電子、光子などの物理現象について、これまで人類が利用困難であった量子特有の性質(重ね合わせ、量子もつれなど)を操作・制御、利活用する技術のことです。量子技術は、将来のコンピュータ性能の飛躍的な向上をもたらす量子コンピュータ、従来よりも格段に高感度な量子計測・センシング、高セキュリティな量子セキュリティー・ネットワークなどにより、創薬・医療、材料、金融、エネルギー、生活サービス、交通、物流、工場、安全・安心な

どの多様な分野において、経済・社会等を飛躍的に発展させる鍵となる革新技術とされています」

我が国においては、2020年1月の「量子技術イノベーション戦略」に基づき、政府は2022年4月、我が国の産業の成長機会の創出や社会課題の解決のために量子技術を活用し、社会全体のトランスフォーメーションを実現していくため、量子技術により目指すべき未来社会ビジョンやその実現に向けた戦略、いわば「量子技術による社会変革に向けた戦略」として新たに「量子未来社会ビジョン」を策定した。同ビジョンでは、(1)量子技術を社会経済システム全体に取り込み、従来型技術システムとの融合による我が国の産業の成長機会の創出・社会課題の解決、(2)最先端の量子技術の利活用促進(量子コンピュータ・通信等のテストベッド整備等)、(3)量子技術を活用した新産業／スタートアップ企業の創出・活性化、の三つの基本的考え方を踏まえ、産学官が一体となって取組を推進することとしている。

話題を変える。最近、DX (Digital Transformation)

と言う表現が目につく。2004年にスウェーデンのストルターマンが提唱した概念で、ビジネス分野だけでなく、広く産業構造や世の社会基盤にまで影響が及ぶとされる。なかでもDXの世の中で成長が気になる二例を取り上げてみたい。私は、実務の経験をしていないので説明だけとなる。

ローコード (Low Code)、ノーコード (No Code)。DXを推進したい、AIシステムを構築したい、データを分析したい、など企業にはいろいろな要望がある。しかし、プログラマー技術者が居ない、外注は高価だ、などの要望に応える開発ツール提供会社がタケノコのように増えている。うたい文句はプログラムを知らない素人でもパソコンで構築できる開発ツールだ。

メタバース (meta-と universe の合成語)。ネット上のサーバーに構築する三次元グラフィックの仮想空間(社会)のこと。利用者はアバター(化身)を操作することで、仮想空間内の社会生活を送ることができる。2022年7月、東京大学大学院は「メタバース工学部」を設立した。

クラシック音楽の新しい試み

下山 健夫

コロナ禍のなか、今まで多くの音楽会が中止になったが、令和四年度はやっと少しずつ海外在住の演奏家の来日公演も行われるようになった。この演奏会を開催できない時期に彼らアーティストも色々と作曲時代の文献研究等をして、新しい試みに取り組んできた。一回は聴いてみたいと思った演奏家、轟貞にしている演奏家の演奏を夫々二回ずつ聴くことが出来た。

ドイツ人の父と日本人の母を持つアリス・紗良・オットー。テレビで楽しそうにピアノ協奏曲を弾いているのを見て是非コンサートに行きたかったが、その後多発性硬化症を公表し、もう聴くことができなくなるかもしれないと思っていた。五月末に四年半ぶりの来日で、シヨパンの二十四の前奏曲に彼女自身が選んだ七曲の現代曲の間奏曲を挟んだ「エコーズ・オブ・ライフ」というリサイタル。建築家デミレルの幾何学的な映像とコラボし、

休み時間のない公演だった。彼女自身が演奏前にプログラム趣旨説明と映像について日本語で語りかけた。クラシック音楽会にはプログラム構成に多くのルールがあるが、自分は聴衆との距離をおかず共鳴したいので、今回のプログラム構成を考えたとのことだ。彼女はピアノペダルの感覚をつかむため裸足で登場、真っ暗のシーンもあり、そのような時も含め卓越したテクニクの演奏を披露してくれた。

六月には私にとって二回目の水戸芸術館専属楽団。轟貞の庄司紗矢香と仲間達「新ダヴィッド同盟」の演奏会。今回は、東京カルテットのピオラ磯村和英、ピアノ小菅優とのトリオ。若手二人もベテラン磯村のおかげか安定感ある演奏であった。庄司も小菅の情緒あふれるピアノに合わせてモーツァルトをいつものように目をつぶるでもなくにこやかな表情で弾きこなし楽しい演奏だった。

十月には東京のサントリーホールでバリ管弦楽団。二十六歳の若き注目の新鋭音楽監督クラウス・マケラのコンサートで、アリス・紗良・オットーによるラヴェルのピアノ協奏曲を聴くことができた。素晴らしいテクニ

ックと前回同様に照明を使った映像付きで、オーケストラ演奏部分で彼女自身が音にあわせふしをとり楽しんでる姿を見て聴衆の私も楽しくなった。彼女のアンコール前にはマイクで曲目紹介とともに、演奏会用の衣装が飛行機でロストバゲージになり楽団員から今日の演奏衣装を借りたとのことを話し聴衆を笑わせた。指揮のマケラもこの敏腕管弦楽団を十分に統率し、ストラビンスキーの『火の鳥』では、曲の持つ多くの音源でお馴染みだったこの楽団特有の艶のある金管楽器の合奏が出色だった。十二月は庄司紗矢香とカシオーリのデュオリサイタル。今回は彼女のストラディヴァリウスにいつものステイール弦に替えて作曲された時代本来のガット弦とクラシック弓を使用し、ピアノも当時のフォルテピアノで現代のピアノに比べ音量は控えめである。これら楽器は調律が難しいらしく、楽章や楽曲のたびに調律に時間をとっていた。庄司のヴァイオリンも音量があり倍音が出るのとことだったが、音質は今までとあまり異なるとは思わなかった。私には少しザラザラした感触であった。モーツアルトのヴァイオリン・ソナタは、現代のピアノではヴ

ァイオリンよりピアノが音量的には大きくなりすぎるので、ピアノ主体のヴァイオリン・ソナタになってしまうが、バランス的にはフォルテピアノで丁度バランスが取れているように思った。

多分この両者とも演奏テクニックが傑出している演奏家と評価されている。その二人がクラシック音楽作曲のオリジナルスコアは変えずに今の時代へのアプローチをしようと試みているのを面白く思う。私も今までワグナーの楽劇、オペラ等をオーソドックスな演出でも観てきた。この頃の演出家が時代背景を現代に替えて行うのも観てきたが、どうも無理があるように感じている。長い間オペラを音だけを聴いてきた者には眼を瞑っていた方が良いのではないかとも思ってしまう。特に日本の伝統を踏襲する基調で例えば歌舞伎等に慣れている私は否定的になってしまう。この辺がクラシックと呼ばれている音楽ジャンルの現代風にマッチさせるときの問題なのではないだろうか？ 今年こそ多くの演奏会が開かれることを期待している。

産業技術の系統化調査

重要資料の技術遺産登録

荒野 喆也

「産業技術の系統化調査」とは、国立科学博物館が、ある技術領域について、長年、当該技術分野の技術開発・技術革新に取り組んできた専門家を主任調査員に任命し、関連する分野の技術発達を系統的に調査研究する。そして、その技術と社会・文化との相互関係の分析を行うもので、産業技術史の編纂事業である。

この事業は、二〇〇〇年度から開始され、本年で二十年目を迎え、実施した系統化のテーマも一二五件となった。この結果、日本独自の技術開発環境や技術開発スタイルに関する明確な知見が広く得られている。これらを含めて、技術の系統化報告書の意義や遺産登録について整理してみると次のようになる。

第一に、技術の歴史を残すことは、先達の歩みを残す

ことであり、歴史を学ぶ上での貴重な記録を後世に伝えるという観点から重要である。

第二に、技術は人間活動や文化とも密接な関係性の上に作られるものだから、技術開発の歴史を残すことは、文化がどのように作られてきたかの歴史を残すことにも通ずる。

第三に、「モノづくり」を中核としてきた日本の産業技術の特徴を明らかにすることにより、欧米とともに世界を前進させる責を担ってきた日本の今後の進むべき道を探る事に繋げられることである。

これらの調査結果の資料は、近年の科学技術の急速な発展と科学技術や産業構造の変化の中で、その本来の意義が見失われようとしている。そのため、国立科学博物館ではこのような資料の保存を図り、科学技術を担ってきた先人たちの経験を次世代に継承していくことを目的として、重要科学技術資料の登録制度すなわち「未来技術遺産の登録」制度を実施している。この制度の確立により、我が国の科学技術の発展に関する資料の保存と蓄

積が促進される。

系統化調査事例として「エアコン」について説明する。エアコンについては、調査対象は家庭用のルームエアコンである。ルームエアコンの出荷台数は世界で年間九〇〇〇万台であり、日本ではその約十パーセントである。単価も高く、市場規模も我が国の家電機器売上高の約三分の一を占めていて、変動はあるが年間約一兆円である。エアコンの産業技術系統化は、日本の家屋構造での取り付けスペース確保技術と、家電製品中最大の消費電力を削減する省エネ技術と、部屋の温湿度等の快適性改善技術の三本が系統化調査項目となる。

エアコン取り付けスペースの確保技術については、従来の一体窓掛型は、日本家屋の窓には取り付けられないため、室外機と室内機に分離したセパレート型にし、しかも室内壁面に自由に取り付けられる壁掛型を創り出した。この壁掛型は、我が国だけではなく世界のルームエアコンの基本形となっており、未来遺産に登録された。



そのために全く新しいラインプロローファンの商品化等により室内の住人には、室内機は全く邪魔にならず室内の温度分布の最適化にも大きく貢献した。

省エネルギーについては、制御回路にインバータ制御方式を取り入れて、圧縮機用電動機の回転数を自在に変える省エネルギー系統化技術を完成した。このインバータ方式は、電車や重電機器には既に導入されていたが、エアコンで大量生産機器に初めて導入され、小型化と低コスト化により産業界全体への貢献は絶大であった。

これらの系統化技術については、わが国独自の温湿度制御技術、寒冷地向けの冷暖技術と波及効果は多い。

系統化調査を終えて感じることは、調査の対象とすべき技術があまりにも範囲が広いことと、メーカーの現場に調査訪問しても、過去の技術開発の過程や成果を説明できる関係者は、すでに在籍していないことである。当方から技術テーマを示して資料を探してもらおうのが精いっぱいである。調査が先になればなるほど、この情報収集は難しくなる。この事業の運用を大幅に拡大・加速すべきである。

庭仕事奮闘記

川村 邦生

世田谷のこの地に住み始めて約三十年が経過した。小学生時代から結婚するまで過ごした実家に近く、周辺は大きく変わったとはいえ幼馴染も多くいて心休まる場所である。新居で最初にしたことは、小さいながらも自分の庭を造ることだった。

父は庭いじりが好きで、植樹、花壇づくりそして庭石を買い集めていた。その作業をする時はいつも手伝わされた。庭いじりが趣味の高齢者になった私を手伝ってくれる者はいない。二人の息子たちは家庭を持ち、巣立っていったのだ。

庭には、モクレン、ハナミズキ、ツツジ、千両、万両等大小合わせて三十八種、本数不明なるも五十本以上の木がある。作業に梯子が必要な高木はヒノキ、モクレンなど約二十種類だ。うちヒノキだけが敷地境界木として移住前からある。他の木は全て私が植えた。

近隣で小学校同級生が植木屋を引き継ぎ現役で働いている。以前もらった彼からのアドバイスは、

「庭木は自分の管理できる高さ、大きさにすることが重要だ。自分の年齢に反比例し年々元気に大きく育つから、放置していたら後で後悔するよ」

そんなことを考えず、ついつい気に入った木を無計画に植えた。そのため高齢になった今でも、約三メートルの三角梯子に登り、作業をせざるを得ない。

片手で体を支え、もう片方の手でのごぎりや鋏を持つ高木の枝落し作業が苦痛になってきた。今になって彼からのアドバイスが身に染みてきた。

樹木は一般的に寒い時には伸びも小さくおとなしい。春先少し暖かくなつてくると眠りから覚め新芽を出してくる。ほうっておくと勢いを増し鬱蒼と茂る。

それを伐採することになるが、人間の都合ではなく、植物本位で考えなくてはいけない。地上で葉が活発に活動している時期は地下でも根が活発に動いている。この点を考えてバランスよく剪定しなくてはいけない。

高い場所での作業を強いる高木、腰を酷使する低木作

業、最後に単純で簡単だが長時間の同じ姿勢がづらい草取り。草取りを無心にも邪魔するものがある。その時期はやぶ蚊が大量発生する時とマッチする。暑い時期に蚊よけネットをかぶっての仕事になる。

こう書くとは何が面白くて庭仕事に興味を持って始めたのか疑問だと。答えは簡単、それが誰にも邪魔されない孤独な作業で、全てがマイペースで進められるからだ。

植木屋は言った、

「お前は趣味だが俺は仕事。面白いと思っただけではない。仕事中に大きな石が足に落ち複雑骨折した時のつらさやと思うと、いつでもサラリーマンのお前に代わってもらいたい気持ちだ。庭仕事は甘くはないよ」

その言葉に発奮、庭園管理士資格にまずチャレンジし資格を取った。この資格で小さな我が家の庭仕事には充分であった。しかし植木屋を見返したくなり、森林インストラクター資格取得に挑戦した。年一回実施される一次試験は四科目あり、三年以内に全科目合格が必要である。すべて合格後二次試験を受ける。

一次四科目は専門的に係わっている人には三年はかか

らないが、一般人には難しく、当初から三年かけて合格を目指す人が多い。庭仕事程度の知識しかない小生は、三年目に未合格の一科目に挑戦したがだめだった。資格は不合格だったが樹木への知識が深まり、ゴルフ場で仲間から樹木についての質問を受ける機会が増えた。

受講前までは、憂さ晴らしに、鋏やのこぎりでエイ、ヤーと樹木に八つ当たりしていた自分が少し情けなかった。樹木をよく知る事が出来た後は、庭作業が高齢になりつらくなったからと荒く扱ってはいけないと認識を変えた。

どんな木でも一本一本に優しく声をかけ、丁寧に鋏を入れていこう。必ずそれに報いてきれいな花、いい枝ぶりを見せてくれる。ただし雑草にだけは厳しく対処しなければ。



長崎屋と室町三丁目交差点

川口 ひろ子

地下鉄三越前駅で下車して地上へ、三越を背に三井の高層ビル群を左に見て中央通りを北へ進むと室町三丁目の交差点に出る。ここを対角線状に渡ると、JR総武線新日本橋駅の地上出口だ。左脇のごく狭い空き地に中央区教育委員会によって建てられた案内板が立っている。ぼつんと寂しげな案内板には、葛飾北斎の浮世絵と共に異人宿「長崎屋」はこの辺りに建っていたとの解説文が書かれている。

北斎の浮世絵「長崎屋図」は、宿屋の窓辺に佇むオランダ人と、それを見ようと押し掛けた物見高い江戸っ子た



ちの姿を描いたものだ。さすが北斎、初めて見る異人さんに心を奪われ、ぼんやりと見上げている老若男女のリアルな描写が見事だ。

長崎屋は禁教と鎖国の徳川時代、長崎出島から將軍家に様々な献上品を持って江戸にやって来るオランダ商館長一行が滞在する定宿であった。ここは出島と違って誰もが出入り自由の場所であった為、オランダ最顶层の大名やその家臣、医学生、蘭学者、その他多くの人材が、蘭船が運んでくる豊かな西洋文化に触れ、科学や医学の知識を吸収しようと訪れた。杉田玄白、前野良沢、中川順庵、平賀源内、青木昆陽、ほか多数。幕末には、日本の情報を知りたい医師のシーボルトも滞在し、さながら異文化交流の為のサロンのような場所であった。

これらを語る資料文献の多くはオランダ国立文書館のみに保存されていて日本国内にはなかった。原因は幕府崩壊と明治維新。その上関東大震災や太平洋戦争の大空襲など、東京に自然災害や戦災などが続いたことが考えられる。「幻の宿屋」といわれていた長崎屋であるが、

昭和28年上野の図書館から、明治維新の際に隠匿されていた大量の蘭書が発見され関係者を驚かせた。一年後の昭和29年、これらの貴重な資料を基に緒方富雄博士のもと「蘭学資料研究会」が発足した。

徳川家御用商人長崎屋は幕府崩壊により閉店したが、子孫の一人が私の父である川口孝太郎だ。父は明治33年生まれ。子供の頃はまだ頭に鬘を結った年配者がいて昔長崎屋で算術の勉強をしたなどと話してくれたという。

機会をいただき、昭和38年に慶応大学で行われた蘭学資料研究会の例会で長崎屋の末裔について発表した。両親はプレゼンテーションの下書きのみを残して他界した為、数年前に私が小冊子に仕上げた。表紙は勿論葛飾北斎の「長崎屋図」だ。西洋絵画の遠近法など異国の優れた手法に強い関心を持っていた北斎は、ベルリン王室のみで使われている寶石ラピスラズリを原料として作られるブルーの高級顔料「ペロ」を求めて、度々長崎屋を訪ねていたと伝えられている。

幕末、度重なる火災に閉口した長崎屋は日本橋から鉄

砲洲（現在の明石町）に移転、輸入蘭書の販売を行う。明治に入り『西洋事情』を著した福沢諭吉から一緒に新政府の下で働く様に誘われたという。新時代をリードした気鋭の学者の下での洋書販売業、結構なお話しと言えが何故か長崎屋はこの提案を断わったという。

「薩摩の足軽が作ったお上なんかにはえられるか」と啖呵を切りたかったのかもしれない。

徳川家御用商人のプライドに拘り、明治という激動の世に背を向けて、大波に乗ろうとしなかった長崎屋と、西洋に追い付け追い越せとがむしゃらに泳ぎ、令和の現在も進行中の勝ち組の東京人たち。

「室町三丁目」交差点に立つと、明治維新という時代の「大変革期」に両者が選んだ生き方の違いを一度に見ることが出来て興味深い。

歴史に関心をお持ちの方や三越でお買い物の方、是非室町三丁目交差点に足を延ばしてみてください。さい。

南アルプス荒川岳から赤石岳へ

（山旅回想）

大月 和彦

樫島さかしま

サラリーマン生活を終えた十数年前、卒業の記念に荒川岳から赤石岳まで四泊五日の山旅をした。相棒は若い時からいっしょに山を歩いた気のおけないI君。

九月初め、東京駅から新幹線に乗る。山の身支度の乗客はいない。静岡駅から畑薙ロッジまでバスで三時間半。ここから大井川上流の一带は、東海フォレスト社の私有地という。同社のバスで聖岳、赤石岳、荒川岳などの登山拠点の樫島に。溪谷に開けた平地で樹林の中にロッジやキャンプ場などがある。ここに泊る。

荒川岳

朝飯抜きでロッジ発。大井川源流の溪谷から、山腹のジグザグ道を行くと、林道に出る。上を索道が横切り「頭

上注意」の標識。かつては木材運搬用だったが、山小屋への荷物の運搬に使われているらしい。ロッジから七時間。千枚小屋着。蚕棚のベッドに備えつけの寝袋に潜りこむ。

朝、雨。ゴアテックスを着て発つ。高山植物が咲き乱れるお花畑が終わり、稜線に出ると風が強クガスで視界ゼロ。千枚岳の頂上を経て、岩稜の道を登りきるとちょっとしたピークが丸山（3002m）の山頂。ガスが晴れ、前方に荒川岳の巨大な山容が姿を現す。赤褐色の岩山。南側の斜面が大きく崩れている。

岩場を登りきった地点が荒川岳山頂。「荒川東岳 3141m」の木柱。ごちゃごちゃと記念碑や案内板がないのが気持ちいい。深田久弥がこだわった「悪沢岳」の名は使われていない。

北方に連なる山脈の地下をリニア新幹線が走るという。南斜面を巻くようにくだとハイマツとお花畑。鞍部から岩につけられた赤ペンキを目印に登りきると中岳避難小屋。管理人がいてストーブが燃えている。山に入つて五日目という単独行の青年がコーヒーを沸かしている。

傍にワンカップ。小屋を出てすぐ、岩が重なりあつた地点が荒川中岳（3083m）の頂上。近くにあるはずの荒川前岳には気がつかず通り過ぎる。ライチョウの親子が散歩するお花畑を楽しみながらくんだり、荒川小屋に。小屋の夕食は豪華版。名物のカレーライス、大きな鍋と炊飯器が置かれ、お代わり自由。味噌汁、ナスのてんぷら、生野菜はキャベツとレタス。トイレは離れの小屋。汚物はヘリで樫島へ空輸するという。電波事情がよく、テレビが鮮明に映る。明日は晴れという。

赤石岳

日の出前、赤石岳は赤く染まっている。山腹を巻くように登ると砂礫の大聖寺平。天竜川と大井川の分水嶺。西側の深い渓谷は伊那谷に連なっている。

砂礫の急な登坂が続き、小さなピークを越えたところが小赤石岳。ニセ赤石岳とも呼ばれるが3000mを越す立派な山。ここから尾根道を一時間、岩石に覆われた斜面の端が最高地点。「赤石岳 3120m」と赤い字が彫られた木柱が立つ。傍らに大理石製の一等三角点がある

埋まっている。下方に避難小屋やヘリポートなどがある。頂上は平地だ。

東南の方向に、樫島がある溪谷を隔てて笹が岳と連なる山並み、背後に富士山が浮かぶ。右側にかすむのは伊豆半島の山影か。北の方向には荒川岳、その背後に北岳、甲斐駒ヶ岳など。

山頂はいつのまにか二人だけになる。下山へ。赤石小屋をめざして急坂をくだる。山頂直下のガレ場のハイマツとお花畑は通り過ぎるのが惜しく、砂礫に寝転んでいるうちにウトウトしてしまう。風が止んで暑くなる。ニセ赤石岳からの尾根に取りつき、中腹を巻くようにくだと富士見平。戦時中不時着した陸軍機の遭難碑が倒れかかっている。と、下から来た軽装の男性が二人を見ると引き返す。小屋の人で二人を確かめに来たらしい。

赤石小屋の夕食は、鮭のフライ、干ダイコンの酢の物、お代わり自由のけんちん汁。

翌朝、日の出を見る。赤石岳の山塊は照り返して赤がかった。のんびり急坂をくだり、昼前に樫島に着く。

思えば遠くへ来たもんだ

大津 隆文

国連の発表によれば、世界の人口は2022年、推計80億人に達した。1950年には25億人だったというから大変な増え方だ。日本では人口減少への対応が課題だが、世界的な課題は人口増加への対応だ。

国別には、中国、インドが14億人台と突出し、次いで米国が3億人台で、日本は1億2400万人で十一位。人口増加と経済発展はパラレルな傾向があるし、人口の多い国は存在感があり国民も心強い。

ここで思い出すのは小学生の頃聞いたNHKの放送。当時「街頭録音」と呼ばれる番組があり、世の中の関心事について庶民の生の声を伝えていた。その時のテーマは「海外から多くの引き揚げ者を迎え、この狭い日本で8000万人が食べていけるか」。交わされた意見の内容は覚えていないが、子供心にも日本の前途が不安で心細かった。なお、終戦の年の人口は7200万人だった。

今や人口は終戦時より5000万人、七割増しだ。移民の送り出し国から受け入れ国に変わったことは象徴的だ。この劇的変化の陰には先人達の大変な苦労があった。特に二つの分野での努力と成功が現在の日本の礎を築いたと思う。その二つとは食糧増産と輸出振興である。

以前、人は一年に一石の米を食べると聞いた。仮に一日三合を365日間食べると一〇九五合となり、ほぼ一石（一〇〇合）となる。ところが終戦の年（1945年）の米の生産量は四〇〇〇万石に届かず、当時の配給は一日二合一勺だった。

宮澤賢治の『雨ニモマケズ』に「一日ニ玄米四合ヲ食べ」となっているのは、食べ過ぎと問題視する人もいた。また、1950年には池田大臣が「貧乏人は麦を食え」と発言したと世論の大きな反発を浴びた。

国を挙げて食糧（米）増産に取り組み、田圃の整備、田植え機等の機械化、除草剤の普及、品種改良が進み、やっと戦後20年の1965年頃に、お米がいつでも食べられるようになった。

印象深いのは八郎潟の干拓だ。大きな期待が寄せられ

た大事業だったが、完成した頃（1964年）には米増産の緊要性が薄れていたのは皮肉だった。

その後、お米は十分に需要を満たし、さらには余ることになってしまった。作柄の豊凶は切実な国民的関心事だったが、今やそのニュースも余り見かけなくなった。米の増産は大きな成功を収め、人々の食生活の変化もあり、お米は日本人の主食の座を降り、食料品の一つになってしまった。これはいいことだろうか？

もう一つは輸出振興である。資源の乏しい日本が海外から原料や食料を輸入するためには外貨と、それを稼ぐ輸出が不可欠である。

今や昔の話であるが、英国訪問から帰国した人の檄が忘れられない。「英国では街にExport or Die（輸出か死か）という看板が掲げられていた。戦勝国ですらそんな覚悟でやっているのだから、敗戦国である我々ももっと頑張らなければいけない」

「もう一つ覚えているのは「外貨準備二〇億ドルの壁」だ。我が国経済は、好況になると輸入が増えて貿易収支の赤字幅が広がり、外貨準備が二〇億ドルを下回りそう

になる、慌てて景気にブレーキを掛ける、そんな現象が長年繰り返されていた。贅沢品の輸入を抑えるべきではないかと福田大臣が言い出し、何が贅沢品か真剣に議論されたこともあった。

民間企業の血のにじむような努力もあり、1980年代に入ると輸出が増え黒字基調が定着し、むしろ貿易黒字が対外的な摩擦を生じることになった。日米間では繊維に始まり、鉄鋼、カラーテレビ、自動車、半導体と次々に問題が発生。戦後長らく一ドル360円だった為替レートは80円前後まで上昇した。この間、外貨準備は大幅に増加し、一兆ドルを超える外準大国になった。

こうして食糧増産と輸出振興は大きな成功を収め、お蔭で1億2400万人がこの国土で安穩に暮らしている。しかし、食糧と輸出の重要性がなくなった訳では毛頭ない。食糧自給率確保の必要性はむしろ高まっており、食糧（米）生産の基盤は守っていかなければならない。

また、最近為替レートが円安になっているが、これは大局的には日本の輸出力の低下を物語っている。輸出なくして輸入なし、であることを肝に銘ずべきであろう。

考古学雑感

「縄文時代と「ウルシ」のはなし」

大越 浩平

縄文時代の研究はここ二十年、植物考古学と放射性炭素年代測定の結果と統合により、新しい知見が多々ある。

定住が始まり縄文人は出産も多いが、幼児の死亡率は高く、成人の死もあり、日常的に生と死に囲まれ、出産を祝い、死者を悼み、再生を願う。それは動植物にも及び、自然災害の恐れに加え、様々な折りと祭祀があった。折りは、端正な山々や、滝、巨岩、巨木、洞窟などの自然の造形物にも向けられ、神になる。弥生時代に渡来した仏も神と共存し、日本国は戒律の緩い多神教国家であった。

変わったのは明治維新からだ。明治政府は神話で天皇を都合よく解釈し、天皇を神として国家権力を集中する一神教国に変え、日本国を西洋近代国と同等に見せる。

天照大神以前の時代は神代だ。縄文人の扱いに困った。縄文人を野蛮人とし、野蛮人が天皇につながっている具合が悪い。仏教と稲作を持ち込んだ、韓国系渡来人との繋がりも困る。明治政府は皇国史観、神話による国体維持捏造考古学を推進した。科学的な実証考古学研究は弾圧される。

敗戦、占領軍は日本人の精神的支柱であった天皇を神とする神話教育を禁止し、現人神天皇から人間天皇にかけて、天皇制の存続を認めた。

考古学者の相沢忠洋氏が、赤城山麓から石器を発見した。石器は三万年以上前の磨製石器だった。磨製石器の使用は新石器時代とされている。とすれば日本は三万年以上前から新石器時代に入っていたことになるが……。

縄文時代は大平山元遺跡で発掘された土器の破片が一万六千五百年前のものと証明された。この年代ギャップに考古学会の説明は希薄だ。世界史は、旧石器時代、新石器時代と流れるのだが、日本の考古学会は、神代を縄文時代、弥生時代とした。

占領軍が神話教育を禁止し、昭和二十二年登呂遺跡の本格的調査が始まり、科学的根拠に基づく考古学が復活。福井県の鳥浜貝塚遺跡からウルシ材が発見された。分析研究の結果、それは一万二千六百年前のものであることが証明される。研究者はその古さに加え、それまでの考古学常識とはかけ離れており、恐る恐る発表した。

当時ウルシは日本に自生していないものとされ、植物学者や考古学者は驚き戸惑う。鳥浜貝塚遺跡は縄文時代草創期遺跡だ、くり、どんぐり、くるみ、ひょうたん、うり、あさ等の栽培植物の種子や、籠作りに必要な植物繊維も発見されている。

ひょうたんも日本には自生していない。ウルシと共に誰が何処から持ち込んだのか。大きな謎として残った。

ウルシは櫛や土器等の顔料として使われていて遺物は少ないが、狩猟に必要な石鏃と矢柄の接着剤としても生活必需品だ。ウルシを栽培し、成長した木に傷をつけ樹液を掻き、様々な工程を経て顔料や接着剤にする。高度な温度や湿度管理を伴う技術が不可欠だ。

栗にも注目する。部落の周辺に栗の花粉が異常に多く

落ちていた区画があった。栗林だ。栗は日光をたっぷりあびないと衰退する。栗林は管理しないと維持出来ない。栗は重要な食料で建材だ。ウルシや栗を管理する縄文時代を、狩猟、漁労、採取の時代とするイメージは誤りだ。

二万年前の氷河期の海面は、今より百三十から百四十メートル低かった。本州、四国、九州は一つの島で、北海道はカラフトを通じてシベリアと陸続きで、朝鮮半島は目の前にあつた。注目すべきは、黄海、東シナ海が起伏の少ない大平原であつたことだ。黒潮は日本海を循環し周辺陸地は大陸に比べ温暖だ。大平原には動植物が繁殖し、魚分類も豊富だ。そこに人間が住んでいないわけがない。残念ながら証拠はまだない、今は海底である。

温暖化により縄文海進が始まり、親潮も入る。住民は四方八方に追い立てられる。現在の南太平洋島民のようだ。住民は、航海術にたけ、その一部が東シナ海からウルシ等生活必需品を持って直接九州に移住し、縄文人になつたと考えれば、様々な疑問が氷解するのだが……。

これからの海底考古学の研究に期待したい。

花の下にて〜旅立つWさんへ

内田 満夫

Wさん！

季節は春、もうすぐ桜が咲きます。

「願わくは花のしたにて春死なむその如月の望月のころ」

お好きだった西行法師の歌です。桜は日本人の心の拠りどころかも……。よい時節に旅立ちを迎えられましたね。うらやましい。

最近私も、来世のことをあれこれ考える時間が多くなりました。自ずと関心が来世と、来世に渡るその瞬刻に向かいます。しかもそれを、できるだけ愉しく想い描くようにしています。だから「逝く」とは言わずに、「往く」ということにします。

Wさん！

渡りそこねて帰ってきた人たちの話を聞いても、来世

に向かう途は、明るい光と美しい草花に溢れる、とても心地のよいところだそうです。地獄を見たと言う人は一人もいません。僧門筋から散々脅かされてきた、地獄とか無明の闇とか、そんなものはありませんのでご安心下さい。

来世での最大の愉しみは、何といっても先に往った人たちに逢えることです。私にも父母はもちろん、再会したい人がたくさんいます。

幼なじみの友だち、小学校の担任だったT先生、高校時代の恩師Y先生、大学のクラブの仲間、仲良くしていた会社の同僚など……。もちろん先に往く（はずとなぜか決め込んでいる）わが妻は、真っ先に探しあてなければなりません。

詫びなければならぬ人や、恩返しをしなければならぬ人もいます。現世での心残りや、リベンジしたいこともあります。今のうちに念願を強く想い描いておけば、時空を超越する来世ではたいいことが叶います。

来世に渡る刹那にも、どんな明晰夢（夢であることを自覚しながら見る夢）を見られるのか、今から愉しみで

胸がワクワクします。

Wさん！

いずれ私にも確実に訪れる旅立ちです。先に往って待つていて下さい。来世で再会できたら、貴兄の体調のこともあり現世ではついで機会のなかった酒を、花の下で存分に酌みかわしましょう。

道中お氣をつけて。病室生活で外出もままならぬとは思いますが、時季の空気を満喫し、咲きほこる満開の桜に想いを馳せながら、旅立ち前の時間を安らかにお過ごし下さい。愉しく快適な旅となることを祈っています。

これは予後三か月の宣告を受け、即刻入院生活に入ったWさんに向けての、私の心奥からの励ました。もちろん自身に言い聞かせた言葉でもある。彼は私と同年配、地元エッセイ教室の五年来の仲間だった。癌持ちであることは、前から聞いてはいた。

本人の同意をえて毎日、負担にならない挨拶程度のメールのやりとりを続ける。しかしそのうち、いよいよ辛

くなってきたのだろう、ひと休みしたいと云ってきた。最後のメールを貰ってからちょうど一週間後に、Wさんは亡くなった。病室から眺めた見納めの桜が、Wさんの門出を見送った。

常に莞爾として、生きながらにして解脱、達観した雰囲気の人だった。地域の子供たちの世話を焼くことを何よりの楽しみをしていたWさん。思い残すこととてなさそうなことは、日頃の教室での氏の習作からも十分にかがえたのである。

「老人道と云ふは往くことと見つけたり」

最近人は死について、以前ほど恐れを抱かなくなったのではないだろうか？ 私の友人には、死ぬのが愉しみだという者までいる。

辞書で「成仏」を牽くと、解脱してさとりを開くこと、死んで仏になることとある。私も人生ほどの頃合いでWさんのように、天意による予後の託宣を受け成仏したい。願わくば、花の下で春に往けたら本望だ。

戦後七十七年を顧みて

稲宮 健一

時の経つのは早いもので、先の戦争が終わって七十七年が経つ。戦争は真珠湾攻撃に始まり、原爆投下で終わった三年半であった。そして、終戦を起点に別の社会が開けた。しかし、根本の所には古い日本がある。その視点で過去を振り返ってみる。

電気通信の技術者である筆者は MIT Radiation Laboratory Series をマイクロ波技術の原典として良く参照した。この本は戦時中に開発したレーダーの技術成果を後世に残すため戦後に編集された二十余巻に亘る古典である。その中に関東地方の上空から撮影されたレーダー画像があり、爆撃機の空襲時に目として使われた。第一巻の巻頭言にプロジェクト・チームが全米の知能、人力を集中させたレーダーの完成を誇らしげに記述している。画像は電波の反射を利用するので夜間でも見える。この画像を見ながら空襲を仕掛けた。日本もレーダーを

開発していたが、残念ながら完成度は低くこのレベルに達しなかった。見渡す限りの大海原や、夜間の捜索で、レーダーは人の目を遙かに超えた画期的な視力を実戦に与えた。戦争で大きな役割を果たした一例である。

六年前の暑い夏、真田丸の大河ドラマにひかれて上田城を訪れた。さらに足を延ばして松代へ。戦争末期に構築された大本営跡地へ行った。かつての真田家の数々の遺品が展示してある屋敷跡から、平らな道を三〇分ほど歩くと、少し小高い丘に丁度、足尾や佐渡の鉱山の入口に似た跡地の入口があった。そこから岩盤を削ったままの壁がむき出しになっている坑道のような通路があり、皇室をはじめ政府機関の部屋へ繋がっている。ここに帝国の司令塔を移設する積もりだった。四十四年サイパン陥落から本土決戦の準備を始め、同年十一月に発破で着工した。さて、緒戦で勝ち名乗りを挙げたものの、四十二年六月のミッドウエイ海戦では主力の空母四隻、多数の戦闘機を失い、ガダルカナルからサイパンへと負け戦が続く。既に米軍が本土近辺に迫っていて、これを押し

返す戦力はなかった。この時点で和平などの収束の方策を考へるべきであったが、現実には本土決戦を決断し、松代の大本営移築が着手された。

緒戦は飾ったが、もう勝ち抜ける見込みはなかった。そして、四十五年四月の沖繩戦で物量作戦のすさまじさを目の当たりにしていたはずだ。軍部としては一瞬たりとも、弱音を吐けば士気が下がるだろうが、一般論では決着が延びれば結末は不利になる。

国益を考へる政府の首脳は軍部だけではないはずだ。然るに、政治家は五・二五や二・二六で軍部に目を塞がれ、世界を見る目を失い、広い視野で判断できなくなり破局に至った。松代への籠城は内戦の思考であり、城を枕に討ち死にしても誰も喜ばない。四十五年二月に連合国は米英ソによるヤルタ会談を持ち、戦後の世界秩序を話した。ソ連の参戦も含まれていた。一方、国内での終戦の検討が動き始めた。具体的な活動は六月にソ連を仲介に和平交渉を持ち掛けたが、既に対日参戦を決めていたソ連に拒否された。そして、八月の終戦になった。

ここから見えてくる、国としての反省事項は何であろうか。多くの人に語られているが、思いつくまま挙げてみる。日本は島国であるから内向きの思考が強く、それ故に繊細な事柄に優れている。しかし、大局からものを見る視点が欠けている。一例として、福島原発事故で隣の女川原発に異常は無かった。福島事故は原子力の高度な技術者に囲まれていたが、最初の段階で行うべきシステム設計の故障解析の虫だしが不十分だった。

先の戦争の結果、戦火を起こす国にならない誓のため、憲法で戦力にたがが掛けられた。軍備縮小、高度成長は現在の豊かさをもたらしたが、今や国を取り巻く環境は様変わりした。戦力を誇示しながら自国の国内の統率を囿っている国に囲まれている。万が一にもこれらの国々の争いに巻き込まれないように、大所高所から物事を見て判断し、日本が不得意とする国の安全を守るシステム設計を怠りなく進めてもらいたい。

サマーコース

池松 孝子

十年以上も前のことになる。スコットランドの大学で研究生生活を送っていた長女から近郊のサマーコースへの参加を勧められた。いとも簡単に「還暦記念に」と快諾した。本音は遠く離れた娘と二か月も一緒にいられることであつたのだが。

もっと大きな理由は、日本語を「母語」としない外国人に「日本語で日本語を教える」ことを職業にしている私が、逆の立場で英語を学んでみたいということにあつた。ちなみに媒介語を使わないで外国語を教える方法を「直接法」という。

娘の家は大学から数分の所にあつて、築五十年を超えている。三階の部屋に上がる石階段はつるつるに擦り減つて光っていた。それまでどれだけの人が歩いたのだろう。

間もなく私の「留学生活」が始まった。開講日、入金や受講料を納めその他の手続きが終わるまで付き添つてくれた娘は、心配そうに研究室へ帰つて行つた。

次は、クラス分けをするためのプレースメントテストだ。隣の部屋で「タカコはどこだ」と私を探す声が聞こえる。私は手を挙げて合図をするが、若い高校生の中にいる「おばさん」は付き添いか保護者だと初めから無視されている。無理もない。

テストは文法、語彙、聴解、会話を易しいレベルから能力的に行き詰まるまで時間内にやつていく。教師の立場で毎年やつていることを逆の立場でやるのは、何とも新鮮で楽しかつた。

テスト終了後、一時間もしないうちにクラスの発表があつた。その様子を見ていて、自分の入れられるクラスのレベルに不満のある学生が多いことに驚いた。自分の学力はこんなはずではない、先生のミスではないかとまで言う。それも、多少なりとも私が毎年経験したことだ。国が変わつても言語が変わつても同じなんだと実感した。

翌日、授業が始まった。私のクラスは一番上でももちろん私が最年長。日本からの学生は初めてということもあって皆から好奇の目で迎えられる。

授業で使うテキストはすべて貸与で最終日に返却する。大きなテابلに四人のグループで座る。テابلには人数分のオックスフォード英英辞典が置いてあった。英語を話さない国からの学生のための英語授業が始まった。

クラスで私の悩みは、先生の英語はともかく各国の学生の話す英語がよく聞き取れないことだった。フランス、ロシア、イタリア、ユーゴスラビア、シリア、などからの学生がいて、日本人の私の英語もそうだが、クラスメートはみんな母国語訛りの英語を話す。もう一つは配布されたテキストやコピーを読むスピードについていけないことだった。

翌日、担任にクラスを下げて欲しいと頼んだ。先生からの返事はこうであった。日本の英語教育は素晴らしい。語彙も文法もきちんと教えてある。この点数でこのクラスについていけないはずがない。英語はグローバルな言語で、世界中で、特に発音は独自の変化を遂げている。

フランス語英語、イタリア語英語、日本語英語があつていいんだから自信を持ちなさいと。テストの点数でクラスを決める。よつてクラスを変えることはできないと。自分の点数に拘らず堂々とコミュニケーションをとつて、通じないことさえ楽しんでる若者の逞しさを見習うべきだと、私なりの結論に達した。昨日は学生の立場で悩み、今日は教師の立場で納得するといった日々だった。

二週間後、スペインから二十名位の四十代、五十代と思しき人達が入ってきた。聞くと、スペインでは教職を二十年以上経験すると、外国で英語の研修を受けることができるという。

この教師のグループを仲間を迎えてから、私は俄然、元気が出てきた。今まで、落ち込むことの多かった私はゼネレーションギャップからのストレスだったのかも、妙に納得したのだった。

将棋とわたし

新井 良侑

羽生善治永世七冠を超える二十歳にして五冠棋士藤井聡太の出現。これまで一般人々がほとんど目に触れることがなかった名人戦は、はじめ有名棋戦のアベマ将棋チャネルによるライブ配信のお蔭で、世の中は空前の将棋ブームである。

わたしの将棋との最初の出会いは小学校一年生の頃である。五歳年長の次兄が、わたしに将棋の相手をさせるために、将棋の指し方を教え込んだ。動かし方の違う駒がいろいろあり、覚えが悪かったせいもあり、指している途中でよく間違いをした。銀を後ろに引いたりすると、げんこつでなぐられ、そのたびに将棋盤をひっくり返したことが記憶に残っている。しかし、勝ち負けの記憶がまったく残っていないから、将棋にならなかったのであろうと思う。

次が小学校三年生から六年生にかけての記憶である。

小学校三年生の頃、家族でよく指し、父親にも兄弟たちにも負けないようになっていた。勝てない長兄は、わたしとしばらく指すことがなかったが、ある日、久しぶりに将棋をやろうと言い出した。将棋相手が欲しかったわたしは、最初から勝つのはまずいと思い、少々手加減をして負けた。すると長兄は、「良侑に勝った！ 勝った！」とはしゃぎ回り、それを最後一局も指さなかった。家族以外の将棋相手は、セールスマンや保険の外交員、来客である。毎日、廊下に将棋盤をおいて人が来るのを待っていた。将棋を指せる相手なら、だれかれ構わず指していた。あまり負けた記憶がないので、かなり強かったのだと思う。しかし、勉強もせず、家の手伝いもせず、来客に迷惑を掛けることに堪忍袋の緒を切らした母親に、将棋盤と駒を捨てられ、将棋を指せなくなった。

三度目がサラリーマン時代の三十二歳の頃である。趣味は多かったが、みな中途半端であったので、何か一つものにしてしようという気持ちが起こり、どちらも中級クラスの実力であった囲碁か将棋かの、どちらかをものにしてやろうと思いついた。囲碁盤は十九掛ける十九で三百六十

一箇所と打つ場所が多く、一方、将棋盤は九掛ける九で八十一マスと指す場所が少ない。将棋の方が上達のための時間効率が良いと考えて、将棋を選んだ。少し参考書を読み返し基本定石を覚えてから、近隣の日本将棋連盟の地方支部に顔を出した。六段の支部長が歓迎してくれ、さっそく試験対局を指した結果、実力はずっとあると思うが、先ずは一級から始めてくださいと言ってくれた。しかしながら、本格的に取り組む時間的余裕がなく、職場対抗や同僚との昼休み将棋がほとんどであった。退職間際のある日、好敵手だった後輩が、「新井さんのお蔭で、日本将棋連盟に四段を申請したら、認定書が授与されました」と言って、認定書を見せてくれたときは、自分も四段に認定されたよううれしかった。

サラリーマン時代に、麻雀をはじめ、いろいろな勝負事や賭け事を行ったが、いくら負けても悔しい思いをしたことはなかった。しかし、将棋で何かを賭けて指したことは一度もなかったが、負けると、悔しいよりも、自分は駄目な人間だなとしみじみ思われ、自己嫌悪に陥った。将棋は、特別のゲームである。盤面、持ち駒、手

番すべてが明かになっているが、見えないものはただ一つ、指し手の頭の中だけである。わたしは、将棋は人と人の戦い、さらに言えば、相手よりも自分の能力との戦いが本質であると思っている。

わたしの一番の憧れの棋士は、劍豪宮本武蔵を彷彿させる風貌を持った勝負師の升田幸三である。初めて大山康治名人から名人位を奪取した升田は、直後のインタビューで感想を聞かれ、一言「辿り来て、未だ山麓」と応答し、将棋の奥深さを言い表した。

また最近、羽生マジックの異名をとった羽生は、「将棋はテクノロジーである」と言い、今をときめく藤井は、同郷のある高齢の著名人との対談で「ひらめいた最善手を言語化する」と語った。将棋研究にAIを活用したこれまでにはない将棋を指す、まさに、現代将棋を体現する新しい棋士が誕生している。

多くの人との出会いで、人はどう生きるべきかを学んだ。社会人一年生の時に出会った聖書で、人はどうあるべきかを学び、将棋に出会って、この世をどう対処するかを学んで、今のわたしがある。

犬を飼いたいけれど

宮原 由利子

「お願い、犬を飼っても良いでしょ？」

「……仕方ないなあ、良いよ」

アメリカへ出張中の父へ電話をした。私が小学生の頃の事。私は急いで物置の段ボールに隠しておいた仔犬を家の中にいれた。

学校の帰り道に何時も頭を撫でていたコリー犬のような犬が仔犬を生んだのだった。

それも五匹も！

数日後、この家のポストの横に貼り紙がしてあった。

「仔犬差上げます」と。黒と茶色のバンビのような仔犬。あまりの可愛さに思わず貰ってしまった。

「お家でダメと言われたら、又返しにいらっしやいね」
おばさんが言った。

父が本当は気がすまないという事は知っていた。子供の頃に飼っていた犬が、ある日学校から帰ると居なくなっていて、随分探した後に崖の下で隠れるようにして死んでいた姿を見つけた時、もう絶対に犬は飼わないと決めたのだと言っていた。

温厚な父ではあったけれど、今にして思えば、出張中の父はこの時、少しホームシックになっていたのかもしれない。

私は仔犬を、父が飼っていた犬の名前と同じジマと名付けた。この頃はちょうど家庭にもテレビが普及し、アメリカのホームドラマ「アイ・ラブ・ルーシー」や青年医師を描いた「ベン・ケーシー」等が人気だった。中でも私は毛足の長い綺麗で賢いコリー犬が活躍する「名犬ラッシー」がお気に入りです。毎週楽しみに観ていた。日本ではまだコリー犬は珍しかったけれど、ジマの母犬はこのコリー犬によく似ていた。

我が家のジマは賢く元気な犬で、かけっこをすると、私を追い越し、勢いあまって居間の網戸を突き破り、庭

に転がり落ちたりした。またドライブが好きで、走る車の窓から体の半分も乗り出し、毛並みをなびかせ風をきっていた。きっと自分が走っているつもりだったのだ。

犬は家の中で一緒に生活していると、人の感情が分かるようにナイーブな犬になるのかもしれない。

ジマは私が泣いたりするとそつと傍に来て座ったりする優しい犬でもあった。

そんなジマも十二才になった頃、虫に刺された為か皮膚炎になり、その後遺症で自慢の毛がだいぶ抜けてしまった。体力も随分落ちてしまい母の手編みで名前のロゴの入った編み込みセーターを着ていた。

ある日、珍しく夕食を食べなかった、そんなことは今まであまり無かったし、朝になっても起きて来なかったので心配になり見に行くと、湯たんぼの横で静かに横たわっていた。起きないし何も言わない！

私は何か食べさせたくて、冷蔵庫から持ってきたお気に入りの練乳のチューブをジマの口元へつけてみた。

いつもなら喜んで舐めるはずが反応は無く、目は閉じたままだ。

それでも何かをしなくては。水が良いかと自分の口に水を含み、ストローをジマの口に差し込んだ。そおっと水を吹き入れた。すると前足、次に後ろ足を、ぐーんと伸ばし、まるでけのびをするように全身を伸ばした、

気持ちよさそうに。

そのまましずかに息絶えた。

私はもう犬は飼わないと誓った。



永住町を通り過ぎた文人たち

長谷川 修

永住町ながすみまちは六十年前に消滅した旧町名で、上野と浅草のはほぼ中間にある。現在の住居表示は台東区元浅草であるが、鳥越神社の氏子神輿に名をとどめるだけでなく、地元では縁起の良い名前として今も親しまれている。

この町にゆかりのある昭和・平成の文人たちの足跡を訪ねてみたい。

永住町は職人の町で、居職の人も多かった。池波正太郎は六歳の時、離婚した母と一緒に永住町の実家に帰り、銚子チシマ職人の祖父に育てられた。地元の小学校卒業後は日本橋の株式仲買店に奉公し、戦後は、区役所に勤めながら新聞社の懸賞小説に応募を続け入選を果たす。

文筆家としてのスタートは脚本で、長谷川伸に師事し「新国劇」の座付作者兼演出家として活躍した。その後時代小説に転じ、『鬼平犯科帳』、『剣客商売』、『仕掛人

藤枝梅安』の三大シリーズは好評で、その多くがテレビドラマ化された。また、エッセイも多く、映画評論、食べ歩き、欧州の紀行、日常の生活等、幅広い分野に味わい深い文章を残す。更にスケッチも良くし、週刊誌の連載小説に自らの挿絵を添えたこともある。

池波のエッセイでは、永住町界隈での子供時代の遊びや近所との付き合いに、人情豊かな世界が描かれ懐かしい。また、六十年前の永住町の名前が消えた際には、官僚のご都合主義、下町文化の破壊と非難した。

永住町はお寺の町でもある。町内にはお寺が十寺以上あるが、永六輔はその一つ最尊寺の次男に生まれた。

永の活躍は、多方面にわたる。先ずは、大学生時代のアルバイトとして放送作家から始まった。時代はテレビの創成期に当たり、『光子の窓』や『夢であいましょう』等のプロデュースを手掛けるが、その後の活躍の場は専らラジオに移す。二つ目には、作詞家としての活躍がある。作曲家中村八大とのコンビの「上を向いて歩こう」や「こんにちは赤ちゃん」は今でもよく歌われている。

三つ目に文筆活動がある。短文のエッセイが多いものの『大往生』は岩波新書として空前絶後の大ヒットとなった。四つ目に社会活動があり、中でも「尺貫法復権運動」(曲尺かねてんや鯨尺の製造や使用が違法扱いになり、困っている職人を救う運動)には力を注ぎ、成果を挙げた。

二十年ほど前、筆者の勤務先が永住町にあった頃の話である。電柱の貼り紙に、寄席「永住亭」、肝煎きまじり永六輔、場所は最尊寺本堂とあったので出かけた。若手の落語や色物と永のトークショーに、檀家の女性が入れてくれた緑茶付きで料金三百円は楽しかった。

永住町は浅草にも近く、芸人の町でもあった。井上ひさしは、右の二人のように永住町に住んだ経験はないが縁は深い。大学生時代のアルバイト先は浅草のストリップ劇場「フランス座」の文芸部だったし、先妻西館好子の実家は鳥越だ。作品に、短編小説『浅草鳥越あずま床』や西浅草が舞台の戯曲『きらめく星座』があつて、井上が永住町を通り過ぎたことは間違いない。

文人井上は、多方面にわたって質量ともに第一級の業

績を残した。劇作家としては、生涯に六四本の戯曲(大半は歌と踊り入り)を残しただけでなく、井上の戯曲のみを上演する劇団「こまつ座」を創立し主宰を務めた。ただ井上は戯曲においては遅筆で(戯名は「遅筆堂」、公演中止や開演の初日延期は数多く、違約金の支払いで劇団の経営は苦しかっただろうと推察する。小説では長編、短編を問わず多く書いた。『吉利吉利人』や『四千万歩の男』は長編であるが、明快な文章にユーモアを含んで読みやすい。エッセイでは、書評、映画評、日本語論、文章読本等それぞれ興味深いものがあり、社会評論では「憲法九条」や「コメ問題」でぶれない論を張った。

井上は色紙を頼まれた時、「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを面白く」と書いた。信条をその通り実践したと言えよう。

三人はそれぞれに作家の枠を超えて広く活躍した。江戸時代の文人にも通じる、権威に対する反骨精神と囚われない心を共有する。

大國のはざまに生きたサヴォイア家

松浦 俊博

イタリアの都市には、統一の立役者であるVE（ヴィットーリオ・エマヌエーレ）二世、カヴール、ガリバルディの名を冠する通りや広場が多い。一八六一年のイタリア統一は国民の誇りを取り戻す出来事だったのだろう。ローマの名所パンテオン（万神殿）にはVE二世とその息子であるウンベルト一世の墓があり、国民から敬慕されているように見える。

しかし、イタリア統一を成し遂げたサヴォイア家は、VE三世時代にファシズムに抵抗できず、さらに無条件降伏から終戦までの混乱を招いたことを批判された。そして、一九四六年の国民投票では君主制廃止と共和制への移行が決まり、イタリアから追放された。

現在の当主ヴィットーリオは八十五才で、たびたび刑事件を起こしてきた問題児である。イタリア政府はサヴォイア家が王政復古を行わないことを条件に帰国を許

可し、彼と長男のフィリベルトはそれを受け入れた。議会は二〇〇二年にサヴォイア家当主の入国禁止法を撤廃した。国外追放から実に五十六年後のことである。

似たような境遇のハプスブルク家では、第一次世界大戦敗北後に当主はオーストリアを脱出しヨーロッパ各地で亡命生活を送った。政府はハプスブルク家の入国には王朝との絶縁が必要としていたので、現当主のカールが西ドイツで誕生した直後の一九六一年に、父オットーは政府の指示通りに宣誓し四十三年ぶりに帰国できた。

近代のサヴォイア家はイタリアのピエモンテとそれに隣接するフランス・スイスの一部を支配しており、東には神聖ローマ皇帝を輩出してきたハプスブルク家が、西には領土拡大に野心を燃やすフランスのブルボン家があった。東西両国の成立は一〇世紀であり、十一世紀初めに成立したサヴォイア伯国とはほぼ同時期だ。地味なサヴォイア家は大国に翻弄されながら対峙してきた。

国王や貴族は称号を気にし、貴賤結婚を避け少しでも格上の位を得ようと奔走する。サヴォイア家君主も十一

世紀には既に「伯爵」だったが、十二世紀にはフランスやポルトガルに王妃を送り込み、十四世紀の英仏百年戦争ではイギリス・フランス・神聖ローマ帝国などの間でうまく立ち回り、「公爵」の位を与えられた。

十八世紀になると、スペイン継承戦争ではイギリスやオランダから資金提供を受けて、ハプスブルク側で勝利し、ユトレヒト条約によりシチリア王国を手に入れた。

ここで称号も公爵から国王に変わった。ハプスブルク家により、七年後にサルデーニャ王国と交換させられたが国王の身分は維持した。十八世紀にはブルボン家との結婚が多かったのに、十九世紀になると帝政が続いていたハプスブルク家との結婚が増えていった。

十九世紀初めのウィーン会議後に、カルロ＝アルベルトは領土拡大を目指しオーストリアに宣戦したが敗北し退位した。後を継いだのがVE二世である。フランスのナポレオン三世をうまく利用して、ロンバルディア地方や中部イタリア諸国を手に入れ、イタリア統一後にはヴェネツィアとローマを併合し、国父と慕われた。

息子のウンベルト一世時代は王政廃止を求める動きや社会運動が活発化し、彼はミラノでの虐殺事件が原因で一九〇〇年に無政府主義者に暗殺された。

次にイタリア国王に即位したのはVE三世で、二つの世界大戦を経験した。ムッソリーニを首相に任命し、大戦中の一九四三年九月の休戦のあと、中部より北はナチス・ドイツの支配下、南部は連合国・国王・バドリオ政権の支配下に分かれ、イタリアを分断に陥れた。そしてナチス・ドイツの支配下にあった地域ではイタリア人同士が戦う状況になってしまった。

戦後、君主制維持のために息子のウンベルト二世に譲位したが、国民の支持は得られず、君主制は四代八十五年間で幕を閉じた。この原因はVE三世の失政にあったといえる。

現在ヨーロッパに王国は七つあり、すべて立憲君主制を敷いている。イタリアに戻ってきたウンベルト二世の息子と孫は王政復古をしないと宣誓しているが、今後どのような動きをするのだろうか。

細谷博さんを偲んで

塚田 實

細谷さんは仲間からはホッさん、ペン川柳会では柳会の損得さんと親しみを込めて呼ばれていた。

大学ではフランス語を専攻し、フランスをこよなく愛し、カラオケで興が乗ると「枯葉」を原語で歌いこなし、フランス語でのエピソードの一つは森英恵さんとの出会いだ。彼女がバリ服飾界にデビューしようとしたとき、森さんの姪がフランスを代表する夕刊紙「パリソワール」記事の翻訳を依頼してきた。「pret-a-porter」（高級既製服）をどう日本語に訳すかで悩んだ末、森さんと協議の上、「プレタポルテ」のカタカナ表記にすることにした。今ではこの言葉は広辞苑にも載るほど定着している。この辺の経緯は『悠遊』十九号に詳しい。

大のジャズ好きでもあった。その知識の深さ幅広さは、『悠遊』十六号「モンマントル、ジャンゴ、外人部隊、犬」

や十七号「ビル・エヴァンスを知らなかったジャズ通がいた」に知見が披露されている。

仕事では電子顕微鏡など科学機器を世界中に売りまくる気鋭の営業マンだった。その課程で生きたウィルス画像を、世界で初めてフランスのグルノーブルで開催された世界電顕学会で紹介したこともあった。

OBペンクラブでは主にペン川柳会で活躍された。いつも軽妙洒脱な川柳を投句され、中には最優秀句に選ばれた句もいくつかある。

群れがイヤ言う奴ばかり徒党組み（題…群・群れる）
身を削る度合いで決まる吟醸酒（題…酒）

若い頃肺結核で片肺になり、人より六年も遅れて日立メデイコに入社、その後も何回も病気に見舞われたものの、持ち前の明るさで克服、会社生活を全うされたものの、晩年のがんには勝てず昨年八月亡くなられた。

創作短編



油彩画 塚田 實

大塚 喜子

仲冬の洛北は、刈り取られた稲の上を微かに動く風の音以外何もない。文久二年孝明天皇から蟄居を命じられて、四年が過ぎる公卿岩倉具視に、大矢登志子は会おうとしている。木立に分け入ると、背の低い白壁が見えてきた。

櫛巻き結びの髪に簪を挿し、何時もと変わらない身繕いは、華美なことを好まない登志子の性分そのままである。裕の銘仙の襟元と褙を揃えると、従ってきた下男から風呂敷包みを受け取って、しっかりと胸元に抱えた。

家領僅か一八〇石の岩倉は、二十九歳の時、権力者の知遇を得たいと、関白を三十年間にわたって務める五撰家筆頭の鷹司正道の歌道の弟子となり、翌年に近習と称される孝明天皇の側近となった。

嘉永六年にペリーが来航すると、幕府と朝廷に緊張が走った。天皇は関白職を鷹司正道から、従前より幕府を支持していた九条尚忠に替える以外は何も決められないでいた。

九条は天皇に（条約調印を幕府に白紙委任する）とする勅答案を示したがこれに対して岩倉は「今般の危機への対応は朝廷が主体となるべきだ。従前のように政を幕府に一任してはいけない」と言い、御前で五時間にわたり（神州万歳堅策）と自らが命名した意見書を読みあげた。関白は勅許案の撤回を余儀なくされた。

勅許を得ないで、アメリカと通商条約を締結した幕府に悲憤した水戸・薩摩の浪士に桜田門で大老の井伊直弼が暗殺されると、岩倉は「幕府の弱体は望まない」と言っただけで、和宮の降嫁を建策し、天皇がこれを受け入れ急ぎ挙行された。

天皇の岩倉への信頼が厚かった一方で、急伸攘夷派の公家や志士らは岩倉を幕府と通じて和宮の降嫁に及んだのは許すべからざると言っただけで、洛中洛外遠くは山陰まで

朝廷と幕府・薩摩・長州が入り乱れる暗闘が続いた。天皇は懸命に弁護に努めたが、万策尽きて岩倉ら十数名の公家に「洛北への追放の命」を出した。蟄居した岩倉は実相院で落髪して友山と名乗ることを余儀なくされている。

岩倉は立ち上がって障子をあげ、楓と、その横の小ぶりな松に目をやりながら

「大矢殿は和歌に長けているそうな」

「和歌を学んでおりますが隠居の身でございます。それほどでも御座いません」

「して、国はどちらで」

「はい、出雲の松江でございます」

「ほう、出雲から歌を学ぶために京にこられたのか？」

「はい。歌詠みは、京に出てみたいと思うものです。

二年前、家業の（たたら）から離れました。王貫峠が難所ですが、出雲は遠くは御座いません」

「王貫峠といえば後鳥羽上皇が」

「はい、さようでございます。隠岐の在所で我が松江

藩がお守りしました」

【我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け】

岩倉は庭の松に目をやりながら居住まいを直して上皇の歌を詠んだ。

「凛々しいお歌でございますね。隠岐の民は上皇様を今もお慕いしています」

話題が歌に始まったことは幸いで、気が付けば入り口に控えていた茶坊主はいない。登志子は風呂敷の結びを解いて、出雲塗の菓子鉢に入れて持参した『山川』を御前にさし出した。

「これが世にいう出雲の『山川』ですか」。岩倉は頬を

緩めて、懷紙を取り出し、手に取って口に含めた。

「美味しい」。平坦な声だが威厳がある。

出雲の鉄師の娘として育った登志子は、子供の頃から書や和歌を仕込まれ、十八の齡で同じ鉄師の家に嫁いでからは、夫共々平田学派（篤胤）の国学に夢中になり、いつしか心に勤王の火がついていた。

「ところで、いまはどうに」

「はい、三条麩屋町の伊勢屋の裏に家を借りて住んでいます」

麩屋町の座敷三間ほどの寓居が登志子の根城である。

京に出て間もなくの頃は、物珍しさもあって、歌詠みに行くと言いながら名所見物に出かけていたが、登志子の本来の目的は別の所にあつた。

最初に接触したのは平田学派に通じる長州藩士だつた。その伝で紹介の輪は石州藩士や公家にまで広がり、登志子は京で急速に尊王攘夷の運動に引き込まれた。

田舎女とはいえ、登志子には藩士や公家に負けない学問がある。加えて財もある。気さくな性分で、出入りする志士たちに食や酒を振る舞い、共々車座になつて天下国家を論じた。自分だけしか知りえないことも多くあつた。果たして岩倉は悪漢なのだろうか否、何か腹が有るのではないか。尊王派の議論は延々として止まらない。岩倉の本心がどこに有るのか掴みようがない。志士たちは「岩倉の腹を探るには歌詠みばあさんがいい」と言いだした。もとより登志子は断らない。志士たちの期待を

背負つて岩倉に会いに来ているのだ。

茶坊主が茶を入れ替えて部屋をでると

「岩倉様は今の幕府をどうご覧になつていらつしやいますか？」さりげなく、しかし、いきなり切り込んだ。岩倉はこの問いかけを遮らず、怒りもせず、二つ目の『山川』を懐紙におくと、ゆっくり庭に顔を向けた。さやかに風の音が聞こえても、障子の松の影は揺れない。果たして岩倉は登志子の問いにどう答えるのだろうか。登志子も岩倉同様、庭の風の音に耳を傾けた。

「大矢殿はどう見る？」

「私のような一介の女が時世に口出しするのは憚れることでございます」

「一介の女が危険を冒してまで、このような所に出入りするとは思わない」。声には抑揚がなく、平明でありながら威力がある。攘夷急進派から回された登志子が、何を企んでいるか引き出そうと岩倉は考えを巡らせている筈だ。

「昨日、鳥取藩の池田慶徳殿が津和野の侍医（森静雄）を伴って訪ねてきた」

「慶徳藩主が此方にいらしたのならば、鳥取藩は朝廷側につくと態度をきめられたのでしょうか？ 慶徳さまは徳川慶喜將軍の兄上であられるのに……」

「そのようなことではない。半年前に生まれた侍医（森静雄）の男子の命名を私に頼みに来たのだ。その子には独の国で医の術を学ばせたいとも言っていた」

登志子は拍子抜けしたが仕方なく

「それで……」

「林太郎と命名した。森林太郎と命名したのだ。ははははは。笑い声に引き摺られて、思わず岩倉と目が合ったその目に警戒心は見えず、口元も結びきっていない。続けて岩倉は

「慶徳殿は山陰で徳川の直轄藩が朝廷と幕府側に別れて武力で戦えば、死者の数が增えるばかりだ。自身が山陰を護り、攘夷を成し遂げると言っていた」

「しかし、尊王攘夷の志士達は誠の攘夷は、先ず幕府

を倒さなければならぬと言います。幕府に加担している岩倉様は、天誅として命を狙われています。慶徳さまは將軍の兄上です。幕府と戦われることはない筈です。慶徳さまは朝廷側とこそ戦われるご覚悟でありましょう」

「正面から政権を取り戻そうとすれば、必ず武力で抵抗される。それは是非とも避けたいのだ。後鳥羽上皇の御代と今は違うのだ。もし武力で争うとなれば、諸侯は二百数十年の徳川への恩義があるから幕府側につくだろう。何より避けなければいけないのは国内の内乱に付け込んでくる外敵の侵入だ。外敵の侵入があれば、非力な帝がお一人で全責任を負う立場にお立ちになる。それは是非とも避けたい。

今幕府は帝のお力にすぎるべきだ。幕府が朝廷の敵になつてはいけない。双方にとって今が好機なのだ。私が命名した森林太郎が独国で医術をならう時も来よう。皇嗣祐宮の文の筆勢が強くなって、今では字の不揃いもない。ご立派にご成長されている。

大矢殿、良く聴けよ。攘夷が目的ではない。政権が一

つになることが重要なのだ。まずは朝廷の方針を幕府が実行することが肝要で、外敵の侵入は決して許してはいけない。慶徳殿も全く同じ意見だ。慶徳殿は江戸や伏見で弟の徳川慶喜将軍とまみえている。慶徳殿は朝廷とも幕府とも戦いたくないのだ」

「然らば、武力で幕府を倒さずに平和裏に政権を朝廷に戻すべくお働きなのですね。さようでございますか」

「ほう……大矢殿、先ほど迄の険しい顔つきがゆるんでいきますな。歌詠みとは名ばかりであった。一つも歌を披露してくれないではないか？」

「婆の歌など他愛ないものでございます」

「菓子は美味かった。思うに『山川』ですっかり大矢殿に騙されてしまったぞ。岩倉は庭に降りて、木犀の小枝を折ると菓子鉢の上に置いた。

「風呂敷に包んで持っていかれよ。麩屋町の志士たちへの土産にせよ」

登志子は小枝を風呂敷に包んだ。

一ヶ月後、登志子は「孝明天皇が死去した」と知った。年が明けると九条忠久ら五十人の公家衆は赦免されたが、朝廷内で（天皇毒殺説）が囁かれ、岩倉が完全に自由の身になったのは遅れる事一年、王政復古のその日であった。直ちに明治天皇より新政府の参与に任命され、政権内の中枢の位置を占めた。

池田慶徳は明治政府の版籍奉還、廃藩置県で岩倉を補佐し、明治四年に岩倉が特命全権大使として欧米に派遣されるのを見送ると、津和野から上京した森静雄一家を支え、林太郎が東京大学医学部の本科生になったのを祝って明治十年鳥取県知事として亡くなった。

岩倉は明治十六年に病を得て五十九歳で死去。国葬として挙行された葬儀の日に、登志子は再び実相院を訪れ、夕日にほんのり赤みを帯びる白壁の前で深く頭を下げた。

星に願いを

内藤 真理子

「もしかして僕もヤングケアラークかな」

ハヤトはヤングケアラーク真つ最中の山村響子に自信なげに声をかけた。中学一年になった僕だけど、小さい時から二人の妹と遊んでやらなくちゃならなかった。

山村はお爺さんの介護で度々学校を休む。久しぶりに学校に出てきた山村に何か言いたくて言葉をかけてしまったのだ。

「そうだね。小さい子を放つてなんておけないものね」
山村は妙に大人っぽくそう答えて笑った。

僕の家は父さんも母さんも働いているから、朝早く家を出てしまう。でも、近所に住んでいる母方の婆ちゃんは母さんが家を出る前に来て、僕や妹たちの面倒を見てくれる。

婆ちゃんは初孫の僕をととても可愛がっている。

「ハヤト、婆ちゃんはハヤトが一番好きだよ。なんて優しい子なんだろうね。本当にいい子だね。婆ちゃんはハヤトといるときが一番幸せだよ」と口癖のように言っている。

僕も婆ちゃんが大好きだ。

三歳年下のみずぶが生まれてから、その後二年経ってカエデが生まれても、婆ちゃんの「ハヤトが一番好き」を聞かない日は無かった。

やがてみずぶもカエデも「ハヤト兄ちゃんが大好き」と言つて、僕が幼稚園から帰るのを待つようになった。そして小学生になってからも……。

「優しくていい子」と言われ続けている僕は、どこかで期待に応えなければ、と思つていたのだろう。急いで帰つてきては、おままごとや、お人形さんごっこを付き合つてやつた。

婆ちゃんや妹たちといつも遊んでいると、友達とはほとんど遊べない。野球をやらないかと誘われても、みんなに入つて行けないのだ。もう付いて行けないのだ。

「これだつてヤングケアラーク被害だよ、被害にあつ

ているだろう、僕」。山村にそう言うと、

「そんなの自分のせいだよ」と笑われた。

「お婆ちゃんが見てくれるのなら任せておけば良いじゃん」

「僕がやらなかったら婆ちゃんは大変だよ。婆ちゃんはいつもありがとうばかり言っているよ。山村はお爺さんの介護、それこそ大変だろう」

「うん。うちは母子家庭でしょう、母さんが働いているから、介護の人は来てくれるけど……私もやらないと駄目なんだよ。おむつだって替えるよ」。

「それこそ、介護の人に全部やつてもらえないの」

「なかなかね。うちは経済力も無いし……」

「ふーん」

♪ キンコンカンコーン ♪

「ああ、授業がはじまつちゃう」

山村はニコニコしながら教室に向かっている。

「学校に来られて良かったな」僕は山村の為にそう思った。

それから暫くたった雨の朝、婆ちゃんは傘をさして自転車に乗り、家に来る途中に自動車にひかれて死んでしまった。

その頃は、末の妹のカエデも小学生になり、自分とは自分で出来るようになっていたから、婆ちゃんは時々しか来なくなっていた。そして来るといつもの、

「ハヤト、ありがとうね、みずぐもカエデも何でも自分で出来るようになって……、ハヤトのお陰だよ。婆ちゃんがここに来られなくなっても、お星さまになって大好きなハヤトをいつも見守っているからね。ハヤトは中学生になったのだから、何でも好きなことをしていいんだよ。婆ちゃんはいつでもハヤトを応援しているよ、フレイフレイ頑張り！ って」

婆ちゃんは今すぐ星になることを知っていたのだろうか。ハヤトは空を見上げながら思った。

一番輝いている星、明けの明星宵の明星、あれだよ！
婆ちゃんは金星になったのだ。

「僕は野球部に入れるだろうか？」

ハヤトは空を見ながらつぶやいた。

金星はいつにも増して輝いている。そして、ハヤトは中学校の野球部に入った。

婆ちゃんはハヤトが野球をやってみたくらいと思っていたことを知っていたんだ。

やがて時は経ち、ハヤトは高校生となり、甲子園のマウンドに立っていた。

頑張って高校野球の強豪校に入学し、野球部に入部、甲子園出場の切符を手に入れたのだ。

一回戦、ピッチャーハヤトの頑張りが光って、二対一で勝利を勝ち取った。

その日はもちろん、宵の明星を見上げながら婆ちゃんに報告した。

「ありがとう、頑張ったよ！」

ハヤトの隣には応援に来てくれた山村響子の姿があった。

婆ちゃんは、山村響子の介護も応援してくれていた。

ハヤトも響子もいつも星を見上げて

「婆ちゃん、頑張るから応援して下さい」って……。

ありがとう、お星さま

ありがとう、婆ちゃん



綾子の初夢（絵画も大事な共通項）

福本 多佳子

珍しく夢を見た。しかも元旦の朝。「初夢だ」と綾子は思った。景子と泰子が明るい花園で楽しそうにスケッチをしていた。「なんで貴方達二人が一緒にいるわけ？」と叫ぶ綾子に「貴方も後期高齢者入り、無理しないのよ。念願のプロヴァンス旅行でもしてきたら」と言う。

（運転好きな彼女たちが生きていたら、楽しい三婆フランス・ドライブ旅行を実現出来るのに）と想像したからであろう。そこで初めて三人の大事な共通項の一つが「絵画」と気づいた。

私が絵を始めた頃、高校時代から美術部員の景子は「貴方は体育会のノリで描いている」と言っていた。死期を迎えた泰子は病室での沢山のスケッチ・水彩画を残し、若い頃の体験記『インスブルック留学記』と共にご主人が製本した二冊は私の本棚に収まっている。

私、山田綾子が夕方の成田空港に到着したのは二〇〇二年、正月明けの一月七日。すぐ上の姉、由紀が車で都心のホテルに迎えに来ていた。急ぎ病院へ、病室へと急いだ。足裏を揉んであげると、頭が持ち上がり、母の目が私を捉えた。翌早朝、母の死を知らせる電話が鳴った。葬儀に出席した夫、ジムが帰り際、しばらく滞在予定の私に乳癌検査を勧めアメリカへ戻った。近くの病院で検査を受けると、医師と看護婦が深刻な表情で「乳癌です」（癌だからって、死ぬわけでもなし、何でこんな風に伝えるわけ）と思った。「乳癌ですって」と姉たちに言うと、実家に住む姉、美希が「お母さんが貴方を日本に帰らせたのね」と一瞬、涙ぐんだ。

ジムにメールを送ると「どんな治療を考えている？ 医師に質問したいからメールアドレスかFAX番号を教えてください」と言ってきた。当時、日本ではEメールアドレスを持っていない人が多かった。「先生は高齢だし、Eメールなんて使っていないと思う」と躊躇すると「何言っている。だったら、質問事項を添付するから、プリントして先生に記入してもらえ」と言う。

シートを読んでもみると、多くの質問は選択肢から答えを選べば良い。洪々ながら病院の受付に行き、担当医師に手渡してもらおうよう依頼、二日後受け取りに行った。

ジムに送り返すと「次の診察日には僕も行く」と電話してきた。バイオプシーの結果を前に医師と話しあった後、「あんな保守的な治療法では駄目だ。他の病院へ行こう。あるいはテキサスのMDアンダーソン癌センターが一番良い」と言う。(母の葬儀を終え、これから姉たちと諸雑務と相続問題に追われるというのに……)

その夜、アメリカでのテニス友達から「ジムさんも来ているなら飲みに行きましょう」という電話があった。彼のお父様は、分野は違うが高名な医師、癌病院を紹介してもらえないかと尋ねた。「うーん、父は体調を崩していて……。父の愛弟子に当たる医師で僕もよく知っている方に聞いてみましょう」。その翌日「駒込病院か癌研究所であればすぐ予約入れてくださるそうです。受診希望日をお知らせください」というメールが来た。早速ウェブサイトを読んでみた。駒込病院の乳腺外科は積極

的に海外の学会に出席、英語のサイトが充実していた。(質問するのは患者本人では無く、ジムなのだから)と駒込病院の予約をお願いした。

当日、柔和な笑顔の女性医師が迎えてくださった。達者な英語で「ご希望のネオアジュバントで癌細胞を小さくしてから手術という治療でも、手術を先にして後で化学治療という方法、どちらにも対応できます」

医師の説明にジムは満足していた。さらに先生は「K先生はバリ滞在中です。直接質問したければEメールアドレスを差し上げますから、送ってみたらどうですか。すぐに返事もらえると幸いですよ」とおっしゃった。

ジムがアメリカで勉強してきた最新乳癌治療法についての質問メールを送ると、翌朝、長いEメールでの回答が届き、ジムが感激していた。それ以降、治療方針は全てK医師とジムとのやりとりで決定された。

最初の入院の翌日、腋窩リンパ節郭清手術が実施された。手術が終わリストレッチャーの上でまだ朦朧として横たわっていた私にK医師が「今、摘出した組織を見たくないですか?」「いいえ」と答える私。「ご主人は?」

「待合室に来てはいるはずですが」「そう、じゃ彼に見せてこよう」と嬉しそうな声でその方向に急ぐ医師を目の縁で追いながら（やれやれ、優秀で立派な医師である前に、彼はまさに科学者だ）と思う瞬間だった。九つのリンパ節が切除された。

乳癌病棟は女性天国、長期入院から短期入院患者までお互い情報交換に忙しい。「あら、貴方はCEF治療を済ませたらハーセプチン点滴になるわけ？一番効果的らしいわね。私はHER2マイナスだからハーセプチンは使ってもらえないの」等々、治療法を熱心に勉強している女性が多く勉強になった。ある女性はテキサスでの治療を希望したが「東京に同じ治療をする病院がある」と駒込病院を勧められたそうだ。術後の数回にわたる入院中にあらゆる段階の入院患者と病室を行き来して話したことで、現在必要な知識は得られたと私は満足だった。

夕食がベッドに届いた頃、第一回抗癌剤投与が行われた。点滴が終わるなり、夕食を済ませテレビ室へ入るとS医師が座っていた。話し始めると「あれ、山田さん、今日が初回の抗癌剤ですよ。何とも無さそうですね」

と言う。（あら、具合が悪くなったりするのかしら？）その後、隣の病室へ遊びに行くと、ベテラン患者が元氣な私を見て驚いたように言った。「あんた今日が初回でしょ。何とも無いんだ。ラッキーだね」

翌朝、医師の回診前から身支度を済ませ、迎えに来た姉二人を見るなり、「お腹すいた。これから築地にお寿司食べに行こう、私をご馳走する」と言うと、戸惑い気味な表情の姉たちと築地へ向かった。お寿司をつまみながら誰からともなく翌朝ゴルフに行くことが決まった。翌夕方、伊豆に住む長女、沙知が「誰に電話しても繋がらなくて、何か起きて病院に戻ったのかと心配したわ。ゴルフ場にいたから携帯電話切っていたわけね。呆れた」と怒っていた。この先も抗癌剤の日は病院へ送るという由紀に「朝は電車で行くから大丈夫。お言葉に甘えて帰りは宜しく」と頼むと、四週に一度の点滴後には由紀が来てくれていた。いつも長時間の点滴待ちで空腹の私を乗せ、レストランへ直行する日々だった。

「用事でアメリカへ戻りたいのですが」とK医師に言

うと「うーん」と言いながらも免疫が下がる期間を避ける日程を提示してくださった。事務所の業務確認と友人への挨拶だった。私の乳癌発症を聞くなり「毎日、貴方の家に通って世話をするからアメリカで治療を受けたら？」と提案してくれたアート仲間の家を訪問。隣の牧場内を散策中、ヤギたちの集団に巻き込まれ、流石に極楽トンボの私も眩いた。「抵抗力が下がっている時にこんなに沢山の動物に触れてはいけないわ」

姉たちと両親が残した箱根の家へ草むしりにも行って来た。真夏だというのに、私には一度も蚊が寄ってこない。化学薬品入りの血を嫌ったようだ。

抗癌剤が済むと、手術。そして放射線治療が始まった。定期検診の席で「いたって軽いですね」と感心したように放射線科の医師が言った。「はあ？」と思った私は入院中に知り合った女性に廊下で出会い質問した。辛そうに「乳首の皮膚まで爛れて、剥けて痛い」と訴えていた。

医師の言葉の意味がわかった。私の皮膚には何も変化が見られない。一連の治療が終わると同時に、母亡き後の姉たちとの作業も終了。アメリカへと戻った。

K 医師からの手紙を手に私はアメリカの病院でのハーセプチン投与が始まった。青年医師は「日本の医師からの指示通りにしますね」と優しい笑顔だった。病院へは事務所から車で十分ほど、ここでは予約時間通りに始まり、予定通り終了、すぐ仕事に戻る。明るい部屋で二、三名が肘掛がついたソファーにゆったりと腰掛け、ハーセプチン点滴を受ける。可愛いプリント柄の看護服姿のナースが「何が飲みたい？ コーヒー、ジュース？」と聞く。コーヒーを飲みながらナースと会話、ゆったりとした時間を過ごした。

女性医師がハーセプチン投与中はカルシウムを補強した方が良く薬を出してくれたのは良いが、甘いチョコレート味。「こんな甘い物、苦手」と言う。「あら、どうして？ 美味しいじゃない」と言いながら骨密度検査を実施、「あら、素晴らしい！ いらないわね」カルシウム剤は一度で終わった。

日本ではリンパ節切除の患者はリハビリとして腕を上へ伸ばし、回す運動を勧められた。リンパ節除去により

発生する痺れの予防だ。アメリカへ戻るなり、毎週テニスゲームに勤しんでいた私は、何の問題も感じることなく過ごしていたが、仕事に追われ二週間ほどテニス試合の機会を逸すると上腕と脇下にむずかゆさを感じ始めた。テニスのサーブは腕を上に乗せ、回すわけだからまさに最良のリハビリとなっていたわけだ。

年一度の定期検診は日本で受けていた。電話でのK医師の診察予約は至難であったが、帰国日をメールすれば良いと言ってもらった。「乳癌の最大の原因はストレスだよ」とK医師が言った。「先生、かかった当時よりも、今の方がずっとストレスフルの毎日です」と答えると、先生も沈黙。人生、頑張らざるを得ない時期がある。

或る日、長年の親友、景子が「私も癌の仲間入り」と電話してきた。彼女も会社を辞め、画廊ビジネスを始め、何年も苦労続きだった。景子の食道癌手術後、見舞いに行ったら私は初回の抗癌剤点滴で意識不明に陥った景子が病棟の受付センター横の看護ベッドに寝かされているのを見てびっくりした。眠り続ける景子に寄り添っていた

が、帰宅時になっても意識は戻らなかった。

一度きりの抗癌剤投与で退院した景子は一年後、放射線治療で再入院、抗癌剤併用を勧められていた。同時期に手術十年目にして再発した私も再手術で入院中。二人は毎日メールで状況報告をしていたが、或る日「やはり抗癌剤は無理、断った」と景子が電話してきた。華奢な彼女に抗癌剤はきつ過ぎた。

もう一人の心の親友、泰子。カナダスキーで意気投合、私にとって久しぶりの体育会系女子友達だった。景子と三人での食事を考えていながら、私のドイツ勤務とその間の彼女の妊娠・子育てで機会を逸した。その後、泰子も会社を辞め、自身のビジネスに邁進の中、白血病に倒れた。アメリカへ戻る前夜、彼女から「半年後にはもういない」と告げられた私は、空港へ行く前に泰子の新居に駆けつけた。「ほら、やっぱりやって来た」とご主人に笑って言う帽子姿の彼女との再会だった。「癌だからと言っただけ、痩せているとは限らないのよ」と懐かしい笑顔で話す彼女のふっくらとした温かさが今でも伝わってくる。

活動報告



写真 野瀬 隆平

何でも書こう会

コロナを機会に始まったZoomによる勉強会も三年目に入ってすっかり定着し、何でも書こう会も対面、Zoom併用方式で、遠隔地の方の参加も得て毎回多くの作品が発表されています。

ただ昨年後半はいつもの代々木オリンピックセンターが改修工事のため使用できなくなり、一時渋谷駅前の施設を利用しましたが、十月以降渋谷区の地域交流センターが使用可能となり、有難く安堵しております。

関係の方々のご尽力に対し厚く御礼申し上げます。

さて書こう会で発表される作品のテーマは文字通り「何でも書こう」ということで、森羅万象、国内外で揺れ動く政治経済から社会の動向、科学技術、歴史、文化、絵画、音楽、さらには宗教、法話、紀行文、食談、雅文、戯文にいたるまで、さまざまな八〇〇字エッセイが寄せられ、それに対して毎回喧々諤々、楽しい半日を過ごしております。

これについては作品の内容もさることながら、自分の考えや気持ち、あるいはその場の雰囲気などをいかに的確に相手に伝えられているか（ひとりよがりにならないか）、検討していかなければなりません。

また同じことを述べるにしても言葉の使い方を工夫して、楽しい表現、ときには遊び心をもって個性豊かでウイットに富んだ作品に仕上げられるよう、皆で切磋琢磨していきたいと思っております。

昨年何人も新しいメンバーが参加されましたが、今年もお知り合い、お友達、ご親族などお誘いいただいて、一人でも多くの方と文章を書く愉しみを共有していきたいと思えます。

どうぞよろしく願いたします。

（プロマネ 大森・志村・児玉・吉田）

掌編小説勉強会

掌編小説勉強会は二ヶ月に一回のペースで奇数月に開催しています。令和五年の十一月には第百回を迎えます。二〇〇七年に濱田優さんと西川武彦さんの発案で始まったそう、足掛け十七年続いていることになりました。

参加者はお互いの作品を勉強会開催の前に予めメールで全員に送り、開催日まで読んでおいてもらいます。毎回、五〜七作品が投稿されます。勉強会開催日には、作者は作品を書いた動機や背景などを説明し、参加者は作品に対する評論や質問をします。参加者はだいたい七〜八人です。コロナ感染症の流行で開催を一時Zoomに切り替えた時期もありましたが、会場での開催も復活しました。今年のコロナの動向は気になるところですが、顔を合わせての開催が出来ることを願いたいものです。

令和四年の作品としては家族の闘病生活を日記風に綴った作品、自分の家族や周りの出来事を題材にした作品、自分の会社生活を回顧した作品、歴史的に有名な人物を

主人公した作品、旅先で得た体験をアレンジした作品、男女間の心の綾をテーマにした心理小説、日本が抱える社会問題をテーマにした作品などがありました。

字数は四千字から一万二千字という目安はありますが、二千字程度のショート・ショートも可です。作者の希望があれば、会員以外の方も見る事が出来る公開サイトにアップしています。昨年も二十作品が公開されており、ご覧になることが出来ます。

小説は字数が多くて、そんな長いものはとても書けないと尻込みする人もいますが、拙い経験からすると次のステップを踏めば、意外に書けるものだと思います。書きたいジャンル（体験、作り話、歴史もの等）を決め、アイデアをメモにして、だいたい字数を想定します。小説のネタは日常の中に転がっていますので、創作のヒントになるかもしれない気になったことはノートやスマホのメモに書き留めておきます。

書いてみたいと思っっている方の入会を心待ちにしています。

（プロマネ 兎玉・内藤）

サロン21

令和四年もサロン21の会合はオンラインにて行い、この方式が定着してまいりました。

令和四年は、何といたっても二月にウクライナ戦争が勃発し、七月には安倍元総理が白昼に公開の場で暗殺されるという大事件に驚かされました。その後の政府、警察、国会、マスコミなどの事件の真相解明への不透明な対応は、改めて日本を覆う闇は深いと感じさせるものでした。ウクライナ戦争は令和四年の年末を迎えても停戦のめどが立たず、ロシアに対する経済制裁の反作用でエネルギー価格が急騰、穀物相場も上昇し、欧州、日本などを中心に国際社会全体が苦しめられています。

サロン21では、ウクライナ戦争の歴史的背景、戦争の裏の主役の金融資本や米国の動向、新しい資本主義とは何か、などについて勉強し、議論を重ねてきました。令和五年も戦争当事国のみならず、米国も中国も欧州も中東も、そして日本も火種を抱えてどう対応すべきなのか、引き続き注視し、研鑽を重ねていくこととします。

令和四年の各月のテーマとプレゼンターは左記の通りです。(敬称略)

| | | |
|-----|--------------------|-------|
| 一月 | グレートリセットの時代に漂流する日本 | 森田 晃司 |
| 二月 | コロナからの出口戦略 | 下山 健夫 |
| 三月 | 新しい資本主義 | 野瀬 隆平 |
| 四月 | 戦意の研究 | 浅井壮一郎 |
| 五月 | 国際金融資本の産業支配 | 森田 晃司 |
| 六月 | ロシアのウクライナ侵略の歴史的背景 | 下山 健夫 |
| 七月 | 参議院選挙 主要政党公約 | 下山 健夫 |
| 八月 | 夏休み | |
| 九月 | 自立国家を目指して | 森田 晃司 |
| 十月 | 「人新生の資本論」について考える | 野瀬 隆平 |
| 十一月 | 米国中間選挙による影響 | 下山 健夫 |
| 十二月 | ウクライナ戦争の歴史的背景 | 児玉 寛嗣 |

(プロマネ 下山・森田)

コロナウィルス騒動もなんとなく落ち着いた世情に、代々木オリピックセンターでの対面句会が再会されたのも束の間、改装による利用休止に伴い、句会の場所を日比谷に移した。

新入会は、三月、浜口須美子さん。オンライン句会でもあり、ご母堂樋口富喜子さんもご参加くださった。

「ご母堂の句、「抱き上げし嬰眠るまま春の雪」「亡姉に似しひと見失ふ梅の寺」など高得点を取られた。楽しい思い出となった。須美子さんは遠方から欠かさずメールでの投句を続けている。六月、松田昌康（俳号ニ文字）さん。ペンフォト句のメンバーとしても活躍中。新人おふたりは毎回句会の活躍がめざましく、句座は刺激を受けている。

日比谷公園を吟行地として十一月の晴れた日を歩いた。ビル街の工事音と冬日が印象深い吟行であった。

プロマネは長くご尽力くださった晃二さんからしずさんへ移り、句会の役割振り分けなど分業化を目指す。

空爆がスマホ画面に街余寒

亀の上の亀に陽当り花の昼

傾ぎる地球の自転麦の秋

夏手套外すピカソの絵の前に

握手して別れ来し街夏灯

秋風や丈を豊かに薔薇の赤

ビル建てる音秋雲を急がせる

アウトバーン 駆く青空に樹氷揺る

萱草の丘の傾るる佐渡の海

中天や巨き雲分け盆の月

石垣の旧きに挑む蔦紅葉

岬より鳥海はるか冬の海

一句目、ドイツの高速道である。抜けるような青空と

樹氷の煌めきは素敵だ。二句目、萱草はユリ科の多年草、

晩夏のころに百合の花に似た花を咲かせる。心地よい沖

からの風を感じる。四句目は、日比谷公園吟行句。江戸城の歴史を彷彿とさせる中七の措辞が効いている。

ポケットに去年の硬貨寒波来る 大津 そうかい

盆梅や玻璃戸を鳴らす湖の風

節介な叔母来る予感春隣

泥んこの子の持帰る田螺かな

老いの日の虚実のあはひ蚯蚓鳴く

一句目、寒さに取出した服のポケットに…忘れていた硬貨が…気持ちも去年に。三句目、節介な叔母さんが好きなのだ…季語の働き。俳句では老いは詠うと言われているが、五句目の老いはなにか俵せそうな緩みがあった心地よい。俳句は向日性が大切というお手本の句だ。

初雪の舞ふ万物は形失せ

黒揚羽ひらりと躲す目鼻先

秋光や天蓋をなす大公孫樹

志村 良知

小春日や柿の木坂の音楽堂

小暗がりなにか揺らすか花八手

一句目、周りのものが形を失くすほど美しい初雪に逢った。三句目、頭上をいちようが覆っている。それは天蓋と呼ぶほど厚みがあり、秋の陽に黄葉している。一本の木を詠って大景である。四句目は、句柄としては大人しい句。その音楽堂の佇まいをことのほか愛する作者。

山鳩のほろろに初日昇りけり

天翔る駒の雪形妙高山

晩春の岬や野馬のふとき尿

落蟬のそだけ刻の止まりたる

朝の日の桜紅葉の葉裏透く

一句目、ほろろは鳴き声である。鳩のくぐもった声と初日が平穏な元旦のめでたさを諾う。三句目、万物が命を謳歌する春、岬の野生馬の尿に生命の力を詠う。落蟬の句は、地上での一夏の短い生を終えようとしている蟬。短さ、激しさのゆえに時をも止めると詠う。

首藤 しずを

敷石に犬が運びし春の泥

高橋 由紀子

クレソンを千切れば沢の音すなり

祭提灯ぼんやり雨の商店街

天高し服さまさまの草野球

我が星の冬の月食む不思議かな

一句目、中七の措辞で泥の量や状態が読み手の経験を

呼び起こす。各句とも、中七の作り方が上手である。五

句目は皆既月食に世の中が騒然としていたのだが、作者

の視線は影で覆い始めたのは自分が立っている地球だよ

と詠う。たしかに細る月よりそのほうが格段に不思議だ。

.....

雨も良し今日が主役のひな人形

内藤 真理子

神田川桜の下を蛇泳ぎ

宴果ての皿洗ふ夕月青し

嘗て来し日比谷公会堂に暮れの秋

吊るし柿干し竿の隅を占め

一句目、雨の日の雛まつりはどことなく詰らない感じ

であるが、作者が名乗ると上五が俄かに元気になる。三

句目も同じ。宴の後の皿洗いはマイナーな仕事であるが、

さぞ楽しい会だっただろうと思う。真理子俳句の醍醐味、

陽気で正直な視線が句座を明るく元気にしてくれる。

.....

池の面や葉々を閉ぢ込む初氷

長尾 進一郎

初雪の躊躇ひながら落ちにけり

初夏や飛沫の光る水車小屋

この池の外を知らない金魚かな

草露を集めズボンのすそ重し

シャッターチャンスを狙う目が俳句を作る時には必要

であるとよく言われる。三句目までは、進一郎俳句の真

骨頂である。金魚・草露の句はそこから冒険している。

季語に自分の感覚を入れている。しかも、金魚も草の露

も句の中で存在感を醸し出している。良い句だと思う。

.....

木の芽風赤く烟れる山毛櫨林
中村 晃也

マスク外し自分の声を取り戻す

新しき泡の生まれる蝌蚪の池

どこからか風どこまでも芒原

音階も曜日も七つ冬の虹

マスクの句では現代の世情を詠い冒険している。自由

自在が晃也俳句の骨頂。マスクは元来は冬の季語。コロ

ナ禍の今、受難の季語である。五句目、大気のきりつと

した冬空に架かる淡い虹の色数と曜日の日数の発見を詠

って面白い。冬の曜日も冬の虹も慌しく軽々と過ぎ去る。

.....

水占に浮かぶ中吉初みくじ
新田 ゆふき

そらいろのデイズニー自転車春一番

夕の雷金魚一閃腹光る

炎天の大杉の蔭終着駅

ちるといふ音の重なる落ち葉かな

二句目、駐輪場などで見る自転車が句になっているのに驚いた。季語で上質な句になった。四句目、映画のE

ピロークのような句である。説明を省いて下五に集約できた。終着駅が効果的。五句目、上五の音はどんな音か、心象の音を聞いたことを思い起こす人は多いだろう。

.....

つくし摘む少女が起点大夕焼け
浜口 須美子

ないしよないしよ耳そばだてるシクラメン

大壺にくるりと百合の背きあふ

実よ爆ぜよ命の限りを生きる母

どこかしら似て通夜の客星が飛ぶ

俳句は発見から始まると言われ、須美子俳句は発見を見逃さない巧みさがある。大夕焼に起点、シクラメンの花が耳、壺に落ち着かない百合、通夜には似た人達が集

る…なるほどと頷かざるをえない。四句目は、母への絶

唱である。季語は無いが引き戻せない切実な刻を詠った。

.....

誰が活けし百合の香や美術室

松田 一文字

神域の木漏れ日纏ひ黒揚羽

日ざかりを傘の影追ふ子犬かな

能楽堂出れば闇裂く稲光

赤とんぼ浮いては止まり竿の先

人っけを感じられない美術室。雑多なトルソーや絵筆

などに混じって生きている百合の香。二句目、黒揚羽の

ゆつたりとした羽搏きは上五の措辞で現世から、どこか

遥かをめざしているように思える。一転、赤とんぼの句

は少年の頃の視線の感覚を手離さない句。自在な句柄。

.....

天女にも魔女にもなれず金魚飼ふ

宮原 風

誰の灯か遠く近くに夕螢

露けしや姉妹相寄り墓終ひ

心字池点字プレートなぞる秋

冬木立一人に一つ影法師

金魚を飼うことと上五中七は一見、関係がない。二物

衝撃という技法。この句の衝撃度合いは秀逸。なつてい

ても金魚を飼っているだろうと思わせる。四句目は日比

谷公園吟行の句。擦れ跡の印象的なプレート。五句目、

冬木立の冬の道に日差しと自分の影法師は離れない。

.....

落ちてなほ稔持崩さず紅椿

森田 元斐

香を孕み垂るる海棠雨の中

残り陽へ金魚のあぶく独り酒

ハイウエーのよぎる貝塚木の実降る

千年の比叡の楠や日向ぼこ

二句目の海棠から垂れる雨粒には香が詰つてゐる。三句

目は金魚のあぶくが夕陽の中を上っていくのを見ながら

のお酒の旨さ。五句目、千年の楠と分ち合う日向ぼこの

贅。元斐俳句の面目躍如、姿勢を正し、季語を立てると

いう基本どおり、視線が真直ぐ句材に注がれている。

ペン川柳

二〇二二年は前年十二月の勉強会から開始した新しいスタイル（投句と投票をメールベースで終え、合評会の場で合評と結果発表）が定着した年でした。

酔深（西川）さんは毎月最優秀句もしくは優秀句に選ばれ全勝でした。一方最優秀句は零門（松谷）さんと火酒（三春）さんが各四回獲得しました。

いつも軽妙洒脱で風刺も効かせた川柳を投稿していた損得（細谷）さんの投句が五月で途切れ、八月にお亡くなりになりました。ご冥福をお祈りします。

酔深（平尾）さんの投句はありませんでしたが、十一月合評会を青葉台で開催したところ、元気に参加してくれました。

今後ともペン川柳会へのご支援宜しく願います。

以下ペン川柳子の活動をご紹介します。

【晃二】

（安藤晃二）

「嘆・嘆く」…疫と役嘆きの空に鯉泳ぐ

「盛・盛る」…盛夏なり避暑は怖いと見栄を張り

「盛・盛る」…盛り一枚ざるを横目の物価高

「洗・洗う」…洗足や池を巡りて交番へ

「降・降りる」…深酒で降車は高尾の車止め

二句（四月「嘆・嘆く」、十二月「降・降りる」）が優秀句に選ばれました。「疫と役」の同音異義語や「足を洗う」をもじった「洗足池」など巧みな発想が印象的でした。深酒で高尾まで行った経験のある人は沢山います。大月まで行った人もいます。

【安兵衛】

（山縣正靖）

「開・開く」…開成は悲願の椅子を守れるか

「温・温む」…独り身で酒を温む人恋し

「三」…一二の三梅桜の次居酒屋だ

「嘆・嘆く」…ウクライナこれ最悪の嘆異抄

「洗・洗う」…洗い髪そういう事もあったよな

二句（二月「温・温む」、十一月「洗・洗う」）が優秀句に選ばれました。「洗髪」は「洗髪が芯まで冷えて……」の歌「神田川」からの発想です。年を経て、瑞々しかった若い頃の振り返りには深い想いが漂います。「独り身」も侘しさが伝わってきますね。

【井波】

（稲宮健一）

- 「開・開く」…野茂開くイチロー名人。パワ翔平
- 「温・温む」…もうい、かい温もり恋し赤提灯
- 「急・急ぐ」…減る急げ子づくりのわざ教え込め
- 「盛・盛る」…盛り付けて奥方様の天気知る
- 「降・降りる」…目がきれいまスク降ろすな今がいい

十二月の「降・降りる」は最優秀句に選ばれました。最初の三句は優秀句でした。大谷翔平の大活躍は日米のファンを沸き立たせましたね。時流を上手く詠み込んでいます。「奥方様の天気」や「マスク美女」など観察が鋭いですね。

【明迷】

（八木信男）

- 「開・開く」…悪夢なら夜に開いたことがある
 - 「三」…目薬を三階からさす西諸国
 - 「香・香る」…コロナ禍で香典泥棒廃業し
 - 「盛・盛る」…盛り塩も見栄張るママはFカップ
 - 「降・降りる」…路地裏の飲み屋で愚痴る降格類
- 六回優秀句に選ばれました。「三階からの目薬」や「見栄張るママ」「路地裏の降格類」など明迷さんらしい豊かな発想です。西側諸国のウクライナ支援策は、ロシアとNATOの直接対立を避けながらの対応なので難しいものがあります。

【だし】

（大野 量）

- 「三」…三指をついたはずだが知らん顔
- 「嘆・嘆く」…コロナ禍も物価で霞み嘆き節
- 「香・香る」…風香る五月の空も過去の夢
- 「急・急ぐ」…『急がずば』痛み感じて九十年
- 「洗・洗う」…風に乗り銀河鉄道身を洗う

三月「三」は優秀句に選ばれました。だしさんの句は説明を聞けばなるほどと感心する句が多くあり、深いものがあります。例えば、「銀河鉄道」も東北新幹線開業により、並行在来線の一部を「いわて銀河鉄道」として運行、作者はそれに乗ったことを詠んだそうです。

【零門】

(松谷 隆)

「開・開く」…子を叱り逃げ道開ける親心

「三」…三ツ星もかなわなは母の味

「急・急ぐ」…こりやばい急に優しくなった妻

「盛・盛る」…お手盛りもだんまり決める議員ども

「和・和む」…平和にも賞味期限があるんやね

三月「三」、六月「急・急ぐ」、七月「盛・盛る」、十月「和・和む」と四回も最優秀句に選ばれました。優秀句も三句獲得しました。家庭を巡る川柳は優しい雰囲気にも溢れています。「お手盛り」やウクライナ侵攻など時事問題も厳しく批判しています。「平和にも」の「あるんやね」の関西弁が効いていますね。

【火酒】

(三 春)

「開・開く」…海鮮を開戦と聞く焼け跡派

「香・香る」…夏祭り色香きわだつ裾さばき

「急・急ぐ」…急かされてもつれる舌の先三寸

「占・占める」…ジジババの会話に占める「アレ」と「アレ」

「洗・洗う」…予報士の「洗濯日和」要らぬ世話

最優秀句に四回(五月「香・香る」、六月「急・急ぐ」、

九月「占・占める」、十一月「洗・洗う」、優秀句にも

六回選ばれました。色気や風刺などを盛り込んで川柳子

を飽きさせません。「アレ」「ソレ」「アレ?」の会話は

皆共通です。それでもわかり合えるのは長く生活を共に

したおかげでしょうね。

【損得そんとく】

(細谷 博)

- 「開・開く」…開会式呼んではいけないと言い逃れ
「温・温む」…温(ぬる)ま湯に浸りきってる日本人
「嘆・嘆く」…短足は生まれ付きだと嘆息し
「香・香る」…残り香を嗅いだだけでも猥褻罪？
「香・香る」…臯月賞風に香るは外れ券

五月まで投句がありました。二月「温・温む」、四月「嘆・嘆く」の二回優秀句に選ばれました。「温ま湯」では日本の将来を嘆いています。後世への戒めのことばとして心に刻んでおきましょう。一方「残り香」では「嗅いただけでも猥褻罪？」と色気を忘れていません。時節を感じさせる川柳が多くありました。

【酪帝めいてい】

(曾山清徳)

- 「開・開く」…開いた口アベノマスクで塞げます
「嘆・嘆く」…八十路入り嘆き節だけ自慢出来
「香・香る」…色香失せ男を超えてたくましく
「急・急ぐ」…わがからだ急所がどこかまだ分からん

「盛・盛る」…お世辞でもお盛んですね言われたい
一月「開・開く」は最優秀句に選ばれました。他の四句も優秀句に選ばれました。「アベノマスク」は時流を上手く捉えています。まさかその後あのような事件が起きるとは想像もできませんでした。「八十路」を詠んだ句が多くありますが、一方「お盛んですねと言われたい」など「まだまだ老いないぞ」の意欲も溢れています。

【酔雅すいが】

(西川武彦)

- 「温・温む」…肌に替え湯たんば抱いて温む夜
「嘆・嘆く」…嘆いても仕方ないかとまた嘆く
「盛・盛る」…盛る薬仕分けに迷う毎食後
「休・休む」…卒サラ後ふと懐かしむずる休み
「降・降りる」…麻雀で学んだ人生降りる味
三句(二月「温・温む」、四月「嘆・嘆く」、八月「休・休む」)が最優秀句に選ばれ、九句が優秀句となり十二月全勝となりました。「八十路」に関する嘆きや、「呆

け」を面白おかしく詠み、「ずる休み」や「麻雀」などサラリーマン人生の思い出を懐かしんでいます。川柳は老いに負けるどころか益々盛んです。

【我々好】

(浜田道雄)

「開・開く」…傘寿の賀胸襟開く友は逝き

「温・温む」…人肌の温み忘れた。パンデミック

「休・休む」…酒旨し肝に休みのヒマはなし

「和・和む」…「アレ」「アレね？」和む会話も認知症

「降・降りる」…定年で閑白降ろされいまは地下

八月「休・休む」が優秀句に選ばれました。「定年で」は家の「亭主閑白」と「管理職」から降りたときの二つのことを巧みに詠み込んでいます。我々好さんはいつとも深い読みから厳しい批評を投げかけ、場の雰囲気盛り上げてくれています。偶には休肝日を、お酒は控えめに。

【拿々】

(塚田 實)

「香・香る」…美人行く残り香追ってついふらり

「占・占める」…場の空気独り占めるイヤな奴

「和・和む」…あの夫婦不協和音で日が暮れる

「洗・洗う」…皿洗い長年やると上手くなり

「降・降りる」…ボス変わり人事考課は急降下

八月の「占・占める」が最優秀句、五句が優秀句に選ばれました。「場の空気……」の合評会ではお互いに「誰のこと」と見合いました。「人事考課」では辛かった会社生活を嘆き、「皿洗い」では定年後の第二の人生を詠んでいます。

川柳経験はまだ浅いですが、これからも向上を目指して川柳に励みます。

(世話人 塚田 實)

ペン・フォト句会

令和四年度もコロナ禍の影響が多少あり、二月の句会は会場に集合しない「ネット付け句」を行いました。それ以外の月は、八月を除き毎月会場に集まり、平常通り「付け句」と「自由句」の両方を行うことができました。過去二年に較べると状況は好転したと言えます。OBペン会員の方の見学参加もありました。

三月には、二〇一〇年にフォト句会を立ち上げられ、長年プロマネとしてご指導下さった中村晃也さんへの感謝会を、フォト句メンバーで行いました。

句会会場については、これまで使用していたオリンピックセンターが改修工事に入ったため、九月からは下山さんに手配頂いた渋谷区の地域交流センター「代々木の杜」で行っています。新宿駅や代々木駅からも比較的近く、メンバーに好評です。

さて各回の「付け句」のお題写真は、当月担当者が知恵を絞って出題しています。ちなみに今年度のお題写真

と出題者は次のようになりました。

| | | |
|-----|---------------|----|
| 一月 | ティラノサウルス模型 | 清水 |
| 二月 | ロダンの「考える人」像 | 下山 |
| 三月 | 自然観察園の池の幼稚園児 | 長尾 |
| 四月 | 芝生で遊ぶ幼稚園児 | 中村 |
| 五月 | 倉敷の美観地区 | 松田 |
| 六月 | 軽井沢の諏訪大社分社 | 矢澤 |
| 七月 | こおろぎ缶詰の自動販売機 | 三春 |
| 九月 | コップに活けた山牛蒡 | 安藤 |
| 十月 | 五能線木造駅の巨大土偶模型 | 大越 |
| 十一月 | 日立海浜公園のコキアの丘 | 清水 |
| 十二月 | 行田市の田んぼアート | 下山 |

これらのお題写真と、その「付け句」の入選作品は、ホームページのフォト句サイトに出ていますので、ご興味ある方は是非ご覧下さい。

今後も和気あいあいの活動を続けていきたいと思えます。見学参加は何時でも歓迎です。

(プロマネ 松田昌康・長尾進一郎)

英語を読もう会

英語文献（報道記事、論説等）メンバーが輪番制でプレゼンを行った。

| 開催月 | 題 名 | 担当名 |
|------|---|-----|
| 1 月 | WHAT TO EXPECT FROM NASA'S JAMES WEBB SPACE TELESCOPE LAUNCH The Verge, 米国技術系ニュースサイト。 ハッブルの100倍の能力を備え、NASAにより12月25日に打ち上げ | 安藤 |
| 2 月 | Why would Putin invade Ukraine?, Washington Post 米国 Naval 大学院助教授 Matovski 氏 | 安藤 |
| 3 月 | Why cage-free eggs becoming norm: It's what people want 人間側からの要求 | 安藤 |
| 4 月 | "Once-in-a-life-time" find: A Roman-era mosaic floor in London 「一生に一度」級の考古学的大発見、古代ローマ | 安藤 |
| 5 月 | BlackRock and Vanguard are taking over centralized food production technologies and will have near-total control over the future food supply in America 金融資本の食料支配 | 森田 |
| 6 月 | Russian diplomat quits over Ukraine war, AFP 5月23日ジュネーブ在のロシアの国連代表部参事官ボンダーレブ氏辞任。ウクライナ侵攻で自国政府への強烈的な抗議 | 安藤 |
| 7 月 | Los Angeles Times Essential California, 6/22 米国 IT 企業のコロナ禍対応。米国一般同様 Layoff 等がある | 下山 |
| 9 月 | Uranium Risks Becoming the Next Critical Minerals Crisis, Bloomberg 世界のウラン資源採掘確保の問題 | 安藤 |
| 10 月 | U.S. can successfully manage the China challenge Joseph Nye, Project Syndicate 米中間の技術競合、政治経済対立の先鋭化の現状に、今後如何に両国間径の安定化を目指すか。Aspen 安全保障フォーラム直後に寄稿 | 安藤 |
| 11 月 | Ukrainians showing there is light at end of tunnel Francis Fukuyama Prof., Stanford University 核戦争の危険は、62年のキューバ危機以来、権威主義諸国の力は衰え、対照的に世界の民主主義諸国は、驚くべき団結と底力を示す Fukuyama 氏が意見を開陳する | 安藤 |
| 12 月 | Fed to keep rates higher for longer to cut inflation, Powell 米国連邦準備委員会議長ジェローム・パウエル氏会見記事、同氏主導の金融政策は、経済不況を招かないレベルでの金融引き締め政策を続けながらソフトランディングを目指す | 安藤 |

何でも読もう会

昨年は「書を捨てて街に出よう」とばかりに夏・冬の二回、文学散歩を企画しました。夏は鷗外没後百年を記念して鷗外・漱石ゆかりの文京区千駄木、本郷界隈を散策し、湯島天神前の「鳥つね」で打上げました。

冬は一葉や荷風が描いた浅草・向島を散策の予定でしたが、気象条件が悪く延期となりました。

作品に書かれた場所を訪れて往時に思いを馳せるのは楽しいですね。

「読もう会」は、年の後半から芥川賞受賞作品を集中的に読んでいます。適当な長さなので負担が軽くて済み、助かります。芥川賞は時代とともに内容が変化していきませんが、目下昭和三十年前後を中心に読んでいます。戦後文学が輝いた時代です。

二〇二二年を振り返って

二月 『イワン・デニーソヴィッチの一日』

ソルジェニツィン

『あいびき』

ツルゲーネフ

三月 『今夜誰の隣に眠る』

唯川 恵

『花火』『銀座界隈』

永井 荷風

四月 『新釈遠野物語』

井上ひさし

『バベットの晩餐会』

ア・デイネーセン

五月 『忍ぶ川』

三浦 哲郎

『網走まで』

志賀 直哉

六月 『変身』

カフカ

『灰色の月』

志賀 直哉

七月 『文学散歩（千駄木、本郷）』

九月 『ラストドリーム』

志水 辰夫

『愛撫』

庄野 潤三

十月 『プールサイド小景』

庄野 潤三

『芽むしり仔撃ち』

大江健三郎

十二月 『或る「小倉日記」伝』

松本 清張

『アメリカン・スクール』

小島 信夫

十二月 『文学散歩（延期）』

（世話人）首藤 静夫

ホームページ関連

昨年度からホームページ（HP）担当になり、改めてHPのことを考えました。HPはOBペン活動の拠り所となるものです。何でも書こう会の活動をしていても、小説・俳句・フォト句・サロン21などのグループの活動をHPにより知ることができ、また、掲示板を活用すれば普段顔を合わせない会員と意見のやりとりもできます。自分の作品をアップすればデータ保存されず、さらに著作者検索までできます。「否が応でもポケ防止にも役立つ」といいことづくめ。

数年前にHPの構成を調べましたが、なかなか複雑です。まず、公開部分と会員専用のアクセス制限がかかった部分に分けられています。それぞれに多数のフォルダー（ディレクトリ）があり、データが整然と区分・保管されています。古くは2009年から現在までの多くのデータ蓄積があります。

管理運用はリブラス（株）様に全面依頼していますが、

費用を抑えるための工夫が必要です。二年ほど前まで作品やトピックス欄はテキスト言語（HTML）に変換されていましたが、PDF化などにより変換をなくして作業を簡略化しました。変更当初は多少の混乱もありましたが、会員の皆さんの高い順応性のお陰で、ほぼスムーズな運用ができるようになりました。今後も更に使い慣れていたいただき、御活用をお願いします。

HPに期待されることは、会員の利便性向上と新入会員の増加だと思えます。前者に関しては、これまで皆さんが力を入れてこられましたので満足度の高いレベルに達しているようです。後者についてはこれからです。昨年からはHP各部分へのアクセス数の分析をしています。「ご案内」と「クラブの活動内容紹介」へのアクセス数が少ないので、今後はHPをより魅力的にしてOBペンをもっと積極的にPRしていきたいと思えます。

皆さんやリブラス（株）様の知恵をいただき、適時に費用を抑えて改善していきたいと思えますので御協力のほどよろしく願います。（プロマネ 松浦俊博）

クラブ活動を振り返って

令和四年（二〇二二年）

（会員への敬称略）

一、役員

前年十二月に役員の変更が行われ、左記の新役員が以後二年間、会の運営に当たることになった。

| | |
|-------------------|-------|
| 名誉会長 | 西川 武彦 |
| 理事・会長 | 塚田 實 |
| 理事・副会長（講演会、新年会担当） | 三 春 |
| 理事・運営委員長、IT担当 | 志村 良知 |
| 理事・HP、渉外担当 | 松浦 俊博 |
| 理事・財務担当 | 大森 海太 |
| 理事・会計担当 | 長尾進一郎 |
| 理事・事務局長 | 首藤 静夫 |
| 監事 | 清水 勝 |

二、年度方針

コンセプト「明るく楽しいOBペン活動」

1. 新規会員の獲得
2. 各プロジェクト・勉強会の活性化努力を継続
3. 月例会の工夫、活性化（出席者増）
4. ホームページの活用
5. インフォーマル活動の奨励

三、各月の活動報告

在籍数…一月一日現在 六十名

一月例会（十三日）Zoom

・新会長の年頭挨拶、活動方針等発表

・新春特別公演 コロナ禍のため延期となった。

・新年会（十三日）中止

二月例会（十七日）Zoom

・会員講演『荒野詰也』気候危機と食料危機の今後

三月例会（十七日）Zoom併用

・会員講演『中村晃也』

『ペンクラブでの活動〜フット句10年を振り返る〜』

四月例会(二十一日) Z o o m併用

・会員講演Ⅱ内田満夫

『シニアがハイカイ(徘徊)して何が悪い!』

・新宿御苑花見の会

・『悠遊』二十九号刊行

・新会員Ⅱ松浦純子

五月例会(十九日) Z o o m併用

・『悠遊』二十九号合評会

六月例会(十六日) Z o o m併用

・会員講演Ⅱ荒野詰也

『二〇五〇年カーボンニュートラルへの

次世代原発開発―リーダ各国の取組み―』

七月例会(二十一日)

・納涼落語会 入船亭扇治師匠独演会

八月(夏休み)

・ご逝去Ⅱ細谷 博さん(退会)

九月例会(十五日) Z o o m併用

・会員講演Ⅱ富岡喜久雄

『日本の北方防衛の歴史』と『八王子千人隊の北海道派遣』

・新会員Ⅱ宇敷辰男

・青少年センターの改修工事に伴う代替教室確保の問題

十月例会(二十日) Z o o m併用

・会員講演Ⅱ森田晃司

『安倍元首相暗殺と仮死状態の日本』

・活動の中心を渋谷区施設「地域交流センター代々木の杜」と「地域交流センター代々木」に確保

十一月例会(十七日) Z o o m併用

・会員講演Ⅱ松浦純子

『西洋と東洋の文化交流

～7世紀から18世紀まで

宣教師たちがもたらしたもの～』

十二月例会(十五日) Z o o m併用

・会員講演Ⅱ浜田道雄

『東南アジアの陶磁～私のコレクションから～』

・退会Ⅱ斉藤征雄さん、田原 敬さん

二〇二二年は、会員数六十名でスタートした。

コロナ禍は三年を経過したが、終息の兆しは見えない。さまざまに変異しながら人間社会を脅かしている。しかし、コロナとのつき合い方になれ、発生当初ほどの恐怖感は薄れてきた。落ち着いて行動するスタイルが定着しつつある。

ペン活動は、教室とオンラインを併用するパターンがほぼ定着した。Zoomによる交流はまだ快適とは言いがたいが、一つひとつ改善を図りたい。それにもかかわらず遠地の会員に積極活用されているのは心強い。

二〇二二年度のトピックは、活動場所の大幅変更である。長く利用してきたオリピック青少年センターが大規模改修工事に入るため利用できなくなり、新しい教室探しに奔走した。さいわい渋谷区の区民施設、「地域交流センター代々木の杜」と「地域交流センター代々木」が使えるようになり、年の後半からここでの活動が始まっている。交通至便な上に清潔、安価な教室である。新天地を得られ誠に喜ばしい。

望まれるのは新しい仲間である。二〇二二年は二名の

若い方が加わった。早速エッセイに、講演にと活躍されている。地道な勧誘活動であるが、全員でわいわい盛り上げてやっていきたい。
(事務局長 首藤 静夫)



会 員 名 簿 (五十音順)

| 氏 名 | 主 な 活 動 分 野 |
|--------|--------------------------|
| 浅井 壮一郎 | サロン 21 |
| 新井 良侑 | エッセイ |
| 安藤 晃二 | 書こう会、英読会、俳句、川柳、フォト句、他 |
| 池田 隆 | 書こう会、エッセイ、サロン 21、読もう会、写真 |
| 池松 孝子 | 書こう会、エッセイ |
| 市川 忠夫 | 書こう会、英読会、サロン 21 |
| 稲宮 健一 | 書こう会、エッセイ、川柳 |
| 上田 信隆 | エッセイ、サロン 21 |
| 宇敷 辰男 | 書こう会、エッセイ |
| 内田 満夫 | 書こう会、エッセイ、会員談話室 |
| 大越 浩平 | 書こう会、エッセイ、フォト句 |
| 大津 隆文 | 書こう会、エッセイ、俳句 |
| 大塚 喜子 | 掌編小説、書こう会、読もう会 |
| 大月 和彦 | 書こう会、読もう会、フォト句 |
| 大平 忠 | 書こう会、エッセイ、サロン 21、会員談話室 |
| 大野 暁 | 川柳、エッセイ、サロン 21 |
| 大森 海太 | 書こう会、エッセイ |
| 川口 ひろ子 | 書こう会、エッセイ |
| 川村 邦生 | エッセイ |
| 木村 敏美 | 書こう会、エッセイ、絵 |
| 荒野 喆也 | 書こう会、エッセイ |
| 児玉 寛嗣 | 書こう会、掌編小説 |
| 清水 勝 | 書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、フォト句 |
| 志村 良知 | 書こう会、エッセイ、読もう会、俳句 |
| 下山 健夫 | エッセイ、サロン 21、英読会、フォト句 |
| 首藤 静夫 | 書こう会、読もう会、俳句、絵 |
| 杉浦 右藏 | エッセイ、サロン 21 |
| 曾山 清徳 | 英読会、川柳 |
| 高橋 由紀子 | 俳句、エッセイ |
| 塚田 實 | 書こう会、掌編小説、川柳、絵 |

| 氏名 | 主な活動分野 |
|--------|-----------------------------|
| 都甲 昌利 | 書こう会、エッセイ |
| 富岡 喜久雄 | 書こう会、エッセイ、掌編小説、英読会、読もう会 |
| 内藤 真理子 | 書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、俳句 |
| 長尾 進一郎 | 書こう会、俳句、フォト句、写真 |
| 中村 晃也 | 書こう会、俳句、フォト句、写真 |
| 西川 武彦 | エッセイ、掌編小説、サロン21、川柳、写真 |
| 西川 知世 | 俳句、エッセイ |
| 新田 由紀子 | 書こう会、読もう会、俳句 |
| 野上 浩三 | 書こう会、掌編小説 |
| 野瀬 隆平 | 書こう会、掌編小説、サロン21、読もう会、英読会、写真 |
| 長谷川 修 | 書こう会、エッセイ |
| 馬場 真寿美 | 書こう会、エッセイ、掌編小説 |
| 浜口 須美子 | エッセイ、俳句、写真 |
| 浜田 道雄 | 書こう会、エッセイ、読もう会、川柳、写真 |
| 原田 信 | 書こう会、エッセイ、会員談話室 |
| 平尾 富男 | 川柳、書こう会、掌編小説、サロン21 |
| 福本 多佳子 | 読もう会、掌編小説、絵 |
| 藤原 道夫 | 書こう会、エッセイ |
| 松浦 純子 | 書こう会、エッセイ |
| 松浦 俊博 | 書こう会、エッセイ |
| 松谷 隆 | 書こう会、エッセイ、掌編小説、読もう会、川柳 |
| 松田 昌康 | フォト句、エッセイ、俳句 |
| 三 春 | 書こう会、エッセイ、読もう会、川柳 |
| 宮原 由利子 | エッセイ、読もう会、俳句 |
| 森田 晃司 | サロン21、英読会、エッセイ、俳句 |
| 八木 信男 | エッセイ、川柳、絵、会員談話室 |
| 矢澤 正二 | エッセイ、フォト句、写真 |
| 山縣 正靖 | エッセイ、サロン21、川柳、絵 |
| 吉田 真人 | 書こう会、エッセイ |

編 集 後 記

▽『悠遊』誕生から三十周年。西川知世さんの紹介エピソードによると、『悠遊』は全員賛成の挙手と笑顔と感動の中で生まれ、その熱気が会を支える礎石になりました。また、発刊以来クラブがどんどん和やかな会になったそうです。今も会員の八割以上が投稿し、普段は十七文字に専念している会員も『悠遊』ではエッセイを書いてくれる。OBペンの家族のような結束力の源なのでしょう。（松浦）

▽十七文字以上の長文を書くことが苦手の私です。そんな私が『悠遊』の編集に携わって、二年と少々になります。刺激と勉強をさせていただいている日々です。改めて、会員の皆様の造詣の深さと力に感動しています。（宮原）

▽首藤さんの後任にと、急遽編集委員を仰せつかりました。校正は初めてのことで、会員の熱のこもった原稿を、一字一句、句読点、濁点まで点検することは、気を使い大変なことと痛感しました。それでも、会員の古い記憶や多彩なエッセイ、掌編小説、記念号寄稿を、誰よりも早く丁寧に読ませてもらったことは、楽しい経験でした。（長谷川）

企業OBペンクラブ同人誌

『悠遊』創刊三十周年記念号

二〇二三年四月一日発行

発行者 企業OBペンクラブ会長

塚田 實

印刷所 新灯印刷株式会社

東京都新宿区水通町二一五（〒一六二〇八一）

TEL 〇三―三二六〇―九二六一

連絡先 企業OBペンクラブ事務局

首藤 静夫

Eメール: obogencclub@gmail.com

クラブURL: <http://www.obpen.com>

入会案内はクラブURLホームページの「ご案内」

見学希望・入会希望は事務局まで

口座 三菱UFJ銀行海老名支店（409）

企業OBペンクラブ（普通） 1086096



夏念仏
雑念を断つ
紅き花

矢澤 正二

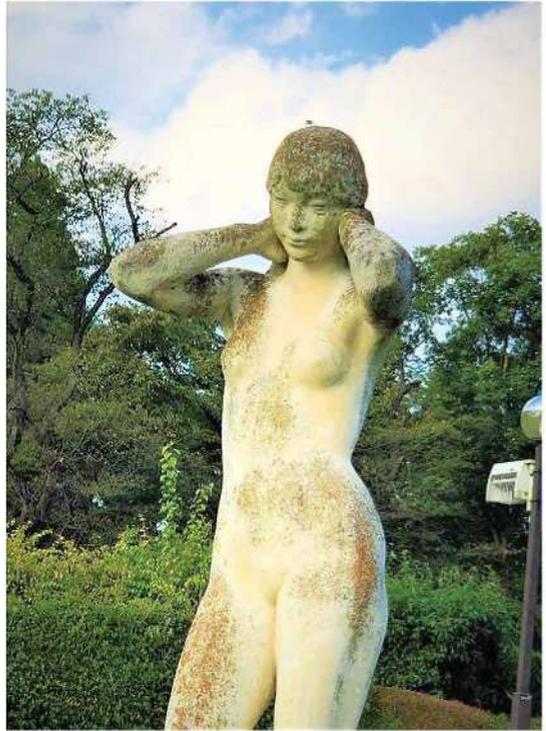
まっしぐら
おやつとゲーム
待つ我が家

長尾 進一郎



白雲や
青を映して
秋暑し

安藤 晃二



遊くときは
黄金の秋
しやがれ声

三 春



空と海
丘の草にも
秋の色

松田 昌康

秋日差す
報国寺や
山の音

大越 浩平



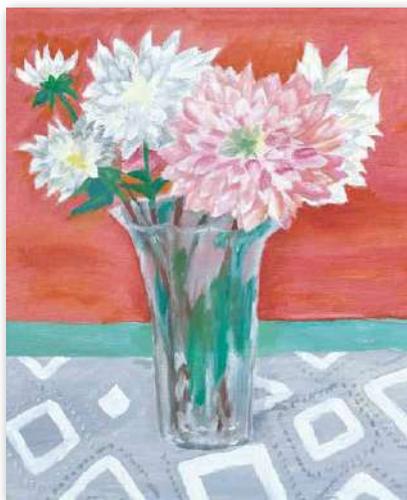
みちのくの浜
静謐にして冷涼

中村 晃也





首藤 静夫



塚田 實



木村 敏美



福本 多佳子



安藤 晃二